

科目コード	210013		
科目名	応用言語学 教科学習と言語能力：CLILの可能性		
担当者	沖原 勝昭		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	『学習言語とは何か』バトラー後藤裕子，三省堂，2011，9784385365114 『英語教育政策』矢野安剛ほか，大修館書店，2011，9784469142327 『Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics』Richards, J. and R. Schmidt, Longman, 2010, 9781408204603 『Multilingual, Globalizing Asia: Implications for policy and education』Lisa Lim and Ee-Ling Low (eds.), AILA Review, Vol. 22, 2009, 9789027239945 『The Roles of Language in CLIL』Ana Llinares, Tom Morton and Rachel Whittaker, Cambridge U.P., 2012, 9780521150071 『Dalton-Puffer, C., T. Nikula and U. Smit (2010). Language use and language learning in CLIL classrooms.』John Benjamins Publishing Company. 978-9-0272-0523-0.		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

応用言語学の主要な目標は、外国語（英語）の教授・学習過程を解明し、より効果的な理論と実践についての知見を提供することである。本科目では、応用言語学の諸分野を鳥瞰しつつ、焦点を学校教育における言語（母語と外国語）の役割に当て、特に、教科学習と言語学習の統合（Content and Language Integrated Learning:CLIL）を目指す教育方法の可能性と問題点を考察する。

2. 教育・研究の個別課題

本授業では、以下のテーマについて、理解を深める。

- ・「話しことば」と「書きことば」のちがい
- ・教育における言語の役割
- ・言語能力の構成要素
- ・教科学習に必要な言語能力
- ・学習言語の指導と評価

3. 教育・研究の方法

本授業は、参考書から関連する論考を選び、その講読を中心として進める。はじめに、教員がテーマを導入し、解説を加える。受講生はテーマ毎に分担し、テキストの要約を発表し、全員で討議する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

担当を含む授業参加度（50%）、レポート課題（50%）

5. 授業予定

- 第1回 応用言語学とは：イントロダクション
- 第2回 教育制度と言語の位置づけ
- 第3回 外国語教育政策
- 第4回 教科学習言語
- 第5回 BICSとCALP
- 第6回 CLILの背景
- 第7回 CLILの定義
- 第8回 CLILの実践：日本
- 第9回 CLILの実践：東南アジア諸国
- 第10回 CLILの実践：ヨーロッパ諸国
- 第11回 CLILの評価
- 第12回 英語教育とCLIL：まとめ
- 第13回 学生の課題発表：CLILの類型と特徴
- 第14回 学生の課題発表：CLILの条件整備
- 第15回 学生の課題発表：CLILの可能性

6. 留意事項

受講者のニーズ、人数などにより、受講者と相談の上、授業予定を変更することがある。

科目コード	210015		
科目名	英語プレゼンテーション特論 Seminar on Presentations in English		
担当者	York Weatherford		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『The Art of Public Speaking』 Lucas, Stephen E., McGraw Hill, 2011, 978-0-07-131467-1		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

The goal of this course is to introduce you to the basic theories and practice of public speaking focusing on general academic presentations and help you improve your speech/presentation skills in English with technology while enhancing critical thinking skills. You will learn how to formulate specific purpose statements, how to analyze and adapt to audiences, how to organize ideas and construct outlines, how to assess evidence and reasoning, how to use language effectively, etc.

2. 教育・研究の個別課題

- ・ Attend classes regularly. (Being late for more than 1/2 of the class hour means one absence or being late three times to the class equals with one absence.)
- ・ Read the weekly reading assignment and complete the assigned homework.

3. 教育・研究の方法

The lecturer will provide a blended teaching/autonomous learning style to cover the content in class and beyond the class. Students are expected to complete the weekly reading assignment and homework while being ready for planned presentations after doing research on a chosen topic.

4. 成績評価の基準及び評価方法

Final Grade (100%) = Assignments (35%) + Individual/Small Group Presentations (15% x 3 = 45%) + Quality Assessment of the PPT files (20% x 1 = 20%)

5. 授業予定

- | | |
|---|---|
| <p>第1回 Introduction, Including Assessing Your Presentation Skills
・ Textbook Reading Assignment #1 (pp. 3-27)
・ Writing Requirement for WK02: Self-Introduction including a research plan</p> | <p>第2回 Presentation #1 on Self-Introduction & Chapter 1: Speaking in Public
・ Textbook Reading Requirement #2 (pp. 29-45)</p> <p>第3回 PowerPoint Workshop & Chapter 2: Chapter 2: Ethics and Public Speaking
・ Textbook Reading Requirement #3 (pp. 47-61)</p> <p>第4回 Chapter 3: Listening
・ Textbook Reading Requirement #4 (pp. 63-75)</p> <p>第5回 Chapter 4: Giving Your First Speech
・ Textbook Reading Requirement #5 (pp. 77-95)</p> <p>第6回 Chapter 5: Selecting a Topic and a Purpose
・ Textbook Reading Requirement #6 (pp. 97-117)</p> <p>第7回 Chapter 6: Analyzing the Audience
・ Textbook Reading Requirement #7 (pp. 119-139)</p> <p>第8回 Chapter 7: Gathering Materials
・ Textbook Reading Requirement #8 (pp. 141-163)</p> <p>第9回 Presentation #2: Individual/Small Group Presentation and Peer Evaluation & Chapter 8: Supporting Your Ideas
・ Textbook Reading Requirement #9 (pp. 165-182)</p> <p>第10回 Chapter 9: Organizing the Body of the Speech
・ Textbook Reading Requirement #10 (pp. 185-203)</p> <p>第11回 Chapter 10: Beginning and Ending the Speech
・ Textbook Reading Requirement #11 (pp. 205-219)</p> <p>第12回 Chapter 11: Outlining the Speech
・ Textbook Reading Assignment #12 (pp. 221-237)</p> <p>第13回 Chapter 12: Using Language
・ Textbook Reading Assignment #13 (pp. 239-257)</p> <p>第14回 Presentation #3: Individual/Small Group Presentation and Peer Evaluation & Chapter 13: Delivery
・ Textbook Reading Assignment #14 (pp. 259-275)</p> <p>第15回 WK 15 - Chapter 14: Delivery Course Assessment</p> |
|---|---|

科目コード	210019		
科目名	アカデミックリーディング&ライティング		
担当者	Robert Kritzer		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M1		
テキスト	『MLA 英語論文作成ガイド』		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

This course is designed to help students efficiently read academic English prose and produce academic research papers in English.

2. 教育・研究の個別課題

Emphasis will be placed on logical and effective presentation of information in support of an argument. Students will learn the conventions of English academic writing, particularly with regard to the citation and listing of sources.

3. 教育・研究の方法

Students will read, outline, and summarize scholarly articles of their choice in the area of their concentration. After having written and revised several drafts, they will also submit two 5-page papers on an academic topic in their area. Students will read and critique the writing of their partners.

4. 成績評価の基準及び評価方法

Attendance, classroom performance, summaries, outlines
30% Papers 70%

5. 授業予定

- 第1回 Introductory class
- 第2回 Outlining: article I
- 第3回 Summarizing: article I
- 第4回 Outlining: article II
- 第5回 Summarizing: article II
- 第6回 Outlining: article III
- 第7回 Summarizing: article III
- 第8回 Introduction to MLA style, Outline for Paper I
- 第9回 Revision of first draft of Paper I
- 第10回 Peer critique of second draft of Paper I
- 第11回 Teacher conferences on Paper I
- 第12回 Paper I due, Outline for Paper II
- 第13回 Revision of first draft of Paper II
- 第14回 Peer critique of second draft of Paper II
- 第15回 Teacher conferences on Paper II (Paper II due the following week)

6. 留意事項

Class will be conducted in English. Students must attend regularly.

科目コード	210020		
科目名	応用英語研究方法論		
担当者	小林 順・大川 淳・沖原 勝昭・橋堂 弘文・小山 哲春・須川 いずみ・杉村 美奈・東郷 多津・Peter Cheyne・吉野 啓子・York Weatherford・Robert Kritzer		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M1		
テキスト	『研究法ハンドブック』高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一 編著, ナカニシヤ出版		
参考文献	適宜指示		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

本授業は、応用英語専攻修士1回生を対象に、大学院レベルでの研究・学問の基礎的な方法論を教授することを目的とする。受講者は、大学院レベルで期待される研究の質を理解し、その達成のために必要とされる履修計画、研究計画、研究方法論、時間管理能力などを習得する。

2. 教育・研究の個別課題

具体的な個別課題として、以下の四つを掲げる：

- (1) 大学院での研究の目的、意義、および期待される質を理解する
- (2) 大学院での研究を計画し、遂行するための能力を養成する
- (3) 大学院レベルでの一般的な研究方法論を理解し、習得する
- (4) 各学問領域における特定の研究方法論を概観する

3. 教育・研究の方法

本授業は、主に以下のような構成となる：

- 第1～4週 講義
 - 第5～12週 Reading assignmentに基づく講義、解説、討論
 - 第13、14週 Guest lecturerによる研究発表および解説
 - 第15週 全体のまとめ、および質疑応答
- 特に第5～12週の授業に際しては、受講者は、前もって課されたReading Assignment（各授業につきJournal article, Book chapter, etc. 1編）を熟読し、授業中の討論に参加する。また、第の授業では、各週に教員が指定するトピックでのShort Paper（250～500 words）が課され、翌週までに提出する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加 25%（出席、および討論への参加等）

Short Paper (10) 75%

（ただし、各paperは各教員が採点する）

5. 授業予定

- 第1回 大学院における研究の質と意義、心構え／応用英語専攻で行う様々な研究のタイプ (小山)
- 第2回 認識論／科学哲学／批評理論 (小山)
- 第3回 Academic integrity (Kritzer)
- 第4回 研究の具体的な進め方／修士論文執筆の時間、作業管理 (小山)
- 第5回 英文学 (小林)
- 第6回 英文学 (吉野)
- 第7回 英文学 (須川)
- 第8回 文学と哲学 (Cheyne)
- 第9回 英語教育学 (橘堂)
- 第10回 英語教育学 (東郷)
- 第11回 英語教育学 (沖原)
- 第12回 英語教育学 (Weatherford)
- 第13回 コミュニケーション学 (小山)
- 第14回 言語学 (杉村)
- 第15回 応用言語学 (小山)

6. 留意事項

特になし

科目コード	210022		
科目名	英語圏文化特論		
担当者	小林 順		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

英語を第一言語とする地域の文化を研究する。地域を特定して、その地域に特有の文化現象を研究課題とする。英語のふるさとイギリスにおける筆記用具の歴史を紐解きつつ、とくに、羽ペンの隆盛に注目したい。同時に、子供たちが学びの場でどのような筆記用具を用いていたのかを調査したい。

2. 教育・研究の個別課題

羽ペンの材料や構造についての調査。鉛筆の進化と子供たちの学び。

3. 教育・研究の方法

研究の方法としてはオンラインを渉猟し課題を解くための手がかりとなる資料・データの読解をすすめる。オンラインという環境を整え、受講者がいずこにいても仮想的クラスにアクセスできる環境のもとクラス運営をすすめたい。

4. 成績評価の基準及び評価方法

オンライン上で研究できるかを問う。オンライン・クラスで成果をあげ得るかが課題。レポート(口頭、文書)、クラスへの積極的係わり。資料の整理が効率的であるか。これらを総合的に判断して数値化する。

5. 授業予定

- 第1回 オンライン辞書など21世紀の文房具、PC、タブレット、スマートフォン等、を用いてオンライン情報・データへのアクセスしてこのクラスの課題を追跡できる状態を整える。(その一)
- 第2回 オンライン辞書など21世紀の文房具、PC、タブレット、スマートフォン等、を用いてオンライン情報・データへのアクセスしてこのクラスの課題を追跡できる状態を整える。(その一)
- 第3回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。“History of Writing Implements”をキーワードとして、Google検索する。検索結果一覧から一つ選び、内容を要約する。
- 第4回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第5回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第6回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第7回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第8回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第9回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第10回 指示したオンライン・テキストの読解と解釈。
- 第11回 成果の発表。
- 第12回 成果の発表。
- 第13回 成果の発表。
- 第14回 成果の発表。
- 第15回 成果の発表。

6. 留意事項

とくにないが、イギリスの特質を見極められるよう共に努力したい。

科目コード	210031		
科目名	英語カルチュラルスタディーズ		
担当者	小林 順		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

応用英語の学問的な基盤の構築という観点から、イギリス文化の実践的理解を図りたい。課題に、「バブル」の語源となった18世紀初頭の「元祖バブル」、いわゆる「南海泡沬事件」(South Sea Bubble)を選び、近代信用制度の発生の歴史とメカニズムを研究するとともに、従来のアナログ資料(書物やマイクロ・フィルムなど)に加えネットワーク上のデジタル資料を利用し、ブロード・バンド時代における課題研究の実践としたい。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) イギリス17世紀後半における国家債務
- (2) イギリス17世紀後半における金融システム
- (3) イングランド銀行の設立
- (4) 土地制度と金融システムの関係
- (5) バブルの膨張と崩壊のプロセス
- (6) バブル清算のプロセス

3. 教育・研究の方法

- (1) 授業方法：インターネットにアクセスした状態でおこなう。ウェブ上に上記「課題」を解明するマテリアルを検索し読み解く。あわせて検索方法や検索結果の蓄積法を体得できるように指導を行う。
- (2) 学習方法：上記「授業方法」に述べた作業を、できる限り自室においてもアクセス状態で、資料の検索と蓄積を継続できるよう努めてもらいたい。

4. 成績評価の基準及び評価方法

オンライン上での発表。プロジェクトの実施。

5. 授業予定

- 第1回 ウェブ利用の意味
- 第2回 元祖「バブル」調査の意味
- 第3回 イギリス17世紀後半における国家債務 (1)
- 第4回 イギリス17世紀後半における国家債務 (2)
- 第5回 イギリス17世紀後半における金融システム (1)
- 第6回 イギリス17世紀後半における金融システム (2)
- 第7回 イングランド銀行の設立 (1)
- 第8回 イングランド銀行の設立 (2)
- 第9回 土地制度と金融システムの関係 (1)
- 第10回 土地制度と金融システムの関係 (2)
- 第11回 バブルの膨張と崩壊のプロセス (1)
- 第12回 バブルの膨張と崩壊のプロセス (2)
- 第13回 バブルの膨張と崩壊のプロセス (3)
- 第14回 バブルと文学者
- 第15回 バブル清算のプロセス

6. 留意事項

インターネットを積極的に利用してもらいたい。同時に、インターネットが万能であるかの誤解を退けてもらいたい。

科目コード	210032		
科目名	翻訳特論		
担当者	小林 順		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

応用英語という観点から、英語のさまざまな表現の実践的日本語訳を試みたい。誰が誰に何を伝達しようとするのか、を把握するところから翻訳作業が始まる。翻訳は自分の受け取ったものを今度は他人に、その人が理解できる言葉に移して、伝達する作業である。文学作品、書簡、新聞・雑誌、その他、実際の文書など、できるだけ多様な対象を取り上げ、英語圏文化の諸相を把握しながら、英語力を養成しつつ、あわせて日本語の表現力の研磨を目指したい。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 対象文献の内容を正確に読み解く英語能力。
- (2) 英語を日本語の観点から照射する能力。
- (3) 理解・把握した内容を日本語で表現する日本語表現力。

3. 教育・研究の方法

文体、仮名と漢字の割合、句読点のつけ方などに留意して正確で、かつ、美しい日本語とは何かを考えてみたい。英語、日本語ともにすぐれた文献をできるだけ多く読み、その表現をあげつろぐことをこころがけたい。

4. 成績評価の基準及び評価方法

クラスでの発表、およびレポートの総合点で判定する。

5. 授業予定

- ・前半はテキストを中心に進め、後半はプリントを活用し、メリハリをつけたい。
- ・仲間同士の比較検討により、切磋琢磨してほしい。

6. 留意事項

オンライン情報を用いたい。マス・メディア、古典的作品、等々。Kindleなどを用いて、イー・テキストの利用を行いたい。安価でアクセスが容易な情報を利用するということがあります。

科目コード	210033		
科目名	映像芸術特論		
担当者	須川 いずみ		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	プリント		
参考文献	<i>Ulysses James Joyce, The Bodley Head, 2001</i> <i>Joyce Annotated Don Gifford, U.California Press, 1982</i> <i>Engendered Trope in Joyce's Dubliners Earl G. Ingersoll, South Illinois Univ. Press, 1996, 0-8093-2016-9</i> <i>Dubliners' Dozen Gerald Doterty, F. Dickinson Press, 2004</i>		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

英語圏の映画を取り上げ、聴解力を高めるなど英語運用力の養成を計ると同時に映画と文学との関係に注目し研究を行いたい。誕生からわずか一世紀にして人間文化の優れた表現を実現するに至った映画の中でも名作として歴史に名を留める小説の脚色をもとに作られた作品を取り上げ、原作となった小説の正確な読解を基礎に原作と映画との比較を行い、文学的表現と映像表現との関係の研究を目指したい。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 映画という映像メディアの把握
- (2) 原作を読む英語力の育成
- (3) 文学作品を読み解く能力の養成
- (4) クリティシズムの扱い方

3. 教育・研究の方法

- (1) 原作を読んでから映画を観る
- (2) 積極的授業の参加を求める
- (3) 発表、レポートあり

4. 成績評価の基準及び評価方法

平常点 (40%)、発表 (30%)、レポート (30%) で総合的に判断する。

欠席、遅刻は減点対象である。欠席が3分の1を超過した場合、原則として評価しない。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 『ダブリン市民』“Araby”を読む
- 第3回 “Evelyn”を読む
- 第4回 “The Boarding House”を読む
- 第5回 “A Painful Case”を読む
- 第6回 “A Painful Case”を読む
- 第7回 “A Painful Case”のVTR鑑賞
- 第8回 批評研究
- 第9回 批評研究
- 第10回 批評研究
- 第11回 *A Handful of Dust*を観る
- 第12回 イヴリン・ウォーの作品研究
- 第13回 文学と映画学を考える
- 第14回 クリティシズムを読む
- 第15回 まとめ等

科目コード	210044		
科目名	英文学批評特論		
担当者	大川 淳		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	授業開講前に指示する。		
参考文献	授業時に適宜指示する。		

1. 科目の研究目標

本授業では、批評理論の習得を通じ、文学作品を解釈する批評する方法論について学ぶ。文学作品研究には批評理論の習得が必要不可欠であり、また多岐に及ぶ批評理論の現在の動向を理解することも必須である。本授業では、従来の批評理論の流れを概観し、それぞれの理論が生まれた背景や、また特性について幅広い知識を習得することを目的としている。

それに加えて、個々の文学作品研究において、批評理論を援用し分析する力を養成することも研究目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

- ・多種多様な批評理論の概観を通して、20世紀以降の批評の流れを把握できる。
- ・個々の批評理論・研究方法の特性を正確に理解する。
- ・個々の批評理論・研究方法が生じた背景や立脚する概念についての知識を習得する。
- ・個々の批評理論・研究方法の妥当性と限界について分析する。
- ・個々の批評理論・研究方法を文学作品の読解に応用する。
- ・修士論文に援用する批評理論・研究方法を見出す。

3. 教育・研究の方法

批評理論・研究方法の妥当性・限界についてクラス全体のディスカッションを行う。担当学生だけでなく、その他の学生も予習は必須である。ディスカッションに備えて自分の考えについてまとめておくこと。

4. 成績評価の基準及び評価方法

- ・平常点 15% (出席状況・授業態度・ディスカッションへの貢献度等、総合的に判断する)
- ・口頭発表 35%
- ・期末試験 50%

5. 授業予定

- 第1回 序論
- 第2回 フォルマリズム
- 第3回 新批評
- 第4回 構造主義1 (理論編)
- 第5回 構造主義2 (応用編)
- 第6回 神話批評
- 第7回 精神分析批評
- 第8回 ポスト構造主義1 (理論編)
- 第9回 ポスト構造主義2 (応用編)
- 第10回 ジェンダー批評
- 第11回 フェミニズム批評
- 第12回 ポストコロニアリズム1 (理論編)
- 第13回 ポストコロニアリズム2 (応用編)
- 第14回 新歴史主義批評1 (理論編)
- 第15回 新歴史主義批評2 (応用編)

科目コード	210045		
科目名	近代英国小説特論		
担当者	吉野 啓子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『Tess of the d'Urbervilles』 Thomas Hardy, Penguin Books		
参考文献	その都度通知する。		

1. 科目の研究目標

英国の18世紀以降の小説に焦点をあてる。小説に対する興味を深めると同時に、原文の読解力を高め、そこから広がる洞察力を深めることを目的とする。その作品に表れる人間関係や心理描写などの理解を深め、作者の観点や技法などにも焦点をあてる。そして登場人物それぞれの人生や社会への処し方などにも触れ、作品全般の理解を深めたい。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 原文を精読する。
- (2) 作品や時代背景の理解を深めるために、また作品内容を多角的な観点から理解するために、参考文献等を読む。
- (3) 討論などで作品を色々な角度から分析する。

3. 教育・研究の方法

- ①作品を精読しながら、内容を把握する。
- ②作品と作者、時代背景などを理解する。
- ③各自の考えをまとめ、討論やレポートなどで認識を深める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

- (1) 受講生は予習が必要条件である。
- (2) 提出物の期限は厳守のこと。
- (3) 成績の基準は、平常点50%、提出物25%、試験25%を目安とする。

5. 授業予定

- 第1回 初日は授業の進め方を中心に詳細の説明
- 第2回 作者、作品について
- 第3回 Chapter 1～5
- 第4回 Chapter 6～10
- 第5回 Chapter 11～15
- 第6回 Chapter 16～20
- 第7回 Chapter 21～25
- 第8回 Chapter 26～30
- 第9回 Chapter 31～35
- 第10回 Chapter 36～40
- 第11回 Chapter 41～45
- 第12回 Chapter 46～50
- 第13回 Chapter 51から最後までと、作品全体を見る
- 第14回 作品の技巧や特徴について
- 第15回 総まとめ

6. 留意事項

広い文学知識を持つ意味で、色んな参考文献を読破してほしい。

提出物等の期限は厳守のこと。

科目コード	210047		
科目名	言語研究デザインと統計		
担当者	小山 哲春		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『Research Methods for the Behavioral Sciences』 Stangor, C, Houghton Mifflin, 1998 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』 森敏昭・吉田寿夫, 北大路書房, 1990 『英語教師のための教育データ分析入門』 三浦省吾 監修, 大修館書店, 2004 『SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析』 小塩真司, 東京図書, 2004		

1. 科目の研究目標

本コースでは社会科学的方法論に基づいた言語研究のデザインと基礎的な統計分析を扱う。ただし、ここでいう「言語研究」は狭い範囲での言語現象のみを扱った研究を指すのではなく、人間の言語活動に関わる広範囲の現象を扱った研究（例えば英語学・英語教育学・コミュニケーション学・言語人類学等）を含む。

本コース終了時に以下の3つの能力を習得していることが目標となる。

- (1) 他の研究者が行った言語研究の報告を読み、理解し、かつ適切に評価する能力
- (2) 自らの言語研究を計画し遂行する能力
- (3) 質的・量的な言語データを適切に分析し、その分析結果を他人に報告する能力

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 社会科学（言語研究を含む）の定義、科学哲学、認識論
- (2) 社会科学的研究の方法論
- (3) 実験研究・調査研究・フィールド研究の基礎的デザイン
- (4) 記述統計
- (5) 推論統計の基礎

3. 教育・研究の方法

課題(1)～(3)に関してはテキスト、資料、参考文献に基づいた講義・ディスカッションを行う。また、ここで得た理解・知識を基に、修士論文の研究計画作成の練習を行う。課題(4)～(5)に関しては、テキスト、資料に基づいた講義を行い、さらに実際のデータを扱った演習を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

- (1) 試験（2回を予定） 50%
- (2) (模擬) 研究計画 30%
- (3) 統計分析の演習 20%

5. 授業予定

- 第1回 Introduction / Philosophy of Science
- 第2回 Scientific Reasoning / Hypothesis Testing
- 第3回 Research Elements
- 第4回 Measurement (1)
- 第5回 Measurement (2) / Sampling
- 第6回 Research Design
- 第7回 Midterm Exam
- 第8回 Descriptive Statistics (1)
- 第9回 Descriptive Statistics (2)
- 第10回 Logic of Inferential Statistics & Hypothesis Testing
- 第11回 Comparing Means (t-test)
- 第12回 Analysis of Variance (1) : One-way ANOVA
- 第13回 Analysis of Variance (2) : Factorial ANOVA
- 第14回 Correlation / Simple Regression
- 第15回 Comparing Proportions (chi-square)

6. 留意事項

いたって入門的・基礎的な内容を予定しているので、履修時点で基礎的な統計の知識や高度な数学の知識を有している必要はない（四則計算ができれば十分!）。ただし、英語での専門用語に習熟するため、そして個々の英語力の鍛錬のため、多数の英語文献を使用する。

科目コード	210062		
科目名	英語教育カリキュラム開発特論 (教材開発を含む) 英語コース・教材の開発と評価		
担当者	沖原 勝昭		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	プリントを使用する。		
参考文献	『Teachers as Course Developers』 Graves, K. (ed.), Cambridge U.P., 1996, 052149768X 『Designing Language Courses: A Guide for Teachers』 Graves, K., Heinle & Heinle Publishers, 1999, 083847909X		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

英語カリキュラム開発とは、ある特定の目的を持った英語コースを設計することであり、それは、そのコースで用いられる教材を作成することを含む作業である。コース設計と教材開発は、通常、学習者のニーズを同定することから出発し、それをコースの目的・目標として設定し、その目標を達成するための英語の言語材料を選定・配列し、教授・学習が成立するような形態にして提示することである。

しかし、中学校や高等学校の英語授業においては、検定教科書という既製の教材が用意されているため、ゼロからの教材開発はほとんど必要ない。教科書や既製の補助教材を自分が教える生徒の実態に合うように手直し(adapt)することになる。そのためには、既製の教材の選択、手直し、提示方法の工夫などがこなせる能力が求められる。

このような視点に基づく本科目の終了時には、英語コース設計の原理を理解し、具体的な教材を作成したり、検定教科書などの既製の教材を分析・加工することができ、設計したコースや教材の評価ができるようになる。

2. 教育・研究の個別課題

1. 英語コース設計、教材開発の基本的な考え方を学ぶ。
2. 学習者のニーズを同定し分析する。
3. 言語材料の選定、配列、提示を踏まえて教材作成の枠組みを構成する。
4. 視聴覚メディアの活用を取り入れる。
5. 指導場面を想定して、教材を作成する。
6. 設計したコースと教材の特徴や利点を説明できる。

3. 教育・研究の方法

1. 授業方法

英語コース設計、教材開発についてのテキストをもとに、講義と演習の形式で進める。文献の読解、教材

の調査、自作教材の発表などの課題について、受講学生は輪番で担当する。

2. 研究方法

既製の英語コースや教材の分析を通して、コース・教材の評価を行い、それに基づいてコース・教材を設計し、なぜそのような教材になるのかの理由を説明する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業での担当や発表などの平常点(50%)と最終レポート(50%)により、総合的に評価する。

5. 授業予定

- | | |
|------|-------------------------|
| 第1回 | 英語カリキュラム論, 教材論イントロダクション |
| 第2回 | 英語コース開発基礎編 |
| 第3回 | 英語コース開発応用編 |
| 第4回 | 英語コース開発事例：目標の設定 |
| 第5回 | 英語コース開発事例：言語材料 |
| 第6回 | 英語コース開発事例：配列 |
| 第7回 | 英語コース開発事例：提示 |
| 第8回 | 英語コース開発事例：評価 |
| 第9回 | 教材分析事例 |
| 第10回 | 教材の評価 |
| 第11回 | 教材のAdaptation |
| 第12回 | 教材の開発：ニーズ分析 |
| 第13回 | 教材の開発・実施準備 |
| 第14回 | 教材の開発・成果の発表 |
| 第15回 | まとめ&課題レポート説明 |

6. 留意事項

少人数クラスなので各自の学習負担は大きいですが、毎回出される課題を確実にこなして、授業に臨むこと。

科目コード	210063		
科目名	英語科指導法特論		
担当者	橋堂 弘文		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『英語教育研究入門』大修館 『アクション・リサーチのすすめ－新しい英語授業研究－』佐野正之，大修館 『Principles of Language Learning and Teaching』H. Douglas Brown, Prentice Hall Regents 『DICTIONARY OF LANGUAGE TEACHING & APPLIED LINGUISTICS』LONGMAN 『英語教育のフロンティア』青木昭六編著、橋堂，保育出版社		
参考文献	『英語教育のアクション・リサーチ』研究社 『第二言語習得研究の現在』小池生夫，他，大修館 『リフレクティブ・アプローチによる英語教師の養成』金星堂 『はじめてのアクションリサーチ』佐野正之，大修館 各分野の文献リストを配布するので、各自の研究の際、利用して欲しい。 ①TESOL Quarterly, Applied Linguistics, Language Learning 等の専門誌 ②ロングマン応用言語学辞典（南雲堂） ③英語教育用語辞典（大修館）		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

本特論では、児童/生徒に合わせた個別対応型教育の為に生まれた授業研究法（アクション・リサーチ）に必要な基本的な理論とその調査・研究の方法論を、教育現場にどう生かすかについて、中・高校における英語教育の実践例をもとに、演習形式で考察したい。

2. 教育・研究の個別課題

特に最終段階では、英語教育関連のレポートか、小・中・高校における英語教育の事例や各自の課題等を、量的に、質的に、あるいはアクション・リサーチの手法を用いて、どう教育実践の改善に応用するかを考察したい。以下のテキストは、皆で読み進めたい。

- ①「英語教育研究入門」（大修館）
- ②「アクション・リサーチのすすめ－新しい英語授業研究－」佐野正之（大修館）
- ③「Principles of Language Learning and Teaching」H. Douglas Brown（Prentice Hall Regents）

3. 教育・研究の方法

量的研究、質的研究、授業研究法（アクション・リサーチ）についての基本的な調査・研究の方法論の紹介を、参加者の発表形式で文献研究していく。その中で教育実践への応用を考えたい。必要な資料は、原則的にプリン

トして配付する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

課題発表、レポート：70%
授業中の積極的態など：30%

5. 授業予定

- (1) 量的研究、質的研究、授業研究法（アクション・リサーチ）についての基本的な調査・研究の方法論の紹介
- (2) 小・中・高校における各自が調査した英語教育の事例を、アクション・リサーチ手法を用いて、どう教育実践の改善に応用するかの考察
 - 第1回 オリエンテーション
 - 第2回 基礎理論の概論
 - 第3回 量的研究
 - 第4回 質的研究
 - 第5回 マスタリーラーニングとアクションリサーチ
 - 第6回 統計的考え方の基礎
 - 第7回 統計的仮説の検定と推定
 - 第8回 実証的研究の手順
 - 第9回 実験研究の種類と調査の進め方
 - 第10回 研究論文の読み方
 - 第11回 課題発表1回目 Principles of Language Learning and Teaching
 - 第12回 課題発表2回目 Principles of Language Learning and Teaching
 - 第13回 課題発表3回目 Principles of Language Learning and Teaching
 - 第14回 課題発表4回目 Principles of Language Learning and Teaching
 - 第15回 まとめ

6. 留意事項

演習のテーマに関連する以下の研究会/学会への参加を奨励する。文部省研究指定校：「小学校における教科としての英語教育」指導実施実験校、英語授業の実践に関連する研究会、学会（日本児童英語教育学会（JASTEC）、英語授業研究会等）への参加と、小学校の英語活動・外国語活動を目指すものは、学部のスクールインターンシップを伴う「英語教材作成演習」の履修を推奨する。

科目コード	210065		
科目名	英語授業分析特論 「よい英語授業」を求めて		
担当者	東郷 多津		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	学習開発研究所『「教える」から「学ぶ」への変革：学習投資への道 学習開発シリーズ』[Kindle版], 2014 金田道和編『英語の授業分析』大修館書店, 1986. 高梨庸雄『英語の「授業力」を高めるために』三省堂, 2005. Lynch, T. Communication in the Language Classroom. Oxford U.P. 1996. Tajino, A, Stewart, T, Dalsky, D (ed.) Team Teaching and Team Learning in the Language Classroom : Collaboration for innovation in ELT. Routledge. 2015		

1. 科目の研究目標

よい授業とはどのような授業なのであろうか。常識的には、生徒の成績が上がった授業、生徒に英語を好きにさせるような授業、英語のコミュニケーション能力が養成された授業などは、「よい授業」と言えそうである。もっと一般的な観点からは、設定されている教育目標が達成されたなら、それは間違いなく「よい授業」と言えよう。それでもなお、「よい授業」をよくしている要素は何かと問うと、答えは簡単ではない。別の角度から言えば、誰にとって、「よい授業」なのか？という問いも立つだろう。授業の主体は教師なのか、生徒なのか。主体が違えば、授業設計そのものにも影響することを意識する必要がある。

さらに、授業は1回50分のみで存在するものではなく、15回なり1学期という時間の幅に連続して行われるものであり、授業評価はそのような連続体としてなされるべきで、1回の授業のみを分析単位にしては片手落ちであろう。

このように、授業の分析や評価は決して単純で容易ではないが、本科目では、これまで蓄積されてきた授業分析研究の成果を踏まえながら、「よい授業とは？」への回答を追求してみたい。

2. 教育・研究の個別課題

1. 授業分析についての主たる先行研究の検討
2. 外国語教育の授業分析の視点と方法についての考察
3. 授業分析結果を授業改善へと繋げる方途の検討

3. 教育・研究の方法

1. 授業方法
 - (1) テキストを中心とした主要文献の講読と演習
 - (2) 実際の授業（またはビデオ）の視聴と分析方法に

ついでに演習

2. 研究方法

- (1) 授業分析関係の文献の読解
- (2) 授業分析方法の習得
- (3) 授業分析結果の授業改善・改革への応用

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、平常点（授業時の担当）50%と最終レポート（授業分析演習のまとめ）50%により、総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 英語授業分析イントロ
- 第2回 授業分析の視点
- 第3回 先行授業分析方法評価（1）
- 第4回 先行授業分析方法評価（2）
- 第5回 先行授業分析方法評価（3）
- 第6回 授業観察（1）
- 第7回 授業中のInteraction分析（1）
- 第8回 授業中のInteraction分析（2）
- 第9回 授業中のInteraction分析（3）
- 第10回 授業観察（2）
- 第11回 授業研究の手順
- 第12回 事例研究：観察と評価（1）
- 第13回 事例研究：観察と評価（2）
- 第14回 事例研究：観察と評価（3）
- 第15回 授業研究まとめ

科目コード	210091		
科目名	専門演習 英語教育学・応用言語学分野の論文作成基礎指導		
担当者	沖原 勝昭		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
テキスト	教員が準備したプリント		
参考文献	『ロングマン応用言語学辞典』南雲堂 『英語教育用語辞典』大修館, 最新刊 『Longman Dictionary of Applied Linguistics and Language Teaching』Richards, J. and R. Schmidt, Longman, 2010 『英語科教育のフロンティア』青木昭六編著, 保育出版社, 2012 海外学術雑誌 (Applied Linguistics, TESOL Quarterly, ELT Journalなど) と国内学会紀要 (ARELE, JACET Journal, SELTなど), 研究書などからの関連論考		
備考	必修		

- 第3回 関連テーマについての資料の読解方法
- 第4回 関連テーマについての資料の読解演習
- 第5回 関連テーマについての資料の読解と整理
- 第6回 研究テーマを絞り込むための先行研究の整理
- 第7回 研究テーマを絞り込むための先行研究の選択
- 第8回 研究テーマを絞り込むための先行研究の考察
- 第9回 研究テーマを絞り込むための先行研究の再整理
- 第10回 研究テーマを絞り込むための追加資料の収集
- 第11回 研究テーマを絞り込むための追加資料の整理
- 第12回 研究テーマを絞り込むための追加資料の考察
- 第13回 修士論文の構成
- 第14回 研究計画の作成
- 第15回 修士論文の研究計画書 (Research Proposal) の作成

6. 留意事項

毎回与えられる課題を必ずこなして、修士論文執筆の基礎固めを確実に達成すること。

1. 科目の研究目標

受講生各自が選んだ研究テーマについて、それを深化・発展させて、修士論文につなげていくための個別指導を行う。

本授業で扱う英語教育の領域として、シラバス・教材開発、授業分析、英語力評価のほか、言語政策、外国語教育制度の国際比較、英語習得過程における社会・文化的要因の影響といったテーマについても指導する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 研究テーマに関連する先行研究の読解と整理
2. 研究テーマの絞り込み
3. 研究仮説 / Research Questions の設定
4. 研究計画 (Research Proposal) 作成

3. 教育・研究の方法

1. 授業方法
 - (1) 研究論文や実践報告書の講読と演習
 - (2) 研究テーマや研究計画の発表とそれに対する助言
2. 研究方法
 - (1) 研究テーマに関係する先行研究の把握
 - (2) 研究仮説の検討
 - (3) 研究計画の作成

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業における発表や報告に基づく平常点 (40%) と修士論文プロポーザル (60%) により評価する。

5. 授業予定

- 第1回 関連テーマについての概論的講義
- 第2回 関連テーマについての資料の収集方法

科目コード	210091		
科目名	専門演習		
担当者	橋堂 弘文		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
テキスト	TESOL Quarterly, Applied Linguistics, Language Learning 等の専門誌 『英語教育研究入門』大修館 『アクション・リサーチの進めー新しい英語授業研究ー』大修館 『Principles of Language Learning and Teaching』H. Douglas Brown, Prentice Hall Regents, 2007 『英語教育のフロンティア』青木昭六編著、橋堂、保育出版社、2013		
参考文献	『ロングマン応用言語学辞典』南雲堂 『英語教育用語辞典』大修館、最新刊 『DICTIONARY OF LANGUAGE TEACHING & APPLIED LINGUISTICS』LONGMAN, 最新刊		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

本演習では、院生各自が持つ修士論文の研究課題に合わせて、研究上必要な以下の3つの基本的な方法論を適宜利用して、修士論文作成の一助としたい。演習終了時点で、修士論文の一部が完成することを目指す。特に研究課題の領域の指定は無い。

2. 教育・研究の個別課題

以下の研究方法を利用する。

- 1) 先行研究の文献研究
- 2) 研究課題の解決に際し、学際的 (interdisciplinary) なアプローチで臨む方法論の研究
- 3) 量的研究：実証科学的方法 (empirical) 利用の研究やフィールドワークのデータ分析。

特に最終段階では、上述の3つの方法論を、各自の持つ研究課題や教育実践上の諸問題（授業技術及び方法、授業形態、教材編成、カリキュラム、評価など）の対処や改善に応用し、修士論文の作成に役立てたい。

その際、特に量的研究に関しては、本演習で学んだ実験・調査・測定という科学的なデータを集め、それを分析し、その結果を用い各自の仮説を検証するという、実証科学的方法の採用を期待する。

3. 教育・研究の方法

－第1段階－

修士論文の研究課題に合わせた研究方法のアドヴァイスや研究者等の紹介。

－第2段階－

院生各自の研究課題に合わせて、先行研究や実践例、フィールドワーク資料、文献研究などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、修士論文の資料

作成を実施する。

－最終段階－

院生各自の持つ教育実践上の諸問題を、本演習で学んだ各方法論を用いて、修士論文の作成に役立てたい。

4. 成績評価の基準及び評価方法

ディスカッション20%、課題発表30%、授業中の積極性50%の総合評価。

5. 授業予定

- 第1回 修士論文の研究課題に合わせた研究方法のアドヴァイスや研究者等の紹介。研究計画の立案。
- 第2回 研究計画の検討、
- 第3回 院生各自の研究課題に合わせて、先行研究や実践例、フィールドワーク資料の検索
- 第4回 研究課題に合わせて、先行研究の文献研究などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、修士論文の資料作成を実施する。
- 第5回 研究課題に合わせて、先行研究の実践例などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、修士論文の資料作成を実施する。
- 第6回 フィールドワークの等の計画検討
- 第7回 先行研究の文献研究などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、修士論文の資料作成を実施する。
- 第8回 研究の中間まとめと振り返り、研究課題に合わせたディスカッションをしながら、KJ法等マインドマッピングによるアウトラインの検討
- 第9回 学期後半の研究課題に合わせた、先行研究の文献研究などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、修士論文の資料作成を実施する。
- 第10回 研究課題に合わせた、修士論文の資料作成を実施する。
- 第11回 先行研究の文献研究などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、アウトラインに沿った修士論文の作成
- 第12回 学期後半の研究課題に合わせた、先行研究の文献研究などによる発表をもとに、ディスカッションをしながら、アウトラインベースの論文まとめ
- 第13回 学期後半の研究課題に合わせたディスカッションをしながら、論文の検討
- 第14回 論文の校正と修正
- 第15回 論文内容の検討

6. 留意事項

研究会、学会への参加を奨励する。

科目コード	210091		
科目名	専門演習 ビートルズ研究		
担当者	小林 順		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
テキスト	『Shout!』Philip Norman, Amazon Services International, Inc. ビートルズ関連図書、本学図書館所蔵図書、等。オンライン・データや情報。		
参考文献	ビートルズ関連図書、本学図書館所蔵図書、等。オンライン・データや情報を網羅。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

イギリス文化・文学研究の切り口を提示したい。それは、ビートルズ、である。デビュー（1962年10月）まもなく、脚光を浴びたビートルズ狂（ビートルズマニア）の実態を解明したい。時代は1960年代、いわゆるSwinging 6sと称される、ポップ・アートを中心に生活・ファッション・消費活動など社会全般の急変化の時代に、その時代を象徴したビートルズの全貌を把握するのがこのクラスの課題である。

2. 教育・研究の個別課題

修士論文作成がこのコースでは最重要課題であり、受講者は入学前から指導を受け入れるため、その延長線上にさらに研究を積み重ねられるように指導を行う。具体的には、論文執筆の状態に応じて工夫するため一概には表わし難いものの、いわゆる前提研究・資料の読解をとおして、研究の方向性を定められるよう留意したい。

3. 教育・研究の方法

週ごとに新たな資料・データを読解する。受講者が探索した資料・データを、あるいは指導者が推薦するものを、丹念に世も解いていく。同時に、その成果を学期末に纏めたレポートを提出してもらう。

4. 成績評価の基準及び評価方法

資料・データの収集力、40%。期末レポート、40%。研究上の熱意、20%。合計、100%。

5. 授業予定

15週を予定。毎週、資料・データの読解。ただし、初回用として、担当者が資料・データを提示。それ以降は主に、受講者の選択したものを読解。受講者は前週までに資料・データを提出。最終15週にレポートの課題を決定。

6. 留意事項

クラスはオンライン開催の場合もある。

科目コード	210091		
科目名	専門演習 ことばとコミュニケーション		
担当者	小山 哲春		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
テキスト	なし		
参考文献	修士論文のトピック等を考慮し、1週間に1～2本程度の論文／Book ChapterをReading Assignmentsとする。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

コミュニケーションとは、言語・文化・認知など様々な要素が複雑に絡み合っ織り成す相互的な人間行動である。本演習では、各要素が特に異文化間でのメッセージの産出や解釈にどのような影響を与えるかを先行研究を通して考察し、それらを土台として独自の研究(修士論文)を行うための能力を養成する。具体的に対象とするトピックは、対人コミュニケーション、異文化コミュニケーション、語用論、コミュニケーション能力研究、等となる。

2. 教育・研究の個別課題

1. 関連領域の基盤的知識（語用論、対人コミュニケーション論、社会心理学等）の獲得
2. 先行研究の概観と課題の探索
3. 修士論文のテーマ（研究課題）の絞込み
4. 修士論文のProposal：最初の数章（先行研究、研究課題／研究仮説の特定、方法論）の完成

3. 教育・研究の方法

1. 各授業は、各週のReading Assignmentについての
 - (1) 院生からの批判的報告、(2) 担当教員からの解説、(3) 担当教員と院生とのディスカッション、によって構成される。15週間という限られた時間内に関連領域の知識をつけ、また修士論文のテーマを絞り込む必要性から、各週のReading Assignmentsを深く読み込んでいくことが重要となる。
2. 学期末までに、修士論文のProposalを完成する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

1. 各週のReading Assignmentsの批判的報告およびディスカッション（50%）
2. 修士論文Proposal（50%）

5. 授業予定

上記、教育・研究の方法を参照のこと。

科目コード	210091		
科目名	専門演習 ジェイムズ・ジョイスの作品を読む		
担当者	須川 いずみ		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
テキスト	プリント		
参考文献	<i>Ulysses Annotated</i> Don Gifford, Univ. of California Press, 1974年, 978-0-520-25397-1 <i>James Joyce's Ulysses</i> Harold Bloom, Chelses House, 1987年, 1-55546-021-6		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

文学で修士論文を書こうと思っている院生が自分で作品を読みこなし、研究書をどう扱うのかを教えるクラスである。わたしの専門がジェイムズ・ジョイスなので、専門演習では好むと好まざるにかかわらず『ユリシーズ』の一部を読む。またそれ以外のジョイスの作品やその他その周辺のアイルランドの文学、イギリスの小説、カルチュラル・スタディーズなど受講者の希望によって内容を変更し、個人指導をする。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 修士論文を書くに当たっての研究方法の習得
- (2) 原作及び資料、批評書を読むための英語力の向上
- (3) 原作の精読の習得
- (4) 先行論文の把握
- (5) 研究テーマの確定

3. 教育・研究の方法

- (1) 文学・映画テキストの精読
- (2) 先行論文の紹介
- (3) 研究テーマの紹介
- (4) ディスカッション
- (5) レポート提出
- (6) 発表

4. 成績評価の基準及び評価方法

平常点 (50%)、提出物 (30%)、発表 (20%) で総合的に評価する。

欠席、遅刻は減点の対象である。三分の一以上欠席した場合、基本的に単位を与えない。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 今までの研究課題発表
- 第3回 ジョイスの“The Boarding House”の精読
- 第4回 ジョイスの“The Boarding House”の精読
- 第5回 ジョイスの“The Boarding House”の精読
- 第6回 ジョイスの“The Boarding House”の精読
- 第7回 クリティシズムの紹介とディスカッション
- 第8回 *Ulysses* 第1挿話を読む
- 第9回 *Ulysses* 第3挿話を読む
- 第10回 *Ulysses* 第8挿話読む
- 第11回 *Ulysses* 第13挿話を読む
- 第12回 *Ulysses* 第15挿話を読む
- 第13回 *Ulysses* のビデオ鑑賞
- 第14回 クリティシズムの紹介とディスカッション
- 第15回 まとめとその他

6. 留意事項

各の学生の研究テーマによって内容を変更する。

科目コード	210091		
科目名	専門演習		
担当者	吉野 啓子		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
テキスト	『The Collected Stories of K.Mansfield』 K. Mansfield, Penguin 『キャサリン・マンズフィールドの醍醐味』 吉野 啓子, 朝日出版		
参考文献	その都度通知する。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

英国女性作家の作品や、女性の登場人物を中心としている作品を取り上げる。作品に表れる女性や子供の世界、そして女性独自の繊細な心理描写を中心に、登場人物や作品を色んな角度から探り理解する。また作品の主題や作者の主張、技巧などについても理解を深めたい。

2. 教育・研究の個別課題

原文を精読することは勿論であるが、作品や作者の時代背景などの理解を深めるために、また多角的な観点から理解するために、参考文献も多く読み進める。そして討論やレポートなどで、一層の理解を深める方法も取る。

3. 教育・研究の方法

精読で内容の理解につとめ、作品の技巧や作者の観点、主題などの理解へと進める。さらに文献を読みながら、時代背景などを考慮することで、知識の幅を広げていきたい。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度 40%、提出物等 30%、試験やそれに代わるレポートなど 30%

5. 授業予定

- 第1回 授業の進め方等の説明
- 第2回 近代英国小説について
- 第3回 近代英国小説について
- 第4回 修論の進め方について
- 第5回 修論の進め方について
- 第6回 Blissにある作品について
- 第7回 Blissにある作品から
- 第8回 The Garden Partyにある作品について
- 第9回 The Garden Partyにある作品について
- 第10回 The Dove's Nestにある作品について
- 第11回 The Dove's Nestにある作品について
- 第12回 Something Childishにある作品について
- 第13回 Something Childishにある作品について
- 第14回 Outlineと修論について
- 第15回 Outlineと修論について

6. 留意事項

- ・上記シリーズからの作品の選択は、学生との相談の上決める予定をしている。
- ・こつこつと物事を成し遂げる姿勢を期待します。

科目コード	210092		
科目名	インターンシップ 小・中・高等学校での授業実践		
担当者	橋堂 弘文		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

英語を教えることを実際に体験することを目的とする。大学の担当教員の指導を常にうけながら、最新の理論を実際の教育現場で生かす実習の場とする。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 実習許可がおりた学校での授業を立案し実施する。
- (2) 授業記録を残し、後で分析・反省をする。

3. 教育・研究の方法

(1) の目的を達成するために、定期的に指導教官のチェック、助言をうける。(2) のために、録画・録音をし、教案、教材、その都度フィールドノートなどをとり保存する。実習のまとめをポートフォリオと実施後の反省文（あるいは短いアクションリサーチ論文）として提出する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

本学だけでは、評価しない。授業実践校の評価：90%を重視する。残り10%本学の評価を加える。

インターンシップ実施校での

1. シラバス作成：授業実施計画作成：到達目標の設定 30%
2. 指導案作成 30%
3. 授業実践 30%
4. 授業実践の授業評価 10%

それぞれの課程での評価と実施校の評価の総合評価

5. 留意事項

生徒という相手のいる作業であるので、体調に万全を期して決まった期間の実習が欠けることのないようにする必要がある。

科目コード	210101		
科目名	インディペンデントスタディーズ 修士論文指導		
担当者	沖原 勝昭・橋堂 弘文・ 小林 順・小山 哲春・ 須川 いずみ・吉野 啓子・ Robert Kritzer・杉村 美奈		
単位数	8	期間	集中
配当学年	M12		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

担当教員の指導を受けて修士論文の作成・執筆をおこなう。「専門演習」における成果を基盤として、個別指導を行う。学生は指導教員にテーマおよび要望点を相談し、研究課題を特定する。正指導教員1名、副指導教員2名の指導を受けることができるが、主に正指導教員の個別指導を受ける。開講前に学生はテーマについて予備調査を受け、特に修士論文指導予定の「専門演習」担当者から事前に指導を受け準備することになる。

2. 教育・研究の個別課題

学生は大学院入学願書の「研究計画」に基づき、執筆段階において個別指導を受けた教員との折衝を通じ課題を絞りこみ研究することになる。

3. 教育・研究の方法

学生は修士論文作成指導教員のアドバイスを受けて論文執筆を行う。チューター制のクラス運営であるため、指導教員と適宜連絡をとりながら、執筆を進めていくことになる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

正指導教員と2名の副指導教員による口頭試問をうけ、論文の内容、英語表現、口頭試問における受け答え、等を評価項目として、3名の指導教員が合議して、「合」か「否」の判定をくだす。

5. 留意事項

個人のテーマによって中身を変更する場合がある。

科目コード	260011		
科目名	生活文化学特論		
担当者	中村 久美・鳥居本 幸代・ 藤原 智子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M1		

1. 科目の研究目標

生活に関わる文化をヒトとモノ、コトとの相互関係の構築ととらえ、それを歴史や風土、社会的背景の追求から解明することで、よりよい人間の生活のあり方を考えていくものである。本特論ではこの生活文化の諸相を衣生活、食生活、住生活の各側面から明らかにする。

2. 教育・研究の個別課題

- ・明治時代の洋服導入による、日本古来の服飾文化の変異を明らかにする。(鳥居本)
- ・米をテーマに日本型食生活と食文化について考察する。(藤原)
- ・生活の諸相を文化的視点からみること、その意義を理解する。(中村)

3. 教育・研究の方法

- ・講義形式をとる。(鳥居本)
- ・主に講義形式を取るが、授業の中で予め提示した課題についてはゼミ形式で行う。(藤原)
- ・ゼミ形式でテーマにそって資料を読み解きながら議論をする。(中村)

4. 成績評価の基準及び評価方法

- ・出席率・授業参加度(30%)、レポート(70%)に基づき総合的に行う(鳥居本)
- ・授業参加度(40%)、レポート(60%)に基づいて総合的に行う(藤原)
- ・議論への参加の様子(50%)、レポート(50%)に基づいて総合的に行う(中村)
- ・担当教員3名の評価の平均によって決定する。

5. 授業予定

- 第1回 衣からみた生活文化論
- 第2回 日本の服飾文化と外来文化の接点を概説
- 第3回 洋装導入の経緯
- 第4回 子供服と洋服文化
- 第5回 改良ブーム
- 第6回 食からみた生活文化論
- 第7回 米の歴史
- 第8回 米の栄養と調理性
- 第9回 飯と食文化
- 第10回 酒と食文化
- 第11回 住からみた生活文化論
- 第12回 風土性から読み解く空間論、建築論
- 第13回 歴史性から読み解く空間論、建築論
- 第14回 日本の風土と生活様式、住様式
- 第15回 文化的視点からみた生活様式、住様式

科目コード	260030		
科目名	研究方法論 I		
担当者	竹原 広実・牛田 好美・ 加藤 佐千子・鳥居本 幸代・ 中村 久美・藤原 智子		
単位数	1	期間	通年
配当学年	M1		
備考	選択必修 研究方法論 I もしくは同 II を選択必修		

1. 科目の研究目標

この科目は、健康生活文化領域における研究を進めていく上で必要な基礎となる研究方法論を学ぶものである。

具体的には、まず、当該領域における研究を行う複数教員による指導を通して、実際の研究事例を取り上げるなどして、多様な研究に触れる機会を提供する。

こうしたことを通して、研究課題の定め方、研究計画の立て方、研究手法の選び方、分析方法などについての学びを深めることを目的としている。

さらに後半では、受講者自身が発表者となり、自らの研究についての構想発表を行い、それに関する質疑応答を受けることを通して、自己の研究構想をかためていくことを目指している。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 健康生活文化領域における研究方法について理解を深める。
- (2) 各学生が個別的に取り組む研究の構想を明確化する。

3. 教育・研究の方法

- (1) 研究方法についての講義
- (2) 研究計画書の作成
- (3) 修士論文構想発表会における研究構想の発表とディスカッション

4. 成績評価の基準及び評価方法

以下の点を総合的に評価する。

- (1) 研究方法論レポート(30%)
- (2) 研究計画書(体裁、構成力)(40%)
- (3) 修士論文構想発表(30%)

5. 授業予定

- 第1回 文献研究法
- 第2回 量的研究法
- 第3回 質的研究法
- 第4回 健康生活文化領域における研究動向1
- 第5回 健康生活文化領域における研究動向2
- 第6回 健康生活文化領域における研究動向3
- 第7回 修士論文構想発表会

6. 留意事項

各研究法、修士論文構想発表会等一部の授業は、研究方法論Ⅱと合同で行う。

科目コード	260033		
科目名	食品学特論		
担当者	高村 仁知		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
テキスト	なし		
参考文献	学部生の時に用いた「食品学」に関する教科書を持参のこと。日本食品標準成分表2010も持参すること。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

食に関するさまざまな話題に関して、調査、討議することで食品に関する造詣を深める。

2. 教育・研究の個別課題

食品成分と食品分析、食品表示と法律、機能性食品、各種食品の性質、食品加工

3. 教育・研究の方法

各回の話題についてあらかじめ調査し、発表・討議することで理解を深める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

口頭発表および授業への参加度100%

5. 授業予定

- 第1回 はじめに
- 第2回 食品成分表
- 第3回 食品の分析
- 第4回 食品表示法
- 第5回 食品表示基準
- 第6回 栄養機能食品
- 第7回 特定保健用食品と機能性表示食品
- 第8回 植物性食品の性質
- 第9回 動物性食品の性質
- 第10回 食品の冷蔵・冷凍
- 第11回 食品と酵素
- 第12回 食品の包装
- 第13回 食品と添加物
- 第14回 食品と放射線
- 第15回 まとめ

科目コード	260035		
科目名	健康生理学特論		
担当者	萩原 暢子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『人体の構造と生理機能』高田玲子ほか，医歯薬出版，2007		
参考文献	『医療・福祉系の学生のための専門基礎科目』河野公一，金芳堂，2013 『人体の構造と機能』佐藤昭夫・佐伯由香・原田玲子，医歯薬出版，2015		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

現代社会では、環境の変化やメカニカルストレスなどで、健康の維持が困難になってきている。そのような状況において、健康な状態での人体の作動状況を知り、いかにして健康を維持するかを学ぶことが必要である。

本特論では、細胞の機能や体全体の調節機構の作用メカニズムについて、詳しく解説する。また、人体各器官の機能について日常の健康状態と対比させながら解説し、それらの統合下での健康構築の意義について述べる。

2. 教育・研究の個別課題

- 1) 人体の構成
- 2) 個体の調節機構と恒常性ホメオスタシス
- 3) 神経やホルモンによる調節系
- 4) 体液組成、血液の働き
- 5) 循環器系、呼吸器系
- 6) 泌尿器系、生殖器系、感覚器系
- 7) 運動器系、体温調節

3. 教育・研究の方法

- (1) 授業は講義形式
- (2) テキストは「人体の構造と生理機能」原田玲子ら（医歯薬出版）
- (3) 参考図書は「人体の構造と機能」（医歯薬出版）

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度（30%）、課題のレポート（70%）

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション、
1章 人体の構造と機能
- 第2回 2章 個体の調節機構と恒常性、
7章 神経・精神系（1）
- 第3回 7章 神経・精神系（2）
- 第4回 6章 内分泌系 総論、各論（1）
- 第5回 6章 内分泌系 各論（2）
- 第6回 12章 生殖器系
- 第7回 4章 循環器系
- 第8回 9章 呼吸器系
- 第9回 10章 血液と体液
- 第10回 3章 消化器系
- 第11回 5章 腎・尿路系
- 第12回 8章 感覚器系と皮膚
- 第13回 11章 運動器系、運動の生理学
- 第14回 代謝と体温
- 第15回 まとめ（レポート作成）

科目コード	260038		
科目名	衣生活学特論 人はなぜ装うのか		
担当者	牛田 好美		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

装いの身体的・生理的機能と社会的・心理的機能の両面から考え、心身の健康や快適性を追求し、現代の衣生活への具体的な提案を行う。

2. 教育・研究の個別課題

- 1 人がなぜ装うのか
- 2 環境と装い
- 3 ファッションの変遷
- 4 装いと健康
- 5 身体と装い

3. 教育・研究の方法

主に講義形式で行うが、時には、演習・実習の授業も行う。必要に応じて、資料を配布する。また、テーマにより発表、ディスカッションの時間も設ける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価の基準は、授業参加度30%、レポート50%、授業時の課題20%とする。

5. 授業予定

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 人はなぜ装うのか
- 第3回 環境と装い① 気候風土と装い
- 第4回 環境と装い② 民族服
- 第5回 ファッションの変遷① 西洋
- 第6回 ファッションの変遷② 日本
- 第7回 身体と衣服 平面構成と立体構成
- 第8回 装いと健康① 健康と快適性
- 第9回 装いと健康② ボディイメージ
- 第10回 装いの機能① 身体的・生理的機能
- 第11回 装いの機能② 社会的・心理的機能
- 第12回 装いが自己に与える影響
- 第13回 装いが他者に与える影響
- 第14回 ユニバーサルデザイン提案
- 第15回 まとめ

科目コード	260050		
科目名	研究方法論Ⅱ		
担当者	佐藤 純・石井 浩子・ 桐野 由美子・三好 明夫		
単位数	1	期間	通年
配当学年	M1		
備考	選択必修 研究方法論Ⅰもしくは同Ⅱを選択必修		

1. 科目の研究目標

この科目は、生活福祉における研究を進めていく上で必要な基礎となる研究方法論を学ぶものである。

具体的には、まず、生活福祉における研究を行う複数教員による指導を通して、実際の研究事例を取り上げるなどして、多様な研究に触れる機会を提供する。こうしたことを通して、研究課題の定め方、研究計画の立て方、研究手法の選び方、分析方法などについての学びを深めることを目的としている。さらに後半では、受講者自身が発表者となり、自らの研究についての構想発表を行い、それに関する質疑応答を受けることを通して、自己の研究構想をかためていくことを目指している。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 生活福祉領域における研究方法について理解を深める。
- (2) 各学生が個別的に取り組む研究の構想を明確化する。

3. 教育・研究の方法

- (1) 研究方法についての講義
- (2) 研究計画書の作成
- (3) 修士論文構想発表会における研究構想の発表とディスカッション

4. 成績評価の基準及び評価方法

以下の点を総合的に評価する。

- (1) 研究方法論レポート (30%)
- (2) 研究計画書 (体裁、構成力) (40%)
- (3) 修士論文構想発表 (30%)

5. 授業予定

- 第1回 文献研究法
- 第2回 量的研究法
- 第3回 質的研究法
- 第4回 生活福祉領域における研究動向1
- 第5回 生活福祉領域における研究動向2
- 第6回 生活福祉領域における研究動向3
- 第7回 修士論文構想発表会

6. 留意事項

各研究法、修士論文構想発表会等一部の授業は、研究方法論Ⅰと合同で行う。

科目コード	260056		
科目名	ソーシャルワーク特論		
担当者	桐野 由美子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	テキストは特にない。資料を随時配布する。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

本特論ではまず、ソーシャルワーク全般の構成要素・実践過程・目標・価値・倫理に関する普遍性および現在にいたるまでの歴史的展開を検討する。第2に、ミクロ（直接援助）・メゾ・マクロ（間接援助）の各レベルにおけるジェネラリスト・ソーシャルワーク実践の役割に関する特性を論じる。第3に、児童家庭・精神保健・学校ソーシャルワーク・高齢者福祉等の現場における現在の課題を提示し、今後の展望を検討する。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) ソーシャルワークの理論及び実践の歴史的展開を理解する。
- (2) ソーシャルワークの構成要素・実践課程・目標を理解する。
- (3) ソーシャルワークの価値と倫理を考察する。
- (4) ミクロ・メゾ・マクロレベルにおけるソーシャルワーク実践を探求する。
- (5) 分野別ソーシャルワーク実践におけるソーシャルワークの課題と展望を考察する。

3. 教育・研究の方法

- (1) 授業方法：講義と演習を組み合わせた形式で授業を進める。参考文献（邦文と英文）をクラスで読み、議論する。
- (2) 学習方法：
 - ①事前に用意された参考文献に関して、授業予定に従って学習を行い、授業でのディスカッションに備えておく。
 - ③授業に平行して、担当教員と相談しながら、自分で選んだレベル（ミクロ・メゾ・マクロ）におけるソーシャルワーク実践の役割に関するテーマにそって、最終ペーパーの用意を主体的に行う。
- (3) 教材：議論の具体的課題を含む参考文献は必要に応じてプリント教材として配布する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

本科目の評価の内訳は授業出席状況（30%）、授業中のディスカッション参加状況（30%）、最終ペーパー（40%）とする。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ソーシャルワークの理論及び実践の歴史的展開
- 第3回 ソーシャルワークの構成要素・実践過程・目標
- 第4回 ソーシャルワークの価値と倫理に関する現場でのジレンマ
- 第5回 個人・家族・小集団を対象とするミクロレベルのソーシャルワーク・メソッド
- 第6回 地域と社会福祉サービス提供機関において行われるメゾレベルのソーシャルワーク・メソッド
- 第7回 自治体及び国の政策立案・実施と評価・社会サービスの管理・運営を行うマクロレベルのソーシャルワーク・メソッド
- 第8回 児童家庭分野のソーシャルワーク実践における課題と展望
- 第9回 精神保健福祉分野のソーシャルワーク実践における課題と展望
- 第10回 スクールソーシャルワーク分野の実践における課題と展望
- 第11回 医療福祉分野のソーシャルワーク実践における課題と展望
- 第12回 高齢者福祉分野のソーシャルワーク実践における課題と展望
- 第13回 障害者福祉分野のソーシャルワーク実践における課題と展望
- 第14回 各学生が提出したレポートに基づく発表とディスカッション
- 第15回 まとめ

科目コード	260057		
科目名	ソーシャルワークスーパービジョン特論		
担当者	小山 隆		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	利用しない。		
参考文献	必要に応じて授業中に指示する。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

大学院の科目は毎年受講生数、各自の背景となる学部教育、経歴などの差が大きいため、固定的カリキュラムが効果的とは限らないというのが、本講義の担当者の思いである。したがって、基本的には受講生の関心や現時点でもつ専門的知識などに応じて、授業開始時に具体的なカリキュラムを策定していきたいと思う。

上記のような理由で、その内容は一部変更されうが、担当者としては以下のような目標をもっている。

1. ソーシャルワークを医療や司法、教育などと並ぶ対人援助専門職の一環として解する。
2. ソーシャルワークを社会福祉学全体の中に位置づける。
3. 対人援助におけるスーパービジョンの意味を学ぶ。
4. 事例研究を通してスーパービジョン、コンサルテーションを体験する。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 対人援助専門職の共通性と個別性
- (2) 援助関係において留意すべきこと
- (3) ソーシャルワークの価値と倫理
- (4) スーパービジョンの意義
- (5) 事例研究を通してのケースの見方、スーパービジョン体験

3. 教育・研究の方法

- (1) 授業方法：講義と演習を組み合わせた形式で授業を進める。
- (2) 教材：議論の具体的課題を含む参考文献は必要に応じてプリント教材として配布する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業中の議論や発表の参加度（60％）と、レポート（40％）を総合評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
第2回 ソーシャルワークと社会福祉

- 第3回 ソーシャルワークと対人援助
第4回 専門職の固有性と共通性
第5回 ソーシャルワークの価値と倫理
第6回 スーパービジョンとソーシャルワークの原則
－関連性と相違点－
第7回 スーパービジョンとソーシャルワーク
第8回 スーパービジョンとコンサルテーション
第9回 スーパービジョンの定義
第10回 スーパービジョンのタイプ
第11回 事例研究（児童）
第12回 事例研究（障害）
第13回 事例研究（高齢）
第14回 事例研究（在宅）
第15回 総括

6. 留意事項

授業予定はあくまでも仮である。受講生人数や受講生の実践経験の有無等によって、内容は変わってくる。受講生と話し合って詳細は決定する。

科目コード	260112		
科目名	調理文化学特論		
担当者	藤原 智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

調理という行為が、人の生存を支えるという科学的側面と、生活を創造するという文化的側面を持つことを理解し、調理の役割について、俯瞰的視点から論じることができる。

2. 教育・研究の個別課題

1. 調理の科学的側面について理解する。
2. 調理の生活文化的側面について理解する。

3. 教育・研究の方法

主に講義形式を取るが、授業の中で予め提示した課題についてはゼミ形式で行う。授業のまとめとして、提示した課題の中から各々が選んだテーマについて口頭発表を求める。

参考文献や資料は授業の中で提示、あるいは配付する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度 (30%)、レポート (50%)、口頭発表 (20%) に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 調理の起源と発達
- 第2回 世界の歴史と調理
- 第3回 日本の歴史と調理
- 第4回 食素材の調理特性と食品としての広がり①
米
- 第5回 食素材の調理特性と食品としての広がり②
小麦粉
- 第6回 食素材の調理特性と食品としての広がり③
魚・肉
- 第7回 食素材の調理特性と食品としての広がり④
乳製品
- 第8回 食素材の調理特性と食品としての広がり⑤
卵
- 第9回 食素材の調理特性と食品としての広がり⑥
野菜・果物
- 第10回 発酵食品の役割と変遷
- 第11回 香辛料の役割と発展
- 第12回 菓子に見る調理文化
- 第13回 多様化する食産業
- 第14回 多様化する家庭料理
- 第15回 口頭発表、まとめ

科目コード	260113		
科目名	健康栄養学特論		
担当者	井上 裕康		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『分子栄養学』加藤久典、藤原葉子 編, 羊土社, 2014, 4758108757 『生命科学 改訂第3版』東京大学生命科学教科書編集委員会, 羊土社, 2009, 4758120005 『はじめの一步のイラスト生理学 改訂第2版』照井 直人 編, 羊土社, 2011, 4758120293 『タンパク質の一生』永田 和宏, 岩波新書, 2008, 400431139X		
参考文献	『Essential細胞生物学〈DVD付〉原書第3版』B. Alberts et al., 南江堂, 4524262148 『イラストレイテッド ハーパー・生化学 原書29版』清水孝雄 監訳, 丸善, 4621087282		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

生体を構成している分子の構造と機能を学び、生命科学 (ライフサイエンス) の基礎を学ぶ。そのためには、まず「細胞」の概念を中心に、他の領域に広がっていく。現在、生命科学の分野では膨大な知識が毎年増え続けており、分子レベルから個体、そして社会まで広がっている。これらの知識は私たち「ヒト」をよく理解するだけでなく、ヒトを含めた地球上の生物のもつ共通性、特殊性を学ぶことである。そのことによって生命現象のしくみやおもしろさ、美しさを知ることが、ヒトの健康および栄養を理解する上で大きく役立つものと考えられる。

2. 教育・研究の個別課題

21世紀を迎えた現在、生命科学の基礎は、どのような分野の人にも必要な基本知識であると考えられる。細胞を中心とした生命現象やしくみやおもしろさ、美しさを理解してもらいたい。さらに管理栄養士国家試験も考慮に入れ、この後のさまざまな講義と生命科学の基本的な知識の関連を明確にしていくことを目標とする。いずれも積極的に学習することを強く求める。

3. 教育・研究の方法

毎回到講義のあとに、レポート課題を出すとともに、授業内で確認テストを行う。

岩波新書「タンパク質の一生」を講義の感想文を、始まる前にレポート課題とする (教科書の内容を概観できる、1回目の講義で提出のこと)。

<https://jrecin.jst.go.jp/seek/SeekTop> の中にある e-learning ライフサイエンス、化学の項目を事前に読んでおくことを勧める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、筆記試験（50％）レポート（30％）授業態度および参加度（20％）などから総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 生物の多様性と一様性
- 第2回 遺伝情報の複製
- 第3回 遺伝子の発現
- 第4回 遺伝子発現の調節（1）
- 第5回 遺伝子発現の調節（2）
- 第6回 細胞の膜構造と細胞内小器官
- 第7回 細胞骨格
- 第8回 代謝
- 第9回 生体エネルギー
- 第10回 細胞周期
- 第11回 シグナル伝達（1）
- 第12回 シグナル伝達（2）
- 第13回 発生と分化
- 第14回 生殖と減数分裂
- 第15回 総合討論

科目コード	260116		
科目名	保健福祉行政特論 Evidenceにもとづく保健福祉の展開		
担当者	金森 雅夫		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	『WHOグローバルレポート：高齢者の転倒予防』鈴木みずえ・金森雅夫・中川経子、クオリティケア出版、2010、978-4-904363 『社会・環境と健康』国立健康・栄養研究所監修、南江堂、2010、4-524-23691-0		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

保健福祉行政は科学的根拠エビデンス (Evidence Based Medicine) にもとづいた展開が望まれる。健康日本21 (第二次) の最先端情報から、どのようなプロセスによって、疾病の予防や健康増進が可能かを科学的に推論し、政策立案の研究能力を培う (リスクファクター、メタ分析、cost-effective)。さらに、ある保健福祉上のテーマからエビデンスの収集を通じて保健行政の課題解決のためのフローチャート・ロードマップを作成し、科学的政策立案能力を養う。

2. 教育・研究の個別課題

①健康日本21 (第二次) の参考文献を読んで、生活習慣と疾病の関連を深く理解する。②認知症を予防する視点から運動・転倒予防対策が重要である。WHOの政策を読んで、世界の地域での取り組みの現状を分析する。これらの実例を通じて、保健政策上の課題を自ら設定し、エビデンスの収集を通じて保健行政の課題解決のためのフローチャート・ロードマップを作成する。

3. 教育・研究の方法

①インターネットによる文検索能力。②基本的な統計能力。③長寿を阻害する要因探索、発達発育を阻害する要因探索、④生活習慣病のリスクファクターと国民衛生の動向についての情報検索能力。⑤エビデンスの収集を通じて保健行政の課題解決のためのフローチャート・ロードマップを作成能力形成を促す、iPadを使った視覚的講義。受講生は、インターネット検索ができるスマートフォンやPCを携帯していることが望ましい。

4. 成績評価の基準及び評価方法

- ①課題解決レポート (60%)
- ②発表、討論などの授業参加態度 (40%)
などの平常考査

5. 授業予定

- 第1回 Evidence にもとづく保健福祉の展開とはなにかの総説・論文紹介
- 第2回 健康日本21（第二次）健康寿命
- 第3回 健康日本21（第二次）禁煙
- 第4回 健康日本21（第二次）飲酒
- 第5回 健康日本21（第二次）運動習慣その他
- 第6回 科学的根拠エビデンス（Evidence Based Medicine）とはなにか？
情報の整理・評価（iPad及び資料のPDF化）
- 第7回 科学的根拠エビデンス（Evidence Based Medicine）とはなにか？
情報の整理・評価（iPad及び資料のPDF化）
- 第8回 文献収集の仕方、google scholar
医療情報、世界の健康情報
- 第9回 保健政策の立案－WHO「転倒予防」戦略の目標
- 第10回 「転倒予防」の保健政策の立案－リスク回避策としての転倒予防・運動のマッピング
- 第11回 WHOの転倒予防対策－転倒予防のメタアナリシス
- 第12回 WHOの転倒予防対策－転倒予防の効果、カナダの例
- 第13回 エビデンスの収集結果発表、討論（1）
- 第14回 エビデンスの収集結果発表、討論（2）
- 第15回 課題解決レポートの完成（フローチャート・ロードマップの作成）

6. 留意事項

授業ではインターネットによる専門的情報収集の方法を教示するが、一般的なインターネット利用法は取得していること。iPad、スマートホン、PC等でのインターネット環境を教えます。

科目コード	260119		
科目名	ソーシャルワーク実習		
担当者	桐野 由美子・佐藤 純・三好 明夫		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
テキスト	特になし		
参考文献	事前・事後授業の際に担当教員が適宜配布する		

1. 科目の研究目標

本実習では、ソーシャルワーク特論等において習得した知識・技術・価値観を実際の場面で深め、より高度な専門的援助の展開を可能にすることを目標とする。各学生は実習先、実習テーマを含めた実習計画を教員と相談の上事前に決定する。

2. 教育・研究の個別課題

本実習では、下記のことを実習を通じて習得する。

1. 各自が選択した分野におけるソーシャルワークの実際についての理解
2. 各自が選択した現場の仕事内容・職員構成・連携についての理解
3. 援助者としての自己覚知に関する理解
4. 高度な専門的直接援助・間接援助技術の理解
5. 利用者へのサービスの有効性に関する評価方法の理解
6. 実習生自身の高度な専門的訓練
7. 援助者の倫理に関する理解

3. 教育・研究の方法

実習の前に事前指導を行う。実習生は実習期間中に現場指導担当職員と教員からのスーパービジョンを、また教員から事後指導を受ける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

成績評価は、実習施設の実習担当指導者と本実習担当教員の連携指導のもとに、総合評価する。その内訳は以下の通りである：

- ①実習受け入れ先のスーパーバイザーによる評価基準に基づく評価40%
- ②担当教員による事前・事後指導および実習中のスーパービジョンにおける評価40%
- ③実習報告レポート20%

5. 授業予定

現場実習前に事前指導、実習後に事後指導を行う。実習期間は受け入れ施設/機関と相談の上決定する。

6. 留意事項

本実習科目を履修する条件は以下のとおりである：

- 1) 原則として、学部で、社会福祉士、精神保健福祉士、あるいは保育士の現場実習を履修した者
- 2) 社会福祉運営管理特論、ソーシャルワーク特論、精神保健福祉特論の何れかを受講していること（ソーシャルワーク実習と同時に履修すること可能）

科目コード	260123		
科目名	ケアマネジメント特論 個人の尊厳と社会参加の機会の確保		
担当者	三好 明夫		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	配布、印刷資料を中心とする		
参考文献	適宜、授業中に指示する		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

住み慣れた地域で自立した生活を送るためには、住み慣れた地域の様々なサービス資源や、保健・医療・福祉・教育・就労等をはじめとする様々な領域のサービスを上手に使ったり、地域の理解や協力が必要である。また、地域社会全体で支え高めていくこと、共生を目標とするケアマネジメントを研究の中心とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. ケアマネジメントの意義と目的を理解する。
2. ケアマネジメントの方法と実際について学ぶ。
3. ケアマネジメントの課題と展望について学ぶ。

3. 教育・研究の方法

ケアマネジメントの実際事例等の紹介を多数行いながら事例によるディスカッションも行い、ケアマネジメントが現在の社会でどのように機能しているのか、あるいはどのあたりに問題があるのかを探っていく。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度 (30%)、発表 (20%)、レポート課題 (50%) により総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 ケアマネジメントの意義と目的
- 第2回 ケアマネジメントと自律、自立
- 第3回 ケアマネジメントとチームアプローチ
- 第4回 ケアマネジメントプロセス
- 第5回 インテーク、アセスメント、ケアプラン
- 第6回 ケアプランの実施、仲介、モニタリングおよび終結
- 第7回 社会資源の改善と開発
- 第8回 ケアマネジメント過程での倫理
- 第9回 人権擁護、主体性、中立性、公平性
- 第10回 ケアマネジメント過程での基本姿勢
- 第11回 自立支援、こまやかなアセスメント、チームアプローチ、苦情処理
- 第12回 利用者の権利擁護
- 第13回 利用者の視点に立つこと
- 第14回 サービスと苦情対処の方法
- 第15回 ケアマネジメントの課題と展望

6. 留意事項

ケアマネジメントは実学であるので、現役のケアマネジャーをゲストに呼び、議論してもらう予定である。

科目コード	260124		
科目名	社会調査法特論 福祉統計の活用と福祉調査の実際		
担当者	平尾 良治		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『生活問題と社会保障・社会福祉の基本資料集』志藤・平尾・藤井・安井，高菅出版，2014年，978-4-901793-68-1		
参考文献	『社会調査法入門』盛山和夫，有斐閣，2004，4-641-18305-8 『格差社会の統計分析』岩井・福島・菊地・藤江，北海道大学出版会，2009，978-4-8329-6704-5		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

社会福祉は生活問題対策の一つであることから、国民の生活問題の実態を解明することは福祉研究においては不可欠の営みである。しかしその多くは官庁統計（行政報告）に依存せざるを得ない側面もある。そうしたデータをどのように加工し、活用するかが問われている。また必要なデータが「ない」場合は、自ら実証的に明らかにする必要がある。その際の技術やポイントを共有することを目標にしている。

2. 教育・研究の個別課題

- ・社会福祉調査の理解（理論・操作概念・作業仮説）
- ・社会福祉調査の手順（調査方法・サンプリング・現地調査）
- ・調査票の設計と作成、点検と集計のポイント
- ・人口・労働と統計（将来人口・少子高齢化・失業・不安定雇用・労働時間・賃金）
- ・生活・福祉と統計（所得分布・国民生活基礎調査・所得再分配調査・家計調査）

3. 教育・研究の方法

授業はテキスト・補足資料・データをもとに、小グループでの討議、実務作業を通して、福祉調査の概要とデータ処理・加工のポイントを具体的に身につける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、出席・予習課題 (30%)、小レポート・ドリル (30%)、期末試験 (40%) により総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 社会福祉調査とは何か・・・社会科学としての社会福祉調査の特徴
- 第2回 量的調査と質的調査の意義・・・統計的調査と事例研究

- 第3回 社会福祉調査の進め方・・・調査の企画、調査の流れ、「問い」の基本
- 第4回 調査票の企画と構成・・・統計資料、統計的調査、ワーディング、選択肢、順序
- 第5回 調査実施とデータ集計・分析・・・現地調査、点検、コーディング、クリーニング
- 第6回 人口・労働と統計1・・・将来人口、少子高齢化、失業・不安定雇用
- 第7回 人口・労働と統計2・・・労働時間、賃金
- 第8回 生活・福祉と統計1・・・所得分布、国民生活基礎調査、所得再配分調査、家計調査
- 第9回 生活・福祉と統計2・・・年金制度と格差、医療保険と保険者間格差、高齢者医療
- 第10回 生活・福祉と統計3・・・国際比較でみる日本の社会保障
- 第11回 雇用労働者の増加と生活問題・・・生活問題をみる枠組み、雇用労働者の推移
- 第12回 暮らしの現実と生活問題1・・・住民の階層構成、世帯構成、就業者構成
- 第13回 暮らしの現実と生活問題2・・・生活の困りごと、家計支出構造、健康状態
- 第14回 社会保障・社会福祉の課題・・・社会手当、生活保護、福祉施設・サービス、財源
- 第15回 総合的体系的な社会的保障制度を実現する条件

6. 留意事項

事前に配付する資料に目を通し予習課題をおこなうこと。

科目コード	260130		
科目名	子どもの健康福祉特論		
担当者	石井 浩子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	『健康福祉学概論 —健やかでいきいきとした暮らしづくり—』前橋 明, 朝倉書店, 2008年, ISBN978-4-254-64035-9		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

子どもたちの健全な発育・発達を保障するための「生活」と「活動」に関する内容や「生体（生体リズム）」に関する内容について、また、今日の社会の変化による影響から子どもの心身の異変の状況について学び、その問題点を分析したり、大人たちが果たすべき役割について考える。

さらに、少子高齢化社会の進行にともなう家庭環境の変化や地域社会の変容、女性の社会進出にともなう子育て支援の必要性、国や地方自治体の母子保健・児童福祉サービス、子どもに関する諸問題を検討し、子どもたちの健全育成のために、家庭や学校・施設、地域社会、行政などの果たすべき役割や今後の展望を探る。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 子どもの抱える健康上の問題を理解する。
- (2) 子どもの生活習慣やそのリズムの実態を理解する。
- (3) 子どもの心とからだの健全育成のための視点を理解する。

3. 教育・研究の方法

・毎回のテーマにそって用意した資料をもとに、講義およびディスカッションを行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度（発表やディスカッションへの参加：40%）、課題提出（20%）、レポート（40%）から総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 子どもの抱える健康上の問題と生活課題
- 第2回 子どもをとり巻く社会環境や家庭環境、教育環境の変化
- 第3回 子どもの生活習慣やそのリズムの実態
①生活リズム ②体温のリズム
- 第4回 子どもの心やからだの異変とその原因
- 第5回 少子高齢化社会における児童福祉ニーズ
- 第6回 子どもの心とからだの健全育成

- ①栄養・休養・運動
- 第7回 子どもの心とからだの健全育成
- ②自然とのかかわりと心の育ち
- 第8回 子どもの心とからだの健全育成
- ③保育者や教師、親（家庭）、地域、行政の役割
- 第9回 子どもの心とからだの健全育成
- ④生活リズム向上戦略、親子のふれあいあそびの奨励、午後あそびの充実
- 第10回 子どもの心とからだの健全育成
- ⑤健全育成・健康づくりに関する子どもの行事
- 第11回 子ども家庭福祉関連の行政機関や施設
- 第12回 子どもを取り巻く大人の問題と課題
- 第13回 育児疲労と育児支援
- ①育児疲労の実態
- 第14回 育児疲労と育児支援
- ②育児支援の基本と援助者の心構え、具体的な支援
- 第15回 子どもの健康福祉の今後の課題と展望

科目コード	260152		
科目名	プロジェクト課題研究		
担当者	萩原 暢子・石井 浩子・ 牛田 好美・加藤 佐千子・ 桐野 由美子・佐藤 純・ 竹原 広実・鳥居本 幸代・ 中村 久美・藤原 智子・ 三好 明夫		
単位数	6	期間	通年集中
配当学年	M1		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

この科目は、学生が生活福祉文化学の各領域の枠を払ったいくつかの「プロジェクトチーム」のひとつに参加してプロジェクト学習方式（Project Based Learning）を学ぶ演習科目である。これにより学生と教員の関心が実践的な課題によって結ばれ、学生のより主体的な学修を促すことができる。生活福祉文化学という実践科学は現場の問題解決志向性とその理論的・方法的基礎づけという2方向により成り立つ。この2方向の志向性を現実化するのが「プロジェクト課題研究」である。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) プロジェクト課題研究の意義と目的
- (2) プロジェクト課題研究の方法
- (3) プロジェクト課題研究の課題設定
- (4) 研究チームの形成
- (5) 研究の進行管理
- (6) 研究報告

3. 教育・研究の方法

- (1) 学生が研究課題に取り組むチームを立ち上げる。
- (2) 各チームに指導担当教員を置く。
- (3) 前期は主として課題設定、後期は課題研究を行う。
- (4) 前期1回、後期2回研究集会を開催し、課題の紹介、中間発表、研究発表等を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究発表の状況及び研究終了後に提出するプロジェクト課題レポートにより評価する。

5. 授業予定

- 第1回 履修登録、科目の説明
- 第2回 プロジェクト課題研究の意義と目的
- 第3回 研究倫理について
- 第4回 プロジェクト課題研究の方法①
- 第5回 プロジェクト課題研究の方法②
- 第6回 プロジェクト課題研究の方法③
- 第7回 プロジェクト課題研究の課題設定
- 第8回 プロジェクト課題研究のチームの形成
- 第9回 プロジェクトチームの構想発表会
- 第10回 プロジェクトチームによる検討会①（中間発表会の準備）
- 第11回 プロジェクト課題研究中間発表会
- 第12回 プロジェクトチームによる検討会②
- 第13回 プロジェクトチームによる検討会③
- 第14回 プロジェクト課題研究発表会
- 第15回 プロジェクト課題研究まとめと振り返りレポート作成

科目コード	260155		
科目名	特別研究Ⅰ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	前期集中
配当学年	M1		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

生活福祉文化という分野における教育および研究とは、日々進歩する技術や変化に対応し、生活基盤となる地域における暮らしの中で人間の生活の質（Quality of Life、QOL）の向上を追究する学問である。すなわち、暮らしを文化的な視点で捉え、どのように快適に生活をデザインするか、よりよい安定した福祉的に充実した環境を得ることができるか、そのような身近な諸問題を検討することがこれからの人間生活には必要である。

そこで、生活福祉文化専攻においては、健康でゆたかな質の高い暮らしと自己実現のための理念と方策・技術を研究・修得したことを踏まえ、修士論文の作成を通じて、専門的かつ個別的なテーマを探求し、文化的な視点を背景に、生活と福祉の知識、技能、技術などの素養を総合的、複合的に駆使できる高度な課題解決能力を向上することを目的としている。

2. 教育・研究の個別課題

修士論文作成に向けて、以下の観点を中心とした指導を行っていく。

- (1) 研究の社会的意義の明確化
- (2) 先行研究との関連及び独創性のあり方
- (3) 研究目的に応じた研究方法のあり方
- (4) 研究における倫理的配慮

3. 教育・研究の方法

本科目は特別研究Ⅰ～Ⅳとして継続的に修士論文作成に向けてなされる研究指導の中に位置づけられるものである。

研究テーマ、研究方法などについては、「研究方法論Ⅰ」もしくは「研究方法論Ⅱ」と関連づけながら個別に指導教員より指導を受ける。

指導過程としては1年次前半に研究構想にもとづき主指導教員が決められ、さらに1年次後半で研究テーマ、研究計画を決定し、修士論文に向けての綿密な指導がなされる。

2年次（長期履修生にあっては最終学年まで）にあっては、研究結果の分析、結果を踏まえた考察を明らかにすることを中心として指導がなされる。

研究指導は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）の規定により、昼間部の院生には昼間の時間帯を、また社会人の院生に対しては夜間、土曜日、あるいはインターネットを活用するなど柔軟に対応して個人指導をおこなう。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究の社会的意義の明確化、先行研究の探索、研究目的に応じた研究方法の検討といった点を中心に修士論文作成に向けた取組状況を総合的に評価する。

科目コード	260156		
科目名	特別研究Ⅱ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M1		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

生活福祉文化という分野における教育および研究とは、日々進歩する技術や変化に対応し、生活基盤となる地域における暮らしの中で人間の生活の質（Quality of Life、QOL）の向上を追究する学問である。すなわち、暮らしを文化的な視点で捉え、どのように快適に生活をデザインするか、よりよい安定した福祉的に充実した環境を得ることができるか、そのような身近な諸問題を検討することがこれからの人間生活には必要である。

そこで、生活福祉文化専攻においては、健康でゆたかな質の高い暮らしと自己実現のための理念と方策・技術を研究・修得したことを踏まえ、修士論文の作成を通じて、専門的かつ個別的なテーマを探求し、文化的な視点を背景に、生活と福祉の知識、技能、技術などの素養を総合的、複合的に駆使できる高度な課題解決能力を向上することを目的としている。

2. 教育・研究の個別課題

修士論文作成に向けて、以下の観点を中心とした指導を行っていく。

- (1) 研究の社会的意義の明確化
- (2) 先行研究との関連及び独創性のあり方
- (3) 研究目的に応じた研究方法のあり方
- (4) 研究における倫理的配慮

3. 教育・研究の方法

本科目は特別研究Ⅰ～Ⅳとして継続的に修士論文作成に向けてなされる研究指導の中に位置づけられるものである。

研究テーマ、研究方法などについては、「研究方法論Ⅰ」もしくは「研究方法論Ⅱ」と関連づけながら個別に指導教員より指導を受ける。

指導過程としては1年次前半に研究構想にもとづき主指導教員が決められ、さらに1年次後半で研究テーマ、研究計画を決定し、修士論文に向けての綿密な指導がなされる。

2年次（長期履修生にあっては最終学年まで）にあっては、研究結果の分析、結果を踏まえた考察を明らかにすることを中心として指導がなされる。

研究指導は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）の規定により、昼間部の院生には昼間の時間帯を、また社会人の院生に対しては夜間、土曜日、あるいはインターネットを活用するなど柔軟に対応して個人指導をおこなう。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究の社会的意義の明確化、先行研究の探索、研究目的に応じた研究方法の検討といった点を中心に修士論文作成に向けた取組状況を総合的に評価する。

科目コード	260157		
科目名	特別研究Ⅲ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	前期集中
配当学年	M2		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

生活福祉文化という分野における教育および研究とは、日々進歩する技術や変化に対応し、生活基盤となる地域における暮らしの中で人間の生活の質（Quality of Life、QOL）の向上を追究する学問である。すなわち、暮らしを文化的な視点で捉え、どのように快適に生活をデザインするか、よりよい安定した福祉的に充実した環境を得ることができるか、そのような身近な諸問題を検討することがこれからの人間生活には必要である。

そこで、生活福祉文化専攻においては、健康でゆたかな質の高い暮らしと自己実現のための理念と方策・技術を研究・修得したことを踏まえ、修士論文の作成を通じて、専門的かつ個別的なテーマを探求し、文化的な視点を背景に、生活と福祉の知識、技能、技術などの素養を総合的、複合的に駆使できる高度な課題解決能力を向上することを目的としている。

2. 教育・研究の個別課題

修士論文作成に向けて、以下の観点を中心とした指導を行っていく。

- (1) 研究の社会的意義の明確化
- (2) 先行研究との関連及び独創性のあり方
- (3) 研究目的に応じた研究方法のあり方
- (4) 研究における倫理的配慮

3. 教育・研究の方法

本科目は特別研究Ⅰ～Ⅳとして継続的に修士論文作成に向けてなされる研究指導の中に位置づけられるものである。

研究テーマ、研究方法などについては、「研究方法論Ⅰ」もしくは「研究方法論Ⅱ」と関連づけながら個別に指導教員より指導を受ける。

指導過程としては1年次前半に研究構想にもとづき主指導教員が決められ、さらに1年次後半で研究テーマ、研究計画を決定し、修士論文に向けての綿密な指導がなされる。

2年次（長期履修生にあっては最終学年まで）にあっては、研究結果の分析、結果を踏まえた考察を明らかにすることを中心として指導がなされる。

研究指導は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）の規定により、昼間部の院生には昼間の時間帯を、また社会人の院生に対しては夜間、土曜日、あるいはインターネットを活用するなど柔軟に対応して個人指導をおこなう。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究の社会的意義の明確化、先行研究の探索、研究目的に応じた研究方法の検討といった点を中心に修士論文作成に向けた取組状況を総合的に評価する。

科目コード	260158		
科目名	特別研究Ⅳ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M2		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

生活福祉文化という分野における教育および研究とは、日々進歩する技術や変化に対応し、生活基盤となる地域における暮らしの中で人間の生活の質（Quality of Life、QOL）の向上を追究する学問である。すなわち、暮らしを文化的な視点で捉え、どのように快適に生活をデザインするか、よりよい安定した福祉的に充実した環境を得ることができるか、そのような身近な諸問題を検討することがこれからの人間生活には必要である。

そこで、生活福祉文化専攻においては、健康でゆたかな質の高い暮らしと自己実現のための理念と方策・技術を研究・修得したことを踏まえ、修士論文の作成を通じて、専門的かつ個別的なテーマを探求し、文化的な視点を背景に、生活と福祉の知識、技能、技術などの素養を総合的、複合的に駆使できる高度な課題解決能力を向上することを目的としている。

2. 教育・研究の個別課題

修士論文作成に向けて、以下の観点を中心とした指導を行っていく。

- (1) 研究の社会的意義の明確化
- (2) 先行研究との関連及び独創性のあり方
- (3) 研究目的に応じた研究方法のあり方
- (4) 研究における倫理的配慮

3. 教育・研究の方法

本科目は特別研究Ⅰ～Ⅳとして継続的に修士論文作成に向けてなされる研究指導の中に位置づけられるものである。

研究テーマ、研究方法などについては、「研究方法論Ⅰ」もしくは「研究方法論Ⅱ」と関連づけながら個別に指導教員より指導を受ける。

指導過程としては1年次前半に研究構想にもとづき主指導教員が決められ、さらに1年次後半で研究テーマ、研究計画を決定し、修士論文に向けての綿密な指導がなされる。

2年次（長期履修生にあっては最終学年まで）にあっては、研究結果の分析、結果を踏まえた考察を明らかにすることを中心として指導がなされる。

研究指導は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）の規定により、昼間部の院生には昼間の時間帯を、また社会人の院生に対しては夜間、土曜日、あるいはインターネットを活用するなど柔軟に対応して個人指導をおこなう。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究の社会的意義の明確化、先行研究の探索、研究目的に応じた研究方法の検討といった点を中心に修士論文作成に向けた取組状況を総合的に評価する。

科目コード	280014		
科目名	文化学研究方法論		
担当者	鷲見 朗子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M1		
テキスト	特定のテキストは使用しないが、授業で配布する資料などでそれに代える。		
参考文献	特になし。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

本科目の目標は、大学院において修士論文を書くための明確な理念をたて、必要な心構えと作法を学び、しっかりと方法論を構築することである。そのことにより、各自が論文の基本構想を組み立て、それに沿って大学院における研究成果としての修士論文を書き上げられるようにする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 問題提起
2. 論文の内容・形式
3. 先行研究の調査・整理の意義
4. 方法論の選択と確立
5. 結果・成果のまとめ
6. 引用・参考文献の重要性

3. 教育・研究の方法

- ・講義
- ・論文読解
- ・オンライン検索
- ・資料収集
- ・発表

4. 成績評価の基準及び評価方法

- ・レポート (50%)
- ・発表 (30%)
- ・授業参加・課題 (20%)

5. 授業予定

- 第1回 インTRODクダクシヨン
- 第2回 指導教員、指導教員との関係性
- 第3回 論文テーマの選び方、問題意識
- 第4回 先行研究の調査、検索、収集の重要性と実践
- 第5回 収集文献の整理
- 第6回 方法論1
- 第7回 方法論2 (ゲスト・スピーカー)
- 第8回 方法論3 (ゲスト・スピーカー)
- 第9回 論文の基本コンセプト発表・議論 第1段階
- 第10回 論文の形式
- 第11回 論文の表現
- 第12回 プレゼンテーションの方法
- 第13回 中間の研究経過報告に求められる内容
- 第14回 論文の基本コンセプト発表・議論 第2段階
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

研究分野別の視点から方法、先行研究、書誌情報、あるいは分野の特殊なアカデミックな姿勢などについての導入を行うため、ほかの教員がゲストスピーカーとして参加することもある。また外部講師による授業やワークショップを行うこともある。

科目コード	280015		
科目名	文化学研究実践論 ～研究発表に挑戦し、構想発表を成功させよう～		
担当者	吉田 智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M1		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

この授業では、研究方法や研究発表の方法について学び、それをもとに自分でも研究発表をしてみることによって、研究を進めていく上での適切なプロセスを身につける。そして、M1の1月に実施される「構想発表会」を成功させることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 自分の研究に適した研究方法を見つける。
2. 他の人の研究発表から、適切な研究方法や効果的な研究発表の方法を学ぶ。
3. よりよい形で研究発表を実践する。

3. 教育・研究の方法

授業時の議論、研究発表を組み合わせで行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、構想発表を含む研究発表とレポート80%、授業時の議論への参加20%とする。

5. 授業予定

- 第1回 前期の「研究方法論」の授業内容の復習
- 第2回 論文テーマの発表 (各自) とその研究方法に関する議論
- 第3回 研究テーマと研究発表方法の関連について整理 (サンプル論文利用)
- 第4回 自分が選んだ文献 (書籍) の紹介 (1)
- 第5回 自分が選んだ文献 (雑誌記事) の紹介 (2)
- 第6回 自分が研究発表する可能性のある「研究会」の種類調査と報告
- 第7回 自分が研究発表する可能性のある「学会」の種類調査と報告
- 第8回 授業内における模擬研究発表 (1)
- 第9回 授業内における模擬研究発表 (2)
- 第10回 授業内における模擬研究発表 (3)
- 第11回 「学会・研究会」での研究発表 (1)
- 第12回 「学会・研究会」での研究発表 (2)
- 第13回 各自の修士論文に関する研究方法の決定と具体的な作業予定の確定
- 第14回 修士論文の構想発表会の実施
- 第15回 構想発表会の報告とこれからの見通しを発表 (その内容は、この授業の最終レポートとして提出すること)

6. 留意事項

特に第1回～3回は、前期における研究の導入とそれを今後の研究に発展させていく接続の意義を持つ内容である。院生一人ひとりが大学院の研究についての明確な意識をもって臨むことが求められる。

科目コード	280028		
科目名	宗教思想特論 －キリスト教と仏教の比較研究－		
担当者	宮永 泉		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	上田閑照・柳田聖山共著『十牛図』ちくま学芸文庫、1994年		

1. 科目の研究目標

ヨーロッパのカトリック思想と日本の禅思想とを比較検討することを通して、人間とは何か・如何に生きるべきかを哲学的に深く考える。学部開講科目「日本文化と宗教」及び「日本思想」の続きである。

2. 教育・研究の個別課題

- 1) 西洋十七世紀のカトリック思想家パスカルが、哲学とキリスト教の関係について、神学者サシと交わした対話の記録である『サシとの対話』を絶えず念頭におきつつ、
- 2) 禅宗の「十牛図」（人間が本来の自己と世界を見出す過程を絵解きしたもの）を哲学的に考察した上田閑照・柳田聖山共著『十牛図－自己の現象学』を精読する。

3. 教育・研究の方法

講義と講読の併用。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、受講態度 [40%]・レポート [60%] を以って総合的に行う。

5. 授業予定

- | | |
|------|-----------------------------|
| 第1回 | 導入－「日本文化と宗教」及び「日本思想」の講義内容概括 |
| 第2回 | 『十牛図』講読：第十図とブーバー（1）
（導入） |
| 第3回 | 同上：同上（2）（我と汝） |
| 第4回 | 同上：第九図とジレジウス及びリルケ（1）（導入） |
| 第5回 | 同上：同上（2）（ジレジウス） |
| 第6回 | 同上：同上（3）（リルケ） |
| 第7回 | 同上：同上（4）（場所） |
| 第8回 | 同上：第八図とエックハルト及びニーチェ（1）（導入） |
| 第9回 | 同上：同上（2）（エックハルト） |
| 第10回 | 同上：同上（3）（ニーチェ） |
| 第11回 | 同上：同上（4）（絶対無） |
| 第12回 | 同上：同上（5）（空） |
| 第13回 | 同上：第八図再説（1）（絶対無） |
| 第14回 | 同上：同上（2）（三願転入） |
| 第15回 | まとめ |

科目コード	280029		
科目名	聖書学特論		
担当者	中里 郁子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『聖書 旧約聖書続編つき（共同訳）』日本聖書協会、2009、978-4-8202-1271-3 『Theology of the Second Letter to the Corinthians』Jerome Murphy-O'Connor, Cambridge University Press, 1991, 0-521-35898-1		
参考文献	授業中に紹介する。		

1. 科目の研究目標

新約聖書のパウロ書簡『コリントの信徒への第二の手紙』の読解を通して、聖パウロの神学を理解することを目的とする。聖パウロは異邦人にキリストの福音を述べ伝えて、異邦人教会を設立した使徒である。聖パウロの創立したコリント教会についての理解を深め、コリントの信徒へのメッセージを理解し、その神学的意義を探究する。

2. 教育・研究の個別課題

- 1 コリントの町を知る
- 2 コリントの教会について理解する
- 3 『コリントの信徒への第二の手紙』の背景を学ぶ
- 4 『コリントの信徒への第二の手紙』の神学を理解する

3. 教育・研究の方法

- 1 『コリントの信徒への第二の手紙』と『Theology of the Second Letter to the Corinthians』を精読する。
- 2 受講生は毎回の授業で割り当てられる聖書と英文テキストを事前に読んで、要約をレジюмеにし、そのメッセージについてディスカッションする。
- 3 受講生は一つのテーマを選んで参考文献を用いて研究し、学期の後半に発表してレポートにまとめる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業中の取り組み（50%）及びレポート（50%）を総合的に評価する。

5. 授業予定

- | | |
|------|---------------------|
| 第1回 | イントロダクション |
| 第2回 | 『第二コリント書』概説 |
| 第3回 | コリントの町 |
| 第4回 | コリントの教会 |
| 第5回 | パウロとコリントの信徒 |
| 第6回 | 『第一コリント書』と『第二コリント書』 |
| 第7回 | 挨拶と祝福 |
| 第8回 | 変更された訪問 |
| 第9回 | 真正な奉仕 |
| 第10回 | 奉仕の理論と実践 |
| 第11回 | 奉仕－古いものと新しいもの |
| 第12回 | 奉仕と死 |
| 第13回 | イエスの命と新しい創造 |
| 第14回 | 受講者による発表 |
| 第15回 | まとめ |

科目コード	280030		
科目名	日本近代文学特論		
担当者	長沼 光彦		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	プリント配布		
参考文献	『現代日本文学論争史』平野謙他, 未来社		

1. 科目の研究目標

日本近代文学には、様々な作品とともに、その作品の根拠となる文学理念が存在する。作家は作品を創作するとともに、自己の文学理念を公にし、その根拠を世に問うたのである。本科目ではそれらの文学理念を、実際の作品と照らし合わせながら、整理し検証していく。

文学研究は、作品の分析が基礎である。文学理念それ自体の理解を深めるとともに、それらが作品にどのように投影されているか検証し、分析力を深めたい。

また、それぞれの文学理念は、同時期の思想や文化的文脈を背景に持っている。ひとつの文学理念を単独に理解するだけでなく、相互に関連づけながら考察したい。そのために、近代日本で行われた文学論争も取り上げ、論点を整理する。さらには、日本文学近代文学史における意義も見直してみたい。

2. 教育・研究の個別課題

- ・日本近代文学の様々な文学理念に対する理解を深める。
- ・様々な文学理念を生み出した、日本近代文学の歴史的背景を理解する。
- ・文学理念の変遷を整理し、自身の研究に応用する。
- ・文学理念の作品に対する投影を検証しながら、作品分析力を鍛える。

3. 教育・研究の方法

テキストや資料を配付し解説も行うが、主として演習形式で進める。

受講者が発表する場合は、自ら資料を収集し準備する必要がある。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度(30%)、ゼミでの質疑応答(20%)、ゼミ発表(20%)、学期末のレポート(30%)により行う。研究能力を養うためのゼミであるため、出席することを重視する。

5. 授業予定

- 第1回 準備と方法について
- 第2回 文学理念と作品との関連①(私小説論争)
- 第3回 文学理念と作品との関連②(社会主義リアリズム論争)
- 第4回 文学理念と作品との関連③(芸術大衆化論争)
- 第5回 文学理念と時代背景との関連①(「宣言一つ」をめぐる論争)
- 第6回 文学理念と時代背景との関連②(目的意識論争)
- 第7回 文学理念と時代背景との関連③(日本浪漫派論争)
- 第8回 文学理念と海外文学との関連①(シェストフ論争)
- 第9回 文学理念と海外文学との関連②(思想と実生活論争)
- 第10回 文学理念と海外文学との関連③
- 第11回 文学理念と表現の関連①(「小説の筋」論争)
- 第12回 文学理念と表現の関連②(新感覚派論争)
- 第13回 文学理念と表現の関連③(散文芸術論争)
- 第14回 文学理念と日本文学史
- 第15回 まとめ

科目コード	280032		
科目名	アラブ・イスラーム文化特論		
担当者	鷲見 朗子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	参考文献は適宜、授業で紹介する。		

1. 科目の研究目標

アラブ文化とイスラーム文化についての知識と理解を深めることを目的とする。まず「アラブ」とは何か、「イスラーム」とは何かという定義付けの検証から行う。次にアラブとイスラームの人々の生活、宗教、歴史、芸術、文学にかかわる代表的な文化的要素(例:コーラン、アラビア書道、アルハンブラ宮殿)をとりあげて検討し、それらにまつわる歴史的背景や地域の独自性なども明らかにしていく。また、文献を読むことに加えて、映像や実物を目にするすることで、その文化において人々が実際にどのような生活をしているのかをかいまみる。

2. 教育・研究の個別課題

1. アラブ・イスラーム文化の共通性
2. アラブ・イスラーム文化の多様性
3. 文献(日本語と英語)講読とそれに関する発表

3. 教育・研究の方法

1. 講義と受講生の発表によって授業をすすめる。
2. 受講生は各授業で決められたテーマに関する日本語と英語の専門書や論文を事前に読み、発表を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度(10%)、発表(30%)、学期末レポート(60%)により評価する。

5. 授業予定

- 第1回 アラブとイスラームの定義の検証
- 第2回 イスラームの興り
- 第3回 イスラームの発展
- 第4回 コーランとは
- 第5回 コーランの内容
- 第6回 アラブ文学(詩)
- 第7回 アラブ文学(散文)
- 第8回 アラビア書道
- 第9回 アルハンブラ宮殿
- 第10回 イスラーム女性信者のヴェール
- 第11回 アラブのメディア(新聞)
- 第12回 アラブのメディア(テレビ・ラジオ)
- 第13回 もてなしの心
- 第14回 結婚と離婚
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

ゲスト講師による授業を行うこともある。

科目コード	280034		
科目名	日本語学特論 古代和歌、俳句歳時記を読む		
担当者	堀 勝博		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	プリントを配布する		
参考文献	『新編国歌大観』角川書店 『合本俳句歳時記』角川書店 『日本国語大辞典』小学館		

1. 科目の研究目標

私家集を中心に古代和歌をいくつか選び、語学的な視点から分析し、各作品の解釈・鑑賞に取り組む。また後半は、俳句歳時記から任意の作品を選び、同じく分析・研究を進める。

2. 教育・研究の個別課題

1. 古代和歌の語法・語彙について研究する
2. 発句・俳句の語法・語彙について研究する
3. 和歌・俳句に関する研究文献を読む
4. 和歌・俳句に関する研究レポートを書く

3. 教育・研究の方法

受講生の発表を求める

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度および取り組み姿勢の評点40%、定期試験の成績60%で評価する。

5. 授業予定

- 第1回 導入
- 第2回 私家集を読む - 平安時代
- 第3回 私家集を読む - 鎌倉時代
- 第4回 私家集を読む - 室町時代
- 第5回 和歌に関する研究論文を読む
- 第6回 私家集を読む - 江戸時代前期
- 第7回 私家集を読む - 江戸時代後期
- 第8回 近代歌人の歌集を読む
- 第9回 俳句歳時記を読む - 新年の部
- 第10回 俳句歳時記を読む - 春の部
- 第11回 俳句・発句に関する研究論文を読む
- 第12回 俳句歳時記を読む - 夏の部
- 第13回 俳句歳時記を読む - 秋の部
- 第14回 俳句歳時記を読む - 冬の部
- 第15回 総括

6. 留意事項

受講生の専攻分野や関心領域を考慮し、授業予定は変更する可能性がある

科目コード	280037		
科目名	日本伝統文化特論		
担当者	鳥居本 幸代		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『平安朝のファッション文化』鳥居本幸代、春秋社、2003年		

1. 科目の研究目標

日本の文化は近隣諸国の影響を強く受け、それを咀嚼して固有のものに変化させて生じたものであるといえる。とりわけ、平安時代は奈良時代以来の大陸文化を礎に絵画、文学、服飾にいたるまで唐風から和風到大転換した時期である。絵画においては倭絵、文学においては仮名文学が愛好され、いま尚、現代人が魅了される『源氏物語』も生み出された。和風文化の第一歩である平安朝の伝統文化について、貴族ファッションを中心に絵画資料、文献資料などをもとに講述する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・ 絵画資料から伝統文化を理解する。
- ・ 文献資料から伝統文化を理解する。
- ・ フィールド・ワークによる伝統文化の理解。

3. 教育・研究の方法

基本的には講義形式をとるが、ゼミ形式となることもある。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、出席率・授業参加度(30%)、レポート(70%)に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 序論 平安時代の背景
- 第2回 平安貴族の生活を支配した陰陽道
- 第3回 平安京の都市計画
- 第4回 王朝の住まい
- 第5回 平安貴族の食生活
- 第6回 平安朝のお菓子を試食する
- 第7回 化粧と髪からみる平安文化
- 第8回 平安時代の衣生活環境
- 第9回 平安朝ファッションの構成Ⅰ 男性
- 第10回 平安朝ファッションの構成Ⅱ 女性
- 第11回 平安朝ファッション着装体験
- 第12回 平安朝の色彩感覚
- 第13回 年中行事にみる平安文化
- 第14回 平安朝文学からみる女文化と男文化
- 第15回 雅楽演奏を体験する

科目コード	280042		
科目名	国際文化政策特論 ソフト・パワー論		
担当者	片山 裕		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』ジョセフ・S・ナイ, 日本経済新聞社, 2004, 978-4532164751 『帝国とその限界 - アメリカ・東アジア・日本』白石隆, NTT出版, 2004, 978-4757140776 『文化と外交 - パブリック・ディプロマシーの時代』渡辺靖, 中公新書, 2011, 978-4121021335 『中国は東アジアをどう変えるか - 21世紀の新地域システム』カロライン, ハウ/白石隆, 中公新書, 2012, 978-4121021724 『文化外交の最前線にて—文化の普遍性と特殊性をめぐる24のエッセイ』近藤誠一, かまくら春秋社, 2008, 978-4774004099		
参考文献	『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策 1』ジョン・J. ミアシャイマー, 講談社, 2007, 978-4062140096 『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策 2』ジョン・J. ミアシャイマー, 講談社, 2007, 978-4062142588		

1. 科目の研究目標

第二次世界大戦後のアメリカの「覇権（ヘゲモニー）」は、その圧倒的な軍事力や経済力（ハード・パワー）だけによるのではなく、ハリウッド映画や留学生制度などのソフト・パワーに大きく依存していた。本研究は、アメリカと日本を事例に取り、ソフト・パワーによる外交がどのように展開されてきたかを考察する。アメリカ外交の挫折の一つである中東政策について、イスラエル・ロビーが、どのようにアメリカ国内に支持者を増やし、アメリカの中東外交に影響を与えたか、また、21世紀のグローバル化における、日本のアジア諸国との関係における課題とは何かについても考える。

2. 教育・研究の個別課題

1. ヘゲモニーとソフト・パワー
2. 文化外交（パブリック・ディプロマシー）
3. アメリカのソフトパワーと大学・留学生制度
4. 日本のソフト・パワーとは
5. 中国のソフト・パワーとは
6. グローバル化時代の日本のソフト・パワー

3. 教育・研究の方法

テキスト・参考文献を基に、前半は講義形式で授業を行います。後半では、受講生による発表及び討論を中心に進めます。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業への参加度40%、発表を60%として評価します。

5. 授業予定

- 第1回 ヘゲモニーとソフト・パワー
- 第2回 第二次世界体制後のアメリカのソフト・パワー
- 第3回 アメリカのエリート大学と留学制度
- 第4回 アメリカの中東政策とイスラエル・ロビー
- 第5回 グローバル化時代のアメリカのソフト・パワー
- 第6回 日本の文化外交政策（1）：敗戦から高度経済成長期
- 第7回 日本の文化外交政策（2）：ポスト高度経済成長
- 第8回 中国、韓国の文化政策
- 第9回 国際舞台における「アングロ・チャイニーズ」「アングロ・コリアン」の台頭
- 第10回 21世紀の日本のソフト・パワー：何が課題か
- 第11回 学生による発表：アメリカのソフト・パワーについて
- 第12回 学生による発表：日本のソフト・パワーの歴史について
- 第13回 学生による発表：中国・韓国のソフト・パワーについて
- 第14回 学生による発表：グローバル時代における日本の戦略について
- 第15回 学生による発表：総括

6. 留意事項

少人数のクラスであることから、積極的な授業参加が求められます。

科目コード	280046		
科目名	出版・情報文化特論		
担当者	鎌田 均		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

文字による記録、出版を通して、また近年ではインターネットを中心とする新しいメディアによって発信される情報の性質と、それを読み、利用する人との関わりについて検討する。これについて、情報リテラシーと呼ばれる、識字、読解能力を基礎にした、文字情報などの情報を人が適切に理解し、利用できる能力を軸とし、歴史的変遷を踏まえて様々な側面から考察する。以下のテーマに焦点を絞り、テーマに関する基礎事項について講義し、先行研究を紹介、検討する。

- 1) 文字情報を中心とした書籍、文書などの資料が持つ性質とそれを読解し、受容する人との関係。
- 2) 情報の伝達と保存、それに関わるメディア、機関の文化と動向。

これらのテーマに関しての研究動向、研究方法について理解を深めるとともに、国語科を中心とした学校教育、生涯学習における読解力育成、情報、メディアリテラシー教育における実践面も検討する。

2. 教育・研究の個別課題

- 1) 情報の持つ性質について理解する。
- 2) 情報が発信されるメディアについて理解する。
- 3) 情報、メディアを適切に理解して利用するための知識を習得する。

3. 教育・研究の方法

各テーマ毎に参考文献を提示し、それに基づいた発表、ディスカッションを行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

期末レポート (50%)、授業中の発表 (25%)、授業中のディスカッションへの参加 (25%)

5. 授業予定

- 第1回 「リテラシー」に関する諸理論と動向
- 第2回 「情報」に関する諸理論と動向
- 第3回 「メディア」に関する諸理論と動向
- 第4回 文字情報の歴史的変遷と人との関わり (書物と読書の歴史)
- 第5回 記録、文書の読解、利用における人の行動
- 第6回 出版メディアと出版物の読解
- 第7回 批判的思考力と情報の読解
- 第8回 情報リテラシー教育の理論と動向 (図書館と情報リテラシー教育)
- 第9回 メディアリテラシー教育の理論と動向
- 第10回 国語科教育におけるメディアリテラシー教育の実践
- 第11回 文化情報資源
- 第12回 図書館とリテラシーの関係
- 第13回 情報、メディアと権利、倫理の問題 (著作権など)
- 第14回 レポート課題について議論
- 第15回 まとめ

科目コード	280047		
科目名	図書館情報文化特論		
担当者	岩崎 れい		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	プリントを配布		
参考文献	授業中に指示		

1. 科目の研究目標

読書や学習や情報探索行動は、人間にとって生涯にわたり欠かせない文化活動の一部である。生涯学習社会において、子ども時代にその習慣や方法を身につけることは重要であり、その支援は図書館の大切な役割の一つである。本特論では、(1) 子どもの読書能力・読書興味の発達段階、(2) 児童書と子どもの発達、(3) 子どもの読書支援のための理論、(4) 現代のメディアが子どもに与える影響などに関する学術研究への理解を深めることで、理論的な土台を築き、それをもとに、子どもへのよりよい図書館サービスのありかたを探る。

2. 教育・研究の個別課題

1. 子どもを取り巻くメディア環境を知る。
2. 児童書と子どもの発達との関係、読書支援に対する理解を深める。
3. 各自のテーマとの接点を見つける。

3. 教育・研究の方法

講義、発表と特定のテーマについての討論を組み合わせて実施する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業中の取り組み (50%) 及びレポート (50%) を総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 序 子どもをとりまくメディアの現状
 1. 子どもの読書とメディア
 - 1) 子どもの読書の現状と図書館の果たす役割：講義
- 第2回 2) 子どもの読書の現状と課題：文献解読と発表
- 第3回 3) 子どもの読書の現状と課題：討論
- 第4回 2. 児童書と子どもの発達
 - 1) 児童書と子どもの発達に関する概説：講義
- 第5回 2) 児童書と子どもの発達との関係：文献解読と発表
- 第6回 3) 児童書と子どもの発達との関係：討論
- 第7回 3. 子どもへの読書支援
 - 1) 子どもへの読書支援の動向：講義
- 第8回 2) 現代における読書支援の傾向と課題：調査と発表
- 第9回 3) 現代における読書支援の傾向と課題：討論
- 第10回 4. 子どもとメディアをめぐる諸問題：文献解読と討論
 - 1) テレビゲームをめぐる議論
- 第11回 2) ネット依存と携帯依存
- 第12回 3) インターネットといじめ・犯罪
- 第13回 4) フィルタリングと知的自由
- 第14回 5. まとめ
 - 1) 内容の振り返りと発表
- 第15回 2) 討論

6. 留意事項

授業に参加することを前提条件とする。

科目コード	280048		
科目名	オープンソース特論		
担当者	吉田 智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『ネットを支えるオープンソース』まつもとゆきひろ, 角川学芸出版, 2014, 978-4-04-653882-6		
参考文献	『オープンソースの逆襲』吉田智子, 出版文化社, 2007		

1. 科目の研究目標

現在の情報化社会における「オープンソース・ソフトウェア」の存在意義や、この開発手法を応用したプロジェクトや現象である「オープンソース現象」について、文化としての重要性を中心にいろいろな側面から考察する。さらに、「オープンソース・ハードウェア」についての知識も深める。

2. 教育・研究の個別課題

1. オープンソース・ソフトウェア（ハードウェア含）およびオープンソース現象を考察する。
2. オープンソース・ソフトウェア（ハードウェア含）の開発において重要な「コミュニティ」という概念に対して、どのように参加・貢献の仕方があるかを知る。
3. 現在の情報化社会がオープンソースなくしては存在しないことや、今後の重要性を考える。
4. オープンソースを活用したシステム構築やビジネスを展開する仕組みも学ぶ。

3. 教育・研究の方法

1. オープンソース関連の書籍、論文を読む。
2. 具体的に、オープンソース・ソフトウェアの各種開発プロジェクトを調べる。
3. オープンソース現象としての「ウィキペディア」や「青空文庫」の存在意味を考える。
4. 各種のオープンソース・ソフトウェア（あるいは、ハードウェア）を実際に利用して評価する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度（40%）、学期末レポートおよび発表点（60%）の総合点で評価する。

5. 授業予定

- | | |
|------|---|
| 第1回 | オープンソース・ソフトウェアとオープンソース現象とは、オープンソース・ハードウェアとMakerムーブメントとは |
| 第2回 | ネット上のコミュニティへの参加、貢献の意味 |
| 第3回 | 集合知の可能性と限界（1） |
| 第4回 | 集合知の可能性と限界（2） |
| 第5回 | オープンソースを活用したシステム構築例（1） |
| 第6回 | オープンソースを活用したシステム構築例（2） |
| 第7回 | オープンソースのビジネス展開の仕組み（1） |
| 第8回 | オープンソースのビジネス展開の仕組み（2） |
| 第9回 | オープンソースの教育利用の実際（1） |
| 第10回 | オープンソースの教育利用の実際（2） |
| 第11回 | ネットの構造上の特性 ～ソースコードとデータベース～ |
| 第12回 | 情報文化とオープンソースの関係を考える（1） |
| 第13回 | 情報文化とオープンソースの関係を考える（2） |
| 第14回 | ネット新時代への展望（1） |
| 第15回 | ネット新時代への展望（2） |

科目コード	280049		
科目名	国語教育特論 古典教材研究		
担当者	堀 勝博		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	大修館書店 高校教科書『国語総合 古典編』〔国総 312〕		
参考文献	大修館書店 高校教科書『国語総合 古典編』〔国総 312〕 教師用指導書		

1. 科目の研究目標

国語教育の最近の動向として、PISA型読解力の育成と、古典教育の重視がある。この科目では、古典教育に焦点をあて、古典教材の研究法や授業構成法について、具体的な実践研究にふれながら、考察する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 学習指導要領（中等教育）改訂の経緯について、理解・研究を深める。
2. 古典教育の系統的な進め方について、考える。
3. 古典教材の研究法について、具体例に即して考える。
4. 古典教材の原典にあたり、古注で読んでみる。
5. さまざまな古典学習の実践例にふれ、古典教育の授業計画・学習指導計画を立案し、実践する。

3. 教育・研究の方法

1. 学習指導要領の歴史を振り返り、現行指導要領の方針に関する解説や研究論文を読む。
2. 古典の授業実践や教材研究に関する研究発表や論文に触れる。
3. 教科書掲載の教材をいくつか取りあげ、個々の教材の研究法について、具体的に考える。
4. 学習指導案を作成し、研究授業を実施する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度および取り組み姿勢40%、学習指導案作成および研究授業の成績60%で評価する。

5. 授業予定

- | | |
|------|------------------|
| 第1回 | 導入授業－学習指導要領に即して |
| 第2回 | 国語教育の動向 |
| 第3回 | 入門期の古文教材について |
| 第4回 | 徒然草研究 |
| 第5回 | 枕草子研究 |
| 第6回 | 伊勢物語研究 |
| 第7回 | 古代和歌研究 |
| 第8回 | 平家物語研究 |
| 第9回 | 奥の細道研究 |
| 第10回 | 入門期の漢文教材について |
| 第11回 | 漢詩研究Ⅰ「五言詩」 |
| 第12回 | 漢詩研究Ⅱ「七言詩」 |
| 第13回 | 史記・十八史略研究 |
| 第14回 | 諸子百家研究 |
| 第15回 | 学習指導案作成および研究授業実施 |

科目コード	280061		
科目名	インターンシップ		
担当者	岩崎・堀・吉田（朋）		
単位数	2	期間	通年集中
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

国際組織や国際ビジネスにおいて活躍を志す学生にとって、また文化機関や日本語教育施設での仕事に従事したいと考えている学生にとって、現場で一定期間を過ごしてみることは何にもにも換えがたい経験になる。このインターンシップは、それらの仕事の一部分を体験することで、その仕事の概容を知ること、また他の職種をふくめたさまざまなビジネスシーンや文化活動を理解するため、開講される。

2. 教育・研究の個別課題

たとえば、多国籍企業や国際機関などに特有の文化に接し、国際組織での公用文書の作成の実態に触れたりすること。そうした仕事についての認識を確かなものとする。

図書館や美術館といった文化機関の所蔵資料・文物を十全に理解すること。それら資料・文物を利用して、閲覧者や観覧者に対する資料提供や展覧のための技術に触れてみる。

海外の日本語教育施設に赴き、日本語教育の現状を理解するとともに現地教員の補助や研究授業を体験すること。

3. 教育・研究の方法

インターンシップの実施先としては、国連広報センター、大阪府立図書館、博物館・美術館などの文化機関や香港の日本語教育施設を予定している。

事前・事後指導にも必ず出席すること。

4. 成績評価の基準及び評価方法

インターンシップ先の評価および体験したインターンシップについてのレポートによって評価する。

科目コード	280110		
科目名	芸術史学演習 美術史学の方法論		
担当者	吉田 朋子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	プリント配布		
参考文献	『美術史学の歴史』ウード・クルターマン著 勝 國興・高阪一治訳, 中央公論美術出版社, 1996年, 4-8055-0289-4 その他適宜紹介する		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

美術作品の研究のために、美術史学は様々なアプローチの方法を蓄積してきた。これから美術作品の研究に取り組むために、具体的な論文を通して方法論を学ぶ。あわせて、美術史研究に必要な外国語読解能力の向上も目指す。

2. 教育・研究の個別課題

・美術史学の重要な論文のいくつか（欧文）を読み、そこで使われている方法論を考察する。

3. 教育・研究の方法

・毎回相当の分量を担当し、レジュメを作成してくることを前提に、議論を通して理解を深める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度50%、発表の成績50%で評価を行う。

5. 授業予定

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 文献講読 列伝
- 第3回 文献講読 アカデミー
- 第4回 文献講読 ラオコオン論争
- 第5回 文献講読 ヴィンケルマン
- 第6回 文献講読 ゲーテ
- 第7回 文献講読 ロマン主義
- 第8回 文献講読 ベルリン学派
- 第9回 文献講読 ブルクハルト
- 第10回 文献講読 ウィーン学派
- 第11回 文献講読 表現主義
- 第12回 文献講読 イコノロジー
- 第13回 文献講読 ゴンブリッチなど
- 第14回 文献講読 アラスなど
- 第15回 まとめ

科目コード	280115		
科目名	日本語学演習 国語史の諸問題		
担当者	堀 勝博		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	山口明穂他『日本語の歴史』（東京大学出版会）1997年 ISBN 4-13-082004-4		
参考文献	授業中にその都度指示する		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

さまざまな文献を読み、国語史の諸問題について、探求する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 国語史を概観し、各時代ごとの問題点を整理する
2. テキストを読み、そこからさまざまな研究課題を見出す
3. 関連する資料や論文を読み、理解・研究を深める

3. 教育・研究の方法

1. 文献を講読する
2. 文献に記載されている出典や用例について、解釈を行う

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度および取り組み姿勢40%、レポートまたは定期試験の成績60%で評価する。

5. 授業予定

- 第1回 導入
- 第2回 奈良時代の音韻
- 第3回 奈良時代の文字
- 第4回 奈良時代の語法
- 第5回 奈良時代の語彙
- 第6回 平安時代の文字
- 第7回 平安時代の音韻
- 第8回 平安時代の語法
- 第9回 平安時代の漢文訓読語
- 第10回 鎌倉・室町時代の音韻・文字
- 第11回 鎌倉・室町時代の語彙・語法
- 第12回 江戸時代前期
- 第13回 江戸時代後期
- 第14回 明治時代以降
- 第15回 総括

6. 留意事項

受講生の専攻分野や関心領域を考慮し、授業予定は変更する場合がある

科目コード	280116		
科目名	インターネット文化論演習		
担当者	吉田 智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

修士論文の作成に向けて研究テーマを選択し、研究の方向性を見つけ、その研究を深める。

2. 教育・研究の個別課題

研究テーマに関する理解を深めると同時に、問題意識を高める。関連する文献の読解に関しては、批判的視点を持って読むように心がける。

3. 教育・研究の方法

個別指導を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度（40%）とレポート～論文の原案～（60%）により、評価する。

5. 授業予定

- 第1回 各種の研究方法について
- 第2回 自分の研究テーマと研究方法の関係について
- 第3回 自分の研究テーマに関する資料の収集（1）～図書館の活用～
- 第4回 自分の研究テーマに関する資料の収集（2）
- 第5回 集めた資料の読解と批判的閲覧（1）～デジタル情報の活用～
- 第6回 集めた資料の読解と批判的閲覧（2）
- 第7回 研究方法の決定と先行研究との差別化
- 第8回 研究計画の作成と研究活動の実施（1）
- 第9回 研究計画の作成と研究活動の実施（2）
- 第10回 研究計画の作成と研究活動の実施（3）
- 第11回 研究計画の作成と研究活動の実施（4）
- 第12回 論文の作成とレビュー（1）
- 第13回 論文の作成とレビュー（2）
- 第14回 論文の作成とレビュー（3）
- 第15回 論文の作成とレビュー（4）

科目コード	280117		
科目名	読書支援プログラム演習 読書プログラムの現状と課題		
担当者	岩崎 れい		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	プリントを配布		
参考文献	授業中に紹介		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

この演習では、子どもたちに対する読書支援として、どのようなプログラムが実施されているかを知り、その特徴や課題について考察することを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 日本・米国・英国を中心に、子どもへの読書支援のために現在実施されている国の施策や民間の取組について学ぶ。
2. 図書館を中心に行われている子どもたちへの読書支援のプログラムについて学ぶ。
3. 国語科教育と読書支援との関連性について学び、考察する。
4. 子どもたちへの読書支援の取組が、現在抱えている課題について考察する。

3. 教育・研究の方法

1. 基本的な事項や事例を文献等で学ぶ。
2. 各自が関心を持った読書支援プログラムについて、法律・施策・取組事例及びその研究について調べ、その特徴と課題について考察する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

平常点及び授業中の課題発表50%、学期末レポート50%で評価する。

5. 授業予定

- | | |
|------|---|
| 第1回 | 日本における読書支援プログラムの現状と課題 (1) 行政施策 |
| 第2回 | 日本における読書支援プログラムの現状と課題 (2) 学校での取り組み |
| 第3回 | 日本における読書支援プログラムの現状と課題 (3) 社会の取り組み |
| 第4回 | 日本における読書支援プログラムの現状と課題 (4) 発表・問題提起 |
| 第5回 | 米国における読書支援プログラムの現状と課題 (1) 行政施策 |
| 第6回 | 米国における読書支援プログラムの現状と課題 (2) ファミリーリテラシープログラム |
| 第7回 | 米国における読書支援プログラムの現状と課題 (3) NCLB法との関わり |
| 第8回 | 米国における読書支援プログラムの現状と課題 (4) 発表・問題提起 |
| 第9回 | 英国における読書支援プログラムの現状と課題 (1) 行政施策 |
| 第10回 | 英国における読書支援プログラムの現状と課題 (2) ブックスター |
| 第11回 | 英国における読書支援プログラムの現状と課題 (3) 学力向上政策との関わり |
| 第12回 | 英国における読書支援プログラムの現状と課題 (4) 発表・問題提起 |
| 第13回 | 図書館における読書支援プログラムの現状と課題 |
| 第14回 | 国語科教育と読書支援の関連とその課題 |
| 第15回 | まとめ |

科目コード	280118		
科目名	アラブ・イスラーム文化史演習		
担当者	鷺見 朗子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	授業で必要な資料を配布する。		
参考文献	参考文献は適宜、授業で提示する。		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

今年度はイスラームの聖典コーランについての理解を深めることを目標とする。コーランは神が西暦7世紀にアラビア語で人類に下した啓示をそのまま書きとめたものであると信じられている。また、現在私たちの手元にあるコーランは、預言者ムハンマドが受けた啓示が人々によって記憶され、後に第3代カリフ、ウスマーンのとときに集録されたものである。関連文献資料を参考にしながら、コーランの幾章かを日本語訳で読み解いていく。それらによって、ムスリムの生活と思考の根幹となっているコーラン的規範を探求する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 歴史的背景
2. コーランの構成
3. コーランの内容

3. 教育・研究の方法

1. テキスト読解
2. 文献読解 (日本語・英語)
3. 発表と討論

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度10%、発表30%、学期末レポート60%により評価する。

5. 授業予定

- | | |
|------|-------------|
| 第1回 | イントロダクション |
| 第2回 | 時代背景 |
| 第3回 | 預言者ムハンマド |
| 第4回 | コーランの構成 |
| 第5回 | 神観念 |
| 第6回 | 神の唯一性 |
| 第7回 | 天地創造 |
| 第8回 | アダムの創造と樂園追放 |
| 第9回 | 人類の歴史と神の支配 |
| 第10回 | 終末 |
| 第11回 | 天国と地獄 |
| 第12回 | 礼拝・断食 |
| 第13回 | 巡礼・タブー |
| 第14回 | 婚姻・離婚 |
| 第15回 | 相続・売買 |

6. 留意事項

ゲスト講師による授業を行うこともある。

科目コード	280119		
科目名	日中言語交流史演習		
担当者	朱 鳳		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	授業毎にプリントを配布する。		
参考文献	『近代日中学術用語の形成と伝播 地理学用語を中心に』荒川清秀, 白帝社, 1997年 『近代日中新語の創出と交流』朱京偉, 白帝社, 2003年 『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』朱鳳, 白帝社, 2009年		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

中国では宣教師たちの尽力によって、早くから辞書の編纂と聖書の翻訳が手がけられた。これらの成果は当然日本の英学及び西洋知識の学習に影響を与えた。この科目は幕末と明治初期の和英字典と翻訳書づくりにおける英華字典の影響について研究し、異文化理解における漢語と漢字の重要性を明らかにしたい。

2. 教育・研究の個別課題

- 1) 和英字典と英華字典の語彙比較
- 2) 和製漢語作りにおける日本人の漢語力

3. 教育・研究の方法

資料の講読を中心とするが、受講生の発表も重視する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度 (30%)、レポートと発表 (70%) に基づいて総合的に行う。欠席回数が3分の1を超過した場合は、原則として単位を与えない。

5. 授業予定

- 第1回 日中言語交流における宣教師の役割
- 第2回 宣教師の翻訳と漢語の役割
- 第3回 ロバート・モリソン (Robert Morrison) と「華英・英華字典」(1815-1823)
- 第4回 モリソン「華英・英華字典」の日本への影響 (1)
- 第5回 モリソン「華英・英華字典」の日本への影響 (2)
- 第6回 ロブシャイト (W. Lobscheid) と『英華字典』(1866-1869)
- 第7回 発表 (1)
- 第8回 福沢諭吉の『増訂華英通話』(1860)
- 第9回 堀達之助と『英和对訳袖珍辞書』(1862)
- 第10回 中村敬宇と『英華和訳字典』(1879)
- 第11回 発表 (2)
- 第12回 英華字典、英和字典を通して、日中共通語彙について考察 (1)
- 第13回 英華字典、英和字典を通して、日中共通語彙について考察 (2)
- 第14回 発表 (3)
- 第15回 まとめ

科目コード	280120		
科目名	日本文学演習		
担当者	長沼 光彦		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	プリント配布		
参考文献	『読むための理論』石原千秋・他, 世織書房 『岩波講座文学』小森陽一・他, 岩波書店 『小説の方法』真銅正宏, 萌書房		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

日本文学には様々な研究方法がある。その全てを自分の研究に応用する必要はないが、研究の前提として知っておかなければならない。それらの方法論の可能性と限界を知ったうえで、自分の研究方法を選びべきである。

小説であるにせよ詩であるにせよ、まずは本文の表現に対する精細な分析と、読解を成り立たせる語彙や文化背景への理解が必要となる。これらを身につけるための基礎的な能力の養成が本科目の目標である。

また研究する上では、人が本を読む行為の意味を考える必要がある。一冊の本を読むためにも人は、語彙力、文化的な知識、文脈理解、虚構世界の再構成など、様々な能力を発揮している。文学とは、そのような人間の総合的な活動により享受されるものであることも見直してもらいたい。

2. 教育・研究の個別課題

- ・日本文学研究の方法論への理解
- ・テキストの精細な分析力の養成
- ・語彙や文化など基礎的知識の習得
- ・読書行為と作品との関連への理解

3. 教育・研究の方法

テキストや資料を配付し解説も行うが、主として演習形式で進める。

受講者が発表する場合は、自ら資料を収集し準備する必要がある。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度 (30%)、ゼミでの質疑応答 (20%)、ゼミ発表 (20%)、学期末のレポート (30%) により行う。研究能力を養うためのゼミであるため、出席することを重視する。

5. 授業予定

- 第1回 日本文学研究のための基礎的な手順
- 第2回 論文、文献、基礎資料の調査
- 第3回 本文校訂
- 第4回 テキスト論
- 第5回 作者とテキスト
- 第6回 語り手論
- 第7回 テキストの多声的特徴
- 第8回 テキストの構造
- 第9回 読者論
- 第10回 読書行為の分析
- 第11回 比較文学論
- 第12回 文化記号論とテキスト
- 第13回 文化交流と文学
- 第14回 文学と様々な文脈
- 第15回 まとめ

科目コード	280123		
科目名	日本伝統文化演習		
担当者	鳥居本 幸代		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	『平安朝のファッション文化』鳥居本幸代、春秋社、2003年 『精進料理と日本人』鳥居本幸代、春秋社、2006年		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

衣、食、住の視点から、京都をキーワードにした日本の伝統文化について探求する。衣の視点では大袖が発達した平安朝から、小袖中心と変貌した江戸時代にいたる変遷をたどる。食の視点からは、現代の和食が確立した江戸時代の食生活までの経緯を探る。住の視点においては、平安朝から町屋が確立した江戸時代の住生活までを概観し、衣との関わりについても明らかにする。これらを通して、修士論文のテーマを選択する方向へ、研究を深める。

2. 教育・研究の個別課題

- 1 時代背景の理解
- 2 文献資料および、絵画資料による理解
- 3 体験による理解

3. 教育・研究の方法

講義形式とゼミ形式を併用し、フィールドワークを実施することもある。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は授業参加度（30%）、授業内での発表（20%）、学期末レポート（50%）に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 日本の伝統文化について、総合的に考えてみる
- 第2回 平安朝ファッションと有職故実
- 第3回 平安朝ファッションと有職文様
- 第4回 小袖の発達と染織文化
- 第5回 小袖雛型本にみる流行の発信
- 第6回 衣にまつわる伝統行事
- 第7回 食文化の変遷を概観する
- 第8回 精進料理とは
- 第9回 京料理の発達と京都の食文化
- 第10回 茶懐石について
- 第11回 食にまつわる伝統行事
- 第12回 寝殿造にみる平安朝の住環境
- 第13回 茶室建築と茶の湯
- 第14回 名物裂について
- 第15回 住環境の変化とインテリア

科目コード	280129		
科目名	聖書学演習		
担当者	中里 郁子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『パウロの福音』カルロ マリア マルティエーニ、女子パウロ会、2009、ISBN978-4-7896-0671-4 『聖書 旧約聖書続編つき（共同訳）』日本聖書協会、2009、ISBN978-4-8202-1271-3		
参考文献	授業中に紹介する		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

新約聖書の書簡の著者であるパウロの生涯と思想を知り、パウロの異邦人への宣教と初期キリスト教への理解を深める。

2. 教育・研究の個別課題

- 1 パウロの生涯を知る
- 2 パウロの異邦人への宣教と初期の教会について学ぶ
- 3 パウロの思想を理解する

3. 教育・研究の方法

- 1 受講者は、テキスト『パウロの福音』を事前に読み、要約をレジюмеにまとめて授業に参加する
- 2 テキストに関連する「パウロ書簡」を読解する
- 3 「パウロ書簡」の中から一つの書簡を選び、その書簡の書かれた背景とパウロの思想をレポートにまとめて発表する

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業中の取り組み（50%）及びレポート（50%）を総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 聖パウロについて
- 第3回 パウロ書簡について
- 第4回 パウロの回心
- 第5回 パウロの受難
- 第6回 パウロの変容
- 第7回 教会の神秘
- 第8回 教会共同体への愛
- 第9回 苦難と慰め
- 第10回 不法の神秘
- 第11回 十字架の言葉
- 第12回 和解の奉仕職
- 第13回 受講者による発表（1）
- 第14回 受講者による発表（2）
- 第15回 まとめ

科目コード	280146		
科目名	出版・情報文化演習		
担当者	鎌田 均		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

識字、読解能力を基礎にした、文字情報などの情報を人が適切に理解し、利用できる能力にみる、文字情報を中心とした様々な書籍、文書、記録などの情報源とそれを読解し、利用する人との関わりについての研究法を学ぶ。「出版・情報文化特論」で検討したテーマの内容、研究動向をもとにして、個別の研究課題を見つけ、小論文を完成させ発表することで、文字・活字情報とそれについてのリテラシーに関わる諸分野における研究方法を学ぶとともに、国語科を中心とした学校教育、生涯学習における読解力育成、情報リテラシー教育における実践方法も検討する。

2. 教育・研究の個別課題

情報と人との関わり、メディア、情報リテラシーに関係する分野についての研究動向を理解し、研究方法について実践する。

3. 教育・研究の方法

文献購読、ディスカッションをもとに個別のテーマを同定し、研究課題を設定し、研究方法について実践的に学ぶ。

4. 成績評価の基準及び評価方法

小論文 (60%)、授業への参加 (40%)

5. 授業予定

- 第1回 授業内容と授業の進め方についての説明
- 第2回 文字表現と文化：文献講読とディスカッション
- 第3回 インターネットにおける情報とその理解：文献講読とディスカッション
- 第4回 出版、活字メディアとその読解：文献講読とディスカッション
- 第5回 メディア、情報リテラシー教育の実践と研究(国語科教育への導入)：文献講読とディスカッション
- 第6回 情報、メディアと現代社会：文献講読とディスカッション
- 第7回 研究テーマの探求
- 第8回 研究課題の設定
- 第9回 研究方法
- 第10回 データ、資料収集法
- 第11回 データ、資料の分析と議論の展開
- 第12回 引用、参考文献の確認
- 第13回 個別発表とディスカッション
- 第14回 フィードバックの小論文への反映
- 第15回 まとめ

科目コード	280151		
科目名	漢文学特論		
担当者	朱 鳳		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	授業毎にプリントを配布する。		
参考文献	『漢文入門』小川環樹,西田太一郎著,岩波書店,1957		

1. 科目の研究目標

1. 漢文の基本的な読み方を把握する。
2. 句読及び訓点法の基本を把握する。
3. 漢文の内容及びその歴史背景を理解する。

2. 教育・研究の個別課題

授業ごとに短い漢文数編を読む。漢文の文法を理解した上で、日本語における独特な読み下し法もマスターする。

3. 教育・研究の方法

漢文を読むことが基本である。漢文を熟読した上、文法や、日本語における読み方などを学習していく。漢文の内容を深く解読でき、訓点の付け方をマスターすることを最終目標とする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度 (30%)、レポートと発表 (70%) に基づいて総合的に行う。欠席回数が3分の1を超過した場合は、原則として単位を与えない。

5. 授業予定

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 漢文とは何か
- 第3回 句読および訓点
- 第4回 漢文文法概説
- 第5回 『説苑』の数編を読む 漢文の否定形について
- 第6回 『説苑』の数編を読む 漢文の仮定形について
- 第7回 『論語』の数編を読む 漢文の疑問形について
- 第8回 『論語』の数編を読む 漢文の助詞について
- 第9回 『莊子』の数編を読む 漢文の反語形について
- 第10回 『莊子』の数編を読む 漢文の許可表現について
- 第11回 『孟子』の数編を読む 漢文の使役形について
- 第12回 『孟子』の数編を読む 漢文の比較について
- 第13回 『史記』の数編を読む 漢文の受身形について
- 第14回 『史記』の数編を読む 漢文の命令形について
- 第15回 まとめ

科目コード	280152		
科目名	西洋美術特論 美術史と図版の問題		
担当者	吉田 朋子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『Picturing Art History』Ingrid R. Vermeulen, Amsterdam University Press, 2010, 9789089640314		
参考文献	適宜紹介する		

1. 科目の研究目標

美術史という研究分野を支える図版について、英語文献を読みながら考察する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・美術史に関する英語文献を精読する
- ・作品の複製という問題について考察を深める

3. 教育・研究の方法

- ・文献をあらかじめ読み、担当者の作成したレジュメをもとに議論する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度50%・課題の成果50%とする。

5. 授業予定

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 文献講読と議論 (1) 1章1節
- 第3回 文献講読と議論 (2) 1章2節
- 第4回 文献講読と議論 (3) 1章3節
- 第5回 文献講読と議論 (4) 2章1節
- 第6回 文献講読と議論 (5) 2章2節
- 第7回 文献講読と議論 (6) 2章3節
- 第8回 文献講読と議論 (7) 2章4節
- 第9回 文献講読と議論 (8) 3章1節
- 第10回 文献講読と議論 (9) 3章2節
- 第11回 文献講読と議論 (10) 3章3節
- 第12回 文献講読と議論 (11) 3章4節
- 第13回 受講者による発表 (各自の研究における図版の位置づけについて)
- 第14回 受講者による発表 (現代の複製図版について)
- 第15回 まとめ

科目コード	280153		
科目名	スピーチ・コミュニケーション演習 日本語の話しことば教育		
担当者	平野 美保		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『現代日本のコミュニケーション研究』日本 コミュニケーション学会, 三修社, 2011		
参考文献	『教育工学研究の方法』清水康敬他編著教 育工学会監修, ミネルヴァ書房, 2012, 978-4-623-06363-5 『プロセス・エジュケーション』津村俊充, 金子書房, 2012		
備考	選択必修		

1. 科目の研究目標

日本語の話しことば教育(支援)に関する内容と研究方法について把握する。

2. 教育・研究の個別課題

話しことばに関する教育について把握するとともに、研究方法について理解し、研究の方向性を固める。

3. 教育・研究の方法

- ・前半は、話しことば教育に関する内容(学校教育、生涯学習、一般書)についてまとめ、話しことば教育の内容を把握するとともに、問題点を検討する。
- ・後半は、話しことば教育に関する研究に参考になる教育工学における研究方法について把握する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度(50%)、発表(50%)に基づき、総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 学校教育における話しことば教育
(総合的な学習)
- 第3回 学校教育における話しことば教育
(指導と言語環境)
- 第4回 話しことばに関する生涯学習
(情報収集と分類)
- 第5回 話しことばに関する生涯学習
(課題の検討と企画)
- 第6回 話しことばに関する一般書の検討
(情報収集と分類)
- 第7回 話しことばに関する一般書の検討 (討議)
- 第8回 話しことば教育に関する研究方法
(実践としての教育工学の方法論)
- 第9回 話しことば教育に関する研究方法
(教育工学における研究方法の分類)
- 第10回 話しことば教育に関する研究方法
(測定の方法)
- 第11回 話しことば教育に関する研究方法
(調査研究の方法)
- 第12回 話しことば教育に関する研究方法
(質的調査法)
- 第13回 話しことば教育に関する研究方法
(教授法の開発に関する研究方法)
- 第14回 話しことば教育に関する研究方法
(これから期待される教育工学研究)
- 第15回 まとめ

科目コード	280154		
科目名	スピーチ・コミュニケーション特論 日本語の話しことばとその教育		
担当者	平野 美保		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	『現代日本のコミュニケーション研究』日本コミュニケーション学会編, 三修社, 2011, 978-4-384-05659-4 『非言語行動の心理学』V.P.リッチモンド・J.C.マクロスキー, 北大路書房, 2006, 4-7628-2490-9 『日本語の発声レッスン』川和孝, 新水社, 1981 『音声言語指導大事典』高橋俊三(編), 明治図書出版, 1990, 4184788041		

1. 科目の研究目標

日本語の話しことばやその教育に関連する内容を理解するとともに、話しことばに関して深く理解する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・日本語の話しことばやその教育に関する文献を読むことによって、関連の内容を理解する。
- ・話しことばに関する技能向上に努めることによって、話しことばに関する理解を深める。

3. 教育・研究の方法

- ・文献を読み、担当者が作成したレジュメをもとに議論する。
- ・話しことばに関する技能向上に努めることを通して、理論と実践との関連について考察する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度(50%)、発表(50%)に基づき、総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 話しことばの基礎(呼吸法、発声・発音練習)
- 第2回 文献講読(話し方の基本)
- 第3回 文献講読(人間関係と話し方)、話しことばの基礎練習(正確な発音)
- 第4回 文献講読(聞き方の基本)、話しことばの基礎練習(正確な発音)
- 第5回 文献講読(音声表現)、話しことばの基礎練習(滑舌練習)
- 第6回 文献講読(音声言語指導の史的展開)、話しことばの基礎練習(「外郎売」意味の確認と練習)
- 第7回 文献講読(「話しことば」の社会心理)、話しことばの基礎練習(「外郎売」練習)
- 第8回 文献講読(朗読、詩の選定と練習)
- 第9回 文献講読(群読 朗読 詩の本番)
- 第10回 文献講読(話しことば教育の現状と課題〈基礎〉)
- 第11回 文献講読(話しことば教育の現状と課題〈応用〉)
- 第12回 文献講読(話しことば教育に関する実践報告〈初等教育〉)
- 第13回 文献講読(話しことば教育に関する実践報告〈中等教育〉)
- 第14回 文献講読(話しことば教育に関する実践報告〈高等教育〉)
- 第15回 まとめ

科目コード	280161		
科目名	特別研究 I 研究テーマ・研究計画を決定する		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M1		
テキスト	担当の教員の指示による。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

修士論文作成のために必要な基本的事項を理解し、研究課題・計画を早期に策定する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 修士論文の意義について理解する
2. 修士論文のテーマを決定する
3. 研究方法を決定する
4. 研究倫理について理解する
5. 研究計画を策定する

3. 教育・研究の方法

各指導教員から個別に指導を受ける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

4月末に提出する研究計画書とその達成状況により、評価する。

5. 授業予定

- 第1回 研究事始め：大学院における研究とは
- 第2回 修士論文の意義：卒業論文の発展形として
- 第3回 修士論文の意義：大学院での研究の収斂として
- 第4回 修士論文における論文テーマの設定
- 第5回 修士論文における論文テーマの修正と設定
- 第6回 研究の方法について(文献調査法)
- 第7回 研究の方法について(アンケート調査法)
- 第8回 文献調査・情報収集の方法(図書館の利用)
- 第9回 文献調査・情報収集の方法(文献目録の作成)
- 第10回 文献調査・情報収集の方法(ノートの記載)
- 第11回 先行研究を知ることの意義
- 第12回 先行研究と論文テーマとの関連を知る
- 第13回 先行研究の論文のモチーフへの応用について
- 第14回 よい論文のための適切な引用のあり方
- 第15回 研究倫理について-剽窃のことなど

科目コード	280162		
科目名	特別研究Ⅱ 研究の構想を決定する		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M1		
テキスト	担当の教員の指示による。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

研究計画に従って先行研究にあたり、設定したテーマに関する研究の到達水準を把握し、自身の研究が担うべき課題を明らかにする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 先行研究についてまとめる
2. データや情報を収集する
3. 論文の構想を決定する
4. 論文のフォーマットについて把握する

3. 教育・研究の方法

各指導教員から個別に指導を受ける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究計画の達成状況および学期末に提出する研究経過報告書（A 4、900字×5枚）によって評価する。

5. 授業予定

- 第1回 論文テーマと論文作成の手順について
- 第2回 論文の構成
- 第3回 序論の役割
- 第4回 論文の体裁
- 第5回 先行研究についてまとめる
- 第6回 先行研究について発表する
- 第7回 先行研究について批評する
- 第8回 論文の文章（文体と表記）
- 第9回 論文の文章（表記と用語）
- 第10回 論述方法
- 第11回 論述の学術性
- 第12回 論文の注（注記の原則）
- 第13回 論文の注（注の形式）
- 第14回 論文の注（欧文・和文の注）
- 第15回 修士論文作成に向けた論文構成法のまとめ

科目コード	280163		
科目名	特別研究Ⅲ 修士論文を作成する		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M2		
テキスト	担当の教員の指示による。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

修士論文の執筆を進め、必要な情報やデータをまとめ、中間発表を行う。

2. 教育・研究の個別課題

1. 論文の章段構成を決定し、執筆を開始する
2. 文献引用、フィールドワーク、インタビュー調査などについて計画する
3. 中間発表を行い、残された期間の研究計画について再確認する

3. 教育・研究の方法

各指導教員から個別に指導を受ける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究計画の達成状況および学期末に実施する中間発表（30分…口頭発表25分＋質疑5分）の成績によって評価する。

5. 授業予定

- 第1回 修士論文作成事始め：「特別研究Ⅰ～Ⅱ」の学習内容を振り返る
- 第2回 論文テーマの明確な設定
- 第3回 論文作成の手順の確認
- 第4回 論文構成の確認
- 第5回 先行研究の文献資料収集
- 第6回 先行研究の文献資料収集：先行研究と論文テーマの関連の確認
- 第7回 書誌情報の分析
- 第8回 書誌情報の整理
- 第9回 論文テーマに適合した論述方法とは：客観的論述を考える
- 第10回 論証の方法としての客観的論述（論文の目的の明確化）
- 第11回 論証の方法としての客観的論述（概念と定義の重要性）
- 第12回 論証の方法としての客観的論述（概念化の重要性）
- 第13回 論証の方法としての客観的論述（定義づけ）
- 第14回 論証の方法としての客観的論述（まとめ）
- 第15回 自己の修士論文の客観的論証方法を振り返る

科目コード	280164		
科目名	特別研究Ⅳ 修士論文を完成する		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M2		
テキスト	担当の教員の指示による。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

修士論文を完成し、成果発表を行う。

2. 教育・研究の個別課題

1. フォーマット、字句、章段構成、引用方法、書誌情報、図表・数値のデータ等、形式面の遺漏がないか留意する
2. 剽窃等、研究倫理上の問題がないか確認する
3. 修士論文を完成し、成果発表を行う

3. 教育・研究の方法

各指導教員から個別に指導を受ける。

4. 成績評価の基準及び評価方法

提出された論文に対し、主査および副査の計3名による口頭試問を実施し、その判定をもとに、専攻会議にて最終評価を行なう。

5. 授業予定

- 第1回 修士論文作成に向けて「特別研究Ⅰ～Ⅲ」の学習内容を振り返る
- 第2回 論文テーマとこれまでの論術内容の確認
- 第3回 先行研究と論文テーマとの関連の再確認
- 第4回 論文の論述と内容の確認（論文全体の構成）
- 第5回 論文の論述と内容の確認（章・節の構成）
- 第6回 論文の論述と内容の確認（起承転結）
- 第7回 論文の論述と内容の確認（引用の表示）
- 第8回 論文の論述と内容の確認（注の表示）
- 第9回 論文の論述と内容の確認（引用文献と参考文献）
- 第10回 論文の論述と内容の確認（図表の表示）
- 第11回 論文の論述と内容の確認（剽窃等の有無）
- 第12回 論文の論述と内容の確認（本論）
- 第13回 論文の論述と内容の確認（序論・結論）
- 第14回 書誌情報の整理と論文フォーマットの適正化
- 第15回 論文を完成する

科目コード	270012		
科目名	認知機構特論		
担当者	古賀 一男		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	講義時間中に資料を配布する		
参考文献	『知覚の正体』古賀一男, 河出書房新社, 2011, 978-4-309-62432-7 Vinocukar Vision and Stereopsis I.P. Howard and B.J. Rogersm Oxford Psychology No. 29		
備考	隔年開講2 平成24年度以前入学者必修		

1. 科目の研究目標

【認知】という言葉はいくつかの異なった分野で使用されている。心理学に関連した領域だけでも【認知心理学】、【認知科学】、【情報科学】、【脳科学】、【神経科学】、【生理学】、【臨床医学】等の多岐にわたる分野で使用されており、それぞれの分野では少しずつ異なった意味で用いられている。これら多くの分野に共通な定義としては【人間が外界の物理的的刺激を知覚し、それを中枢神経機能によって理解し、解釈し、判断し、記憶し、忘却し、更には運動機能としての末梢器官を制御する機能全体を指す】ということになる。また人間を含めた生物には生から死に至る【発達】というプロセスがあり、この過程において認知の働きは大きく変化することが知られている。特に乳幼児の行動における臨界期についての研究は最近の認知科学によって多くの新しい知見が知られて来た。この講義においては認知機能について、基礎的な知覚のメカニズムとその神経科学的な意味、それらの発達過程における様々な変化や障害について広汎な立場から解説を行う。具体的には【認知発達の機構】、【認知能力の生理学的基礎】、【認知障害の神経生理学的基礎】および【認知の個人差】について詳細な検討を加える。

2. 教育・研究の個別課題

特に視覚と視覚に関する中枢のメカニズムについて解説をおこないながら今日的な問題を展開する。

3. 教育・研究の方法

講義による事例の提示と古今の主要な文献を紹介する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

レポートの作成を課す。

5. 授業予定

第1回 認知科学概論。認知科学の基礎的な意味、研究方法論について解説をおこなう。

第2回 認知科学概論。認知科学が関与する研究テーマについていくつかの典型的な事例を紹介する。

第3回 視覚の生理学的基盤。認知科学に関与する視覚機能について生理学的側面から問題の所在を紹介する。

第4回 視覚実験方概論。視覚研究の実験についてどのように実験をおこなうか、その方法論を解説する。

第5回 眼球運動計測法。視覚研究における方法のひとつである眼球運動の計測方法の歴史的な展望について解説をおこなう。

第6回 眼球運動計測法。視覚研究におけるひとつである眼球運動の計測方法の歴史的な展望について解説をおこなう。

第7回 眼球運動計測法。眼球運動計測法の最も典型的な手法である角膜反射法を紹介する。

第8回 眼球運動と認知機能。眼球運動から人の認知機能の何が理解できるかについて解説をおこなう。

第9回 眼球運動と認知機能。眼球運動の研究方法の特殊性とその限界を理解する。

第10回 眼球運動と幼児の発達。乳幼児の発達を眼球運動で検討する方法の基本的な手法を紹介する。

第11回 眼球運動と幼児の発達。乳幼児の発達を眼球運動で検討する時に注意しなければならない問題を紹介する。

第12回 眼球運動と重力・微小重力。地球を数百キロ離れた宇宙空間で人間の認知機能はどのように変化するのかについて実験的に検討する方法を紹介する。

第13回 眼球運動と重力・微小重力。微小重力空間における眼球運動はヒトのどのような認知機能を分析検討できるのかについて考える。

第14回 宇宙における知覚と重力。宇宙における微小重力研究から得られた知見から地球における重力が我々の認知機能に及ぼしている影響を明らかにする。

第15回 宇宙における知覚と重力。重力がヒトのに及ぼす影響から生物の進化について考察を行う。

科目コード	270013		
科目名	心理統計学特論（多変量解析）		
担当者	藤島 寛		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	『多変量データ解析法』足立浩平，ナカニシヤ出版，2006，4-7795-0052-2 『共分散構造分析[Amos編]』豊田秀樹，東京図書，2007，4-489-02008-7 『因子分析法第2版』芝祐順，東京大学出版会，1995		

1. 科目の研究目標

心理学における研究対象の中から、多様で多くの変量(変数)を含むデータの統計的解析法である多変量解析について、その技法の基本的理論と応用的実践的技法を習得する。

2. 教育・研究の個別課題

本特論では、多変量解析の基本としてデータ構造とその表現について習得するとともに、主要な変数を抽出する為の方法として主成分分析、因子分析、項目分析、及び変数間の因果関係を検討する為の方法として重回帰分析、共分散構造分析を習得する。

3. 教育・研究の方法

多変量解析の基本的理論に関する講義とともに、質問紙によって得られたデータを用いた因子分析による質問紙の洗練化、及び変数間の因果関係の分析を実習する。使用ソフトは、主にSPSS、AMOSを使用する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

講義時に行われる実習の理解内容に基づいた平常点(100%)により評価する。

5. 授業予定

- 第1回 質的研究と量的研究
- 第2回 多変量解析概説、データの構造化・縮約化
- 第3回 データの中心化傾向と散布度
- 第4回 主成分分析
- 第5回 因子分析の基本
- 第6回 直交回転と斜交回転
- 第7回 因子パターン
- 第8回 主因子法と最尤法
- 第9回 因子パターンと因子の信頼性
- 第10回 確認的因子分析
- 第11回 あらためて、因子を構成する質問項目の抽出について－
内的整合性と項目分析
- 第12回 確認的因子分析と探索的因子分析
- 第13回 相関と共分散による因果関係の検討
- 第14回 重回帰分析とパス解析
- 第15回 モデルの決定について

6. 留意事項

講義には、行列式などの数学的知識やSPSSなどの統計ソフトの使用方法を前もって理解しておく必要はありません。

科目コード	270014		
科目名	心理統計学特論（少数例統計） 実験、調査データ分析の基礎を身につける		
担当者	森下 正修		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

現代の多くの心理学研究は数量的研究です。研究テーマに沿った実験や調査をおこない、得られたデータを分析して、自説を検討するための材料を得ます。したがって、研究者は自分のデータにふさわしい統計手法を選び、使うことができなければなりません。これは、心理学の研究者だけでなく、実証データをカウンセリングに生かそうという臨床家や、生徒のデータなどから適切な教育評価をしようという教育者にとっても欠かせないスキルといえます。

本講義では、こうした統計手法の理論的背景を学ぶとともに、心理・教育分野のデータに対して実際にコンピュータで分析をおこないます。こうした実習を通じて、分析の手順や留意点に関して体験的に理解することをめざします。

2. 教育・研究の個別課題

教育や臨床などあらゆる心理学分野で必要とされる記述統計全般と、無相関検定、t検定、分散分析、カイ二乗検定といった推測統計について、理論的枠組を理解しコンピュータ上で実施する際の手順を身につけること。

3. 教育・研究の方法

独自に作成した講義プリントを配布します。また、サンプルデータを配布し、その分析手順を実演するとともに、受講生にも自分でコンピュータ上での分析を実習してもらいます。

4. 成績評価の基準及び評価方法

講義内容を踏まえ、自分の研究計画に基づくデータについての統計処理を実施した期末レポートを提出してもらいます。評価は授業参加度(30%)、レポート(70%)の比率とします。

5. 授業予定

- 第1回 ガイダンス、イントロダクション
- 第2回 記述統計① 度数分布、ヒストグラム
- 第3回 記述統計② 代表値、散布度
- 第4回 記述統計③ データの変換、標準化
- 第5回 相関分析① 散布図、ピアソンの積率相関係数、無相関検定
- 第6回 相関分析② 偏相関、順位相関係数
- 第7回 t検定① t検定(対応のある場合)
- 第8回 t検定② t検定(対応のない場合)、1サンプルのt検定
- 第9回 分散分析① 1要因分散分析(対応のない場合)
- 第10回 分散分析② 1要因分散分析(対応のある場合)
- 第11回 分散分析③ 2要因分散分析(分析の流れ)
- 第12回 分散分析④ 2要因分散分析(実施手順)
- 第13回 分散分析⑤ 3要因分散分析
- 第14回 名義尺度データの分析① カイ二乗検定(変数が1つの場合)
- 第15回 名義尺度データの分析② カイ二乗検定(クロス集計)、コクランのQ検定

科目コード	270015		
科目名	心理学研究法特論 より良い研究計画をたてるために		
担当者	森下 正修		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

現在、心理学の研究法には、実験、調査、検査や面接などがあります。手法は様々ですが、多くの研究に共通しているのは、科学的な態度です。すなわち、実証性や客観性をできる限りそなえ、過去の知見を統合的に説明し、なおかつ新しい成果を得ようとするのが、現代の心理学研究には必須です。

そうした研究を自分で行うためには、事前計画の段階で、自説の論理構成を検討することと、データの収集方法を最適化することが大事になります。たとえば実験室実験において、妨害となる要素を可能な限り排除し、適切な実験方法を考えるにはどうすればよいか。学校・教育現場において子どもたちを対象とした調査を行う場合、研究者や教師の主観的な評価のみによらず、妥当性と信頼性のあるデータをどのように集めればよいか。臨床場面においてクライアントを対象とした研究を行う際に、研究計画や倫理の面でどのようなことに気をつけなければいけないか。事前計画の段階でいろいろなことに気を配らねばなりません。

さらに、データを得た後では、自説と照らし合わせて検証を行い、論文等にまとめることも必要です。論理的で説得的な実証研究論文を執筆するには、どういった点に留意すべきでしょうか。

本講義では、これらの問題に共通する理論的、実践的なポイントについて、子どもから成人まで幅広いサンプルを対象とした研究例をもとに解説してゆきます。

2. 教育・研究の個別課題

心理学研究における実験・調査に必要な基礎的知識とスキルを身につけ、実験室での実験や、学校・教育現場、臨床場面での調査において活用できる研究計画を立てられるようになること。

3. 教育・研究の方法

独自に作成した講義プリントを配布します。実際の論文の読み方・まとめ方を指導するクリティカル・リーディングなどの実習も行います。

受講生の皆さんと対話しながら授業を進めていきます。

4. 成績評価の基準及び評価方法

講義内容を踏まえ、先行研究に対して批判的検討を加

えたレポート発表を行ってまいります。評価の比率は、授業参加度（30%）、レポート発表（70%）です。

5. 授業予定

- 第1回 ガイダンス、イントロダクション
- 第2回 心理学研究における科学性と倫理
- 第3回 研究計画の基礎① 独立変数と従属変数
- 第4回 研究計画の基礎② 参加者間計画と参加者内計画
- 第5回 研究計画の基礎③ 統制（参加者間計画）
- 第6回 研究計画の基礎④ 統制（参加者内計画）
- 第7回 研究・統計の批判的検討①
欠陥・不備の指摘
- 第8回 研究・統計の批判的検討②
構成要素の置換、新規要素の追加
- 第9回 クリティカル・リーディング
- 第10回 研究論文の執筆法
- 第11回 研究実践① 実験法
- 第12回 研究実践② 質問紙調査法
- 第13回 研究実践③ 質的研究法
- 第14回 レポート発表①
先行研究に対する批判的検討の報告
- 第15回 レポート発表②
先行研究に対する批判的検討についての評価

科目コード	270032		
科目名	発達心理学特論		
担当者	高井 直美		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	授業中に指示する。		
備考	発達・学校心理学専攻は必修		

1. 科目の研究目標

ピアジェ、ヴィゴツキーなどの発達の基本的理論、および昨今の重要な研究について理解する。さらに、発達に問題が生じている子ども、障害を持っている子どもの発達過程や個人差について理解し、教育現場等でどのような支援を行うことができるか、さまざまな観点から考察する。

なお、本科目は「DP科目」の「臨床発達心理学の基礎に関する科目」（以下「基礎」と略す）の1-1～2-2を含む。

2. 教育・研究の個別課題

以下に示す個別課題をふまえて授業を進める。

- ・ 健常の幼児・児童の発達を支援する教員の役割
- ・ 発達に問題がある幼児・児童に対しての、教員による支援的関わり
- ・ 発達の理論を教職場面に適用する意義等

3. 教育・研究の方法

発達心理学の基本的理論、およびいくつかの重要な研究について、文献講読も行いながら、詳細に理解する。発達に問題が生じている子ども、さらに障害を持っている子どもの発達について学び、問題や障害の支援の仕方について、事例を通して具体的に学ぶ。さらには、臨床発達の現場、教育現場等で行われている支援のさまざまな実践について理解する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業中の文献発表や出席状況を30%、レポートを70%として、総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 発達理論の歴史的変遷①－認知発達の理論を中心に－
- 第2回 発達理論の歴史的変遷②－社会性の発達の理論を中心に－
- 第3回 乳幼児期の重要な発達研究の紹介
- 第4回 児童期青年期の重要な発達研究の紹介
- 第5回 発達を支援するとは？－行動の変容に関するアプローチ－

- 第6回 現代社会における発達支援－社会性の発達を支援するアプローチ－
- 第7回 乳幼児期におけるフィールドの中での発達－家庭での子育てをどう支援するか－
- 第8回 児童期におけるフィールドの中での発達－学校現場での問題をどう支援するか－
- 第9回 発達の障害とアセスメント；自閉症およびその周辺の障害
- 第10回 発達の障害とアセスメント；精神発達遅滞とダウン症候群
- 第11回 発達の障害とアセスメント；ADHDおよび学習障害
- 第12回 現代社会における諸問題（虐待など）と精神保健・問題の予防
- 第13回 最近の発達研究の紹介①（文献講読）
- 第14回 最近の発達研究の紹介②（文献講読）
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

順番は変わることがある。

科目コード	270033		
科目名	乳幼児心理学特論 人の一生：乳幼児期の発達と臨床的課題		
担当者	礒部 美也子		
単位数	2	期間	通年集中
配当学年	M12		
テキスト	集中講義の前に別途指示します		
参考文献	『対話で学ぶ発達心理学』塩見邦雄編，ナカニシヤ出版，2004 『乳幼児の心理—コミュニケーションと自我の発達（コンパクト新心理学ライブラリ）』麻生武，サイエンス社 『よくわかる乳幼児心理学（やわらかアカデミズム・わかるシリーズ）』内田伸子，ミネルヴァ書房，2008 テーマに応じて適宜紹介します。 新版K式発達検査		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

乳幼児心理学特論では、乳幼児の発達理解を中心に、さらに生涯にわたる人間の身体的・生物学的・認知的発達研究の知見を共有するとともに具体的な幼児期の発達に関する理解を深めていく。特に現場における諸問題、たとえば乳幼児期の言語発達の遅れ、発達障害、特に自閉症、ADHD、その後の発達に見られる諸問題を幼児教育・発達心理学の観点から事例等を示しながら具体化し、保育・教育現場に応用可能な状態を目指す。

理論と実践の両面から、乳幼児の発達の様相とその課題を論じることができ、現在の臨床的課題を理解する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 発達心理学の知見をテキストと種々の文献からまとめ、講義との関連を深める。
2. 発達理論を整理し、互いにどのような関係にあるのかを考える。
3. 発達研究における方法論を明確にし、具体的な形で方法論を展開する。
4. 発達臨床の視点から、乳幼児期にみられる臨床的課題や障害の問題を理解する
5. 言語の発達の評価と支援について理解する。

3. 教育・研究の方法

講義と授業の中でのディスカッション、関連事項の個別プレゼンテーション、先行論文の発表などを実施する。適宜個別に小課題を出す。

4. 成績評価の基準及び評価方法

課題のプレゼンテーション (30%)、最終レポート (30%)、小テスト (40%)

5. 授業予定

- 第1回 乳幼児心理学、発達心理学に関する概要、基礎理論
- 第2回 胎児・乳児の認知能力、乳幼児の運動発達
- 第3回 社会性、感情の発達
- 第4回 幼児期の認知発達・心の理論
- 第5回 愛着理論と愛着にかかわる諸問題
- 第6回 乳幼児期の発達評価
- 第7回 言語発達の評価と支援 (1) 言語発達評価と診断の要点
- 第8回 (2) 言語発達支援の現代的問題と支援の場
- 第9回 (3) 言語発達段階に即した対応
- 第10回 (4) 場面に即した対応 (5) 言語発達評価と支援の実際
- 第11回 幼児期の発達の諸問題、発達の障害 (1)
- 第12回 幼児期の発達の諸問題、発達の障害 (2) 事例を中心に
- 第13回 個人発表
- 第14回 個人発表
- 第15回 個人発表、全体的まとめ

科目コード	270034		
科目名	青年心理学特論		
担当者	上田 恵津子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

青年期は、子どもから大人への移行期である。第二の誕生の時期ともいわれ、心身の両面において重要な変容を遂げる。

本科目では、青年期における身体と心の発達の諸相、発達課題、自己の形成と確立、対人関係（友人関係・恋愛関係）、適応・不適応、進路選択・進路意識などについて論じる。青年期は、自己が質的に変化し再構成される時期であり、自分自身が一つの課題となる時期であるので、自己に関わる諸問題についても考察する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 青年期の発達の諸相について理解を深める。
2. 青年期に生じる諸問題を考察する。
3. 青年期に関する各自の問題意識を啓発する。

3. 教育・研究の方法

1. 主として講義形式によるが、演習形式も取り入れる。
2. 講義では、教科書は使用せず、必要に応じてプリントを配布する。各自ノートをとること。
3. 演習では、受講者各自が専門論文を講読し、概要と考察を発表して討論を行う。
4. ただ知識を得るだけでなく、自分なりに問題意識をもって考察を深め、研究を発展させる態度が望まれる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

レポート（30%）、発表と討論参加（50%）、授業態度（20%）を総合して評価する。欠席は減点対象となる。

5. 授業予定

- 第1回 青年期
- 第2回 身体の発達
- 第3回 性役割の獲得
- 第4回 自我の発達
- 第5回 思考の発達
- 第6回 友人関係
- 第7回 恋愛関係
- 第8回 進路選択
- 第9回 不適応（摂食障害、不登校）
- 第10回 不適応（非行、リスク行動）
- 第11回 青年期と日本的自己
- 第12回 論文講読発表と討論（自己に関して）
- 第13回 論文講読発表と討論（対人関係に関して）
- 第14回 論文講読発表と討論（適応・不適応に関して）
- 第15回 まとめ

科目コード	270035		
科目名	老年心理学特論		
担当者	伊藤 一美		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	『成人発達とエイジング』 シャイエ/ウィリス, プレーン出版, 2006, 4892428345 『高齢期の心理と臨床心理学』 下仲順子, 培風館, 2007, 4563057061		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

生涯発達の後半部にあたる中年期から老年期について、身体機能面の変化、認知・学習・記憶といった精神機能面の変化、パーソナリティや対人関係などの心理社会的変化を捉える。そのうえで、人生の統合期にある主体的存在としての高齢者について、老いへの適応と人生の再構築について、体験的に学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 中年期から老年期にかけての心理的变化に関して、諸研究の知見を踏まえながら概観を捉える。
- (2) 老年期の心理アセスメントについての理論と技術を学び、あわせて、認知症などに関連する神経心理学的検査を学ぶ。
- (3) 人生の終末期について実践的・体験的に学び、心理療法の可能性を探る。
- (4) 異世代との交流や若年層での老いや死の教育の問題にも視野を広げ、自己のライフパースペクティブとしての老いについて検討する。

3. 教育・研究の方法

- ・生涯発達の観点からの中年期・老年期に関する文献を取り上げ、代表的な知見に触れる。
- ・老年期における回想法などの心理療法や心理アセスメントを実習形式で学び、現場での老年者理解につなげる。
- ・体験的な学習を通じて、自身のライフパースペクティブについて考察する。
- ・これらについて、適宜、文献の講読や受講者の発表と討論、実習課題などを通じて、体験的に学ぶ。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加態度（20%）、授業中の発表および実習ワークと小レポート（50%）、期末レポート（30%）に基づき、総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 生涯発達心理学の概論
- 第2回 生涯発達における中年期・老年期
- 第3回 老年期における身体的変化
- 第4回 老年期における認知的変化（1）
- 第5回 老年期における認知的変化（2）
- 第6回 老年期における心理アセスメント（1）
- 第7回 老年期における心理アセスメント（2）
- 第8回 老年期における心理社会的変化（1）
- 第9回 老年期における心理社会的変化（2）
- 第10回 老年期における自己の再構築－アイデンティティについて－
- 第11回 老年期における自己の再構築－語りと回想－
- 第12回 人生の終末期を考える（1）
- 第13回 人生の終末期を考える（2）
- 第14回 人生の終末期を考える（3）
- 第15回 まとめ

科目コード	270051		
科目名	学校心理学特論Ⅰ（学習心理）		
担当者	廣瀬 直哉		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	発達・学校心理学専攻は必修		

1. 科目の研究目標

学習は、心理学において古くから取り上げられてきた古典的なテーマの一つである。また、近年の学習科学などの新たな領域においても、学習は中心的な概念として取り上げられている。心理学における学習の研究は、知覚＝運動学習、概念学習、社会的学習など幅広い分野で行われているが、本特論では、主に学校教育における学習の過程に焦点を当てる。そして、学習に関する心理学分野での最近の文献をもとにして、学習を支援する学校教育の役割について考察を深めて行きたい。

2. 教育・研究の個別課題

1. 学習に対する心理学的アプローチの理解
2. 様々な知識の獲得過程についての理解
3. 学習における協調と学習環境についての理解
4. 学習における動機づけと学習指導についての理解

3. 教育・研究の方法

講義および演習形式で授業を進める。受講生にあらかじめ決められたテーマに関する文献を読み、発表を行ってもらう

4. 成績評価の基準及び評価方法

テストは実施せず、授業への参加度（100%）により評価を行う。

5. 授業予定

- 第1回 学習についての心理学
- 第2回 学習の理論
- 第3回 記憶と知識獲得
- 第4回 言語的知識の獲得
- 第5回 数学的知識の獲得
- 第6回 科学的知識の獲得
- 第7回 問題解決と理解
- 第8回 内発的動機づけ
- 第9回 達成目標理論
- 第10回 個人差と学習
- 第11回 学級集団
- 第12回 教師の役割
- 第13回 状況的学習
- 第14回 学習環境のデザイン
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

受講生の人数や関心により、授業や課題の内容を変更することがある。

科目コード	270052		
科目名	学校心理学特論Ⅱ（教育理論） スクールカウンセラーの役割と教育理論を知る		
担当者	神月 紀輔		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『学校心理学ガイドブック 第3版』学校心理士資格認定委員会、風間書房、2012、978-4759919172 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』Jean Lave・Etienne Wenger 著、佐伯 胖 訳、産業図書、1993、4-7828-0084-3		
参考文献	『学校心理士の実践:幼稚園・小学校編（講座「学校心理士—理論と実践」）』『学校心理士』認定運営機構、北大路書房、2004、978-4762823770		

1. 科目の研究目標

教育および学校心理学の基礎理論を学び、スクールカウンセラーの役割を知る

2. 教育・研究の個別課題

- スクールカウンセラーの実情を知る。
- 教育理論の実践的展開の方法を知る

3. 教育・研究の方法

毎回、輪番による発表を行う。ディスカッションを中心に据え、各自の研究テーマと課題との接点を探る。

4. 成績評価の基準及び評価方法

レポート（50%）：期間中に3回程度発表、および授業に参加する態度（50%）：発表の内容、および授業時の参加意欲を自己評価し点数化する。

5. 授業予定

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 教育とは、学校心理学とは
- 第3回 学校心理学の基礎理論
- 第4回 初等中等教育現場で起こっている問題（1）
不登校、ひきこもりの問題
- 第5回 初等中等教育現場で起こっている問題（2）
学習障害など障害の問題
- 第6回 初等中等教育現場で起こっている問題（3）
いじめ、非行等の問題
- 第7回 学校心理士の活動（1）アセスメント
- 第8回 学校心理士の活動（2）コンサルテーション
- 第9回 学校心理士の活動（3）カウンセリング
- 第10回 教師保護者と学校心理士の連携（1）
教職員との連携
- 第11回 教師保護者と学校心理士の連携（2）
保護者との連携
- 第12回 教師保護者と学校心理士の連携（3）
地域・関係機関との連携
- 第13回 学校心理士の倫理（1）
人権の尊重と責任の保持
- 第14回 学校心理士の倫理（2）
秘密保持と援助サービスへの介入
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

基本的に出席を重視します。
個々の研究課題における教育理論に関する論文等の文献は積極的に持ち寄ってください。
上記、授業計画は、受講生の状況によって柔軟に対応する予定です。

科目コード	270053		
科目名	教育方法学特論 様々な教育の方法について科学的に理解する		
担当者	工藤 哲夫		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『教育の方法』井上智義他, 樹村房 『ファシリテーション・グラフィック』堀公俊他, 日本経済新聞		

1. 科目の研究目標

言語活動と各教科の教育方法の関係について理解を進め、思考力と表現力と対話力の育成を考えた教育の方法について理解する。情報機器の活用を含めた、主体的な学習の方法について、学習者の立場から研究する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・教育方法学についてその研究の方法と意義を理解する。
- ・各教科における言語活動の位置を整理する。
- ・コミュニケーションの方法について理解をすすめる。
- ・情報の活用について、その学習効果を心理統計を交えながら研究する。

3. 教育・研究の方法

土曜日の全日を使って、数回にわたり教育方法の実践の現場に見学・参加し、それをもとに、ディスカッション中心のゼミ形式で行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

自ら課題を設定し、その課題に対してどの程度学習できたかを、自己評価する。

また、教育方法の実践の現場で新たな発見ができたかを、自己評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 各教科における言語活動
- 第3回 各教科に共通に役立つ言語活動
- 第4回 アイスブレイクの方法
- 第5回 チームビルディングの方法
- 第6回 ワールド・カフェの方法
- 第7回 アクション・ラーニングの方法
- 第8回 ファシリテーション・グラフィックの方法
- 第9回 タブレットPC・ミーティングの方法
- 第10回 ポスターセッションの方法
- 第11回 ワークショップ・デザインの方法
- 第12回 ワークショップ・デザインの実践
- 第13回 効果の測定について
- 第14回 情報を活用した教育方法に関する文献の講読
- 第15回 自己評価

6. 留意事項

フィールドワークを行う。そのための参加費用が数千円程度かかる。参考文献は、その都度紹介する。文献等は自分で検索し、積極的に教員に質問するなど、自ら学ぶ姿勢が必要である。

科目コード	270054		
科目名	教育・心理検査特論		
担当者	松島 るみ		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

本科目では、心理教育的アセスメントについて理解を深め、多様なアセスメントの方法を学ぶのと同時に、心理検査についての実施や採点、解釈の方法について学ぶことを目的とする。

心理検査は、人間の心的諸側面の個人差を測定するために作成された心理学的手法を用いた測定手段である。検査者は、心理検査を活用する明確な目的を持ち、使用する検査の実施方法や理論的な背景等を習得することが必要である。心理検査の中には、幼児・児童・生徒の理解や学級づくり、教育相談等、教育活動を効果的に行うことを目的に開発されたものもある。この科目においては、心理検査や教育評価の理解を深めるとともに、学校教育場面で使用される心理検査の理解と基本的な技術の習得を目指す。

2. 教育・研究の個別課題

- ・心理・教育的アセスメントの目的や方法について理解すること。
- ・教育・心理検査や教育評価に関する基礎的な知識を習得すること。
- ・教育・心理検査の基本的な技術を習得すること。

3. 教育・研究の方法

受講生による発表とディスカッション、心理検査の実習を中心に授業を進める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

発表やディスカッションへの参加状況から総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 心理・教育的アセスメントとは
- 第2回 心理・教育的アセスメントの方法
- 第3回 心理検査の活用
- 第4回 学級・学校のアセスメント
- 第5回 教育評価
- 第6回 個別知能検査（ウェクスラー式知能検査：WAISを中心に）の概要
- 第7回 言語性検査の実施
- 第8回 言語性検査の採点演習
- 第9回 言語性検査の結果解釈
- 第10回 動作性検査の実施
- 第11回 動作性検査の採点演習
- 第12回 動作性検査の結果解釈
- 第13回 プロフィール分析
- 第14回 検査結果による指導計画への発展
- 第15回 その他の個別知能検査概要

科目コード	270057		
科目名	学校臨床心理学実習 子どもの発達理解に基づく心理教育的援助 技法の習得		
担当者	薦田 未央		
単位数	1	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	授業中に配布する資料の他は、適宜指示する。		
参考文献	『実践グループカウンセリングー子どもが育ちあう学級集団づくりー』田上不二夫(編著), 金子書房, 2010 『学童期の支援ー特別支援教育をふまえてー』長崎勤・藤野博(編著), ミネルヴァ書房, 2011 『軽度発達障害のある子のライフサイクルに合わせた理解と対応』田中康雄, 学習研究社, 2006		

1. 科目の研究目標

子どもの心身の発達過程を理解し、それに基づき特に児童・生徒で発達支援を必要とする対象者のライフステージに合わせた問題の理解を深める。

また、児童・生徒への直接的支援方法であるカウンセリングやグループカウンセリングの理論や技術を習得する。加えて、問題を抱える子どもに関わる保護者や教師へのコンサルテーションやコーディネートについての知識と技術も実践的に習得することを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

- ①子どものライフステージに合わせた心身発達の過程を理解する。
- ②子どもへの直接的支援方法（グループ支援、個別支援）を実践的に理解する。
- ③カウンセリング等、支援技法の習得
- ④保護者、教師等の心理状態を理解し、組織との関係性について理解を深める
- ⑤保護者、教師等へのコンサルテーション、コーディネートを実践的に理解する。

3. 教育・研究の方法

児童・生徒の心理、保護者、教師の心理についての理解と支援技法の理論を基礎として、仮想事例の見立てや面接のロールプレイを中心とした実習により実践的に発達および教育的支援方法を習得する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度・実習への取り組み態度（45%）、ディスカッション（30%）、課題作成（25%）を評価対象とする。

5. 授業予定

- 第1回 学校における支援ニーズと相談支援のあり方
- 第2回 幼児・児童・生徒における心理的問題の把握
- 第3回 人間関係形成に関するグループ実習（技法の理解と実際）
- 第4回 人間関係形成に関するグループ実習（評価）
- 第5回 子どもへの直接支援実習（カウンセリングにおける態度と技法）
- 第6回 子どもへの直接支援実習（RP：子どもの立場）
- 第7回 子どもへの直接支援実習（RP：支援者の立場）
- 第8回 子どもへの直接支援実習（RPの総合評価）
- 第9回 保護者への直接支援実習（RP：保護者の立場）
- 第10回 保護者への直接支援実習（RPの評価）
- 第11回 教師へのコンサルテーションについての実習（ケースの見立てと方針）
- 第12回 教師へのコンサルテーションについての実習（事例検討）
- 第13回 校内連携に関するグループ実習（模擬カンファレンス）
- 第14回 校内連携に関するグループ実習（評価）
- 第15回 カウンセリング・コンサルテーションの実際と倫理的配慮、まとめ

6. 留意事項

実習授業という性質上、実際に授業で取り組む課題から実践的、体験的に理論や方法を学ぶことが重要であり、それらが評価対象となることを認識しておくこと。

また、臨床発達心理士受験資格条件となる「臨床実習」（合計200時間）の一部および、学校心理士資格取得に関する実習2「学校カウンセリング・コンサルテーション基礎実習」の科目に該当する。

科目コード	270058		
科目名	特別支援アセスメント実習 発達支援の理論と方法に関する実践力養成		
担当者	薦田 未央		
単位数	1	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	適宜、参考資料を配布する。また、使用する検査用具・マニュアル等も貸出とする。		
参考文献	『発達障害とその周辺の問題』宮本信也 他、中山書店、2008 『新版K式発達検査にもとづく発達研究の方法』中瀬惇、ナカニシヤ出版、2005 『WISC-IVの臨床的利用と解釈』プリフィ テラ,A.,サクロフスキー,D.H.,ワイス,L. G.(編)／上野一彦・(監訳),日本文化 科学社、2012 『学童期の支援—特別支援教育をふまえて—』 長崎勤・藤野博編著,ミネルヴァ書房, 2011 その他は授業中に紹介する。		

1. 科目の研究目標

乳幼児および就学後の児童・生徒で発達支援を必要とする対象者への理解と支援技術を習得する。特に、療育、保育、教育（特別支援教育）の現場で必要とされる専門知識や教育支援、発達支援に関する理論やアセスメント方法など専門的技術の習得を目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

- ①就学前後における、気になる子どもの困りや障害特性、問題実態を理解する。
- ②特別支援教育における理念と意義を理解し、その教育ニーズへの理解を深める。
- ③子どもの状態を把握するアセスメント方法（発達検査、知能検査等）の習得。
- ④アセスメント結果の解釈と個別の支援計画の作成を行う。
- ⑤教育機関、発達支援機関との協働・連携についての理解と方法を学ぶ。

3. 教育・研究の方法

理論の理解を基礎として、心理検査に関するロールプレイや提示事例の解釈等を実習し、実践的に発達および教育的支援方法を習得する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度・実習への取り組み態度（30%）、課題作成（40%）、ディスカッション（30%）を評価対象とする。

5. 授業予定

第1回 発達臨床とは

- 第2回 発達支援ニーズと実態について
 第3回 発達支援における専門性と役割
 第4回 実態把握の方法（アセスメント方法の概説）
 第5回 乳幼児アセスメント実習（保育所・幼稚園・療育機関等でのアセスメントの概説）
 第6回 乳幼児アセスメント実習（発達検査の実施）
 第7回 乳幼児アセスメント実習（発達検査結果の解釈と所見のまとめ方）
 第8回 乳幼児に関する指導・支援計画の作成
 第9回 児童・生徒アセスメント実習（学校・教育相談機関等でのアセスメントの概説）
 第10回 児童・生徒アセスメント実習（知能検査の実施）
 第11回 児童・生徒アセスメント実習（知能検査結果の解釈と所見のまとめ方）
 第12回 児童生徒に関する個別の指導計画・教育支援方針の作成
 第13回 療育、就学、教育相談等における保護者支援、コンサルテーション（アセスメント結果の活用）
 第14回 仮想事例によるケースワーク
 第15回 療育、保育、教育現場における支援体制と連携について

6. 留意事項

実習授業という性質上、実際に授業で取り組む課題から実践的、体験的に理論や方法を学ぶことが重要であり、それらが評価対象となることを認識しておくこと。

また、臨床発達心理士受験資格条件となる「臨床実習」（合計200時間）の一部および、学校心理士資格取得に関する7「特別支援教育」の科目に該当する。

科目コード	270060		
科目名	生徒指導・キャリア教育特論		
担当者	尾崎 仁美		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	隔年開講2 平成23年度以後入学者に適用		

1. 科目の研究目標

本特論では、生徒指導や教育相談、キャリア教育の定義と内容、および意義について理解するとともに、キャリア意識や自己の発達をめぐる諸問題の考察を通して、一人ひとりの内面を理解し、個に応じた指導や援助を行うために必要な視点を培う。

また、具体的なキャリア教育実践の検討を通して、児童生徒の人間の成長を導く生徒指導・キャリア教育のあり方を考察する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 生徒指導および教育相談、キャリア教育の意義と内容を理解する。
2. キャリア発達に関する理論を学ぶ。
3. キャリア意識と自己の発達をめぐる諸問題について考察する。
4. 具体的なキャリア教育実践の検討を通して、児童生徒に対するキャリア形成の支援のあり方を考察する

3. 教育・研究の方法

講義と、受講生による発表とディスカッションの両方を併用して行う。文献は、授業中に指示する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業への出席、発表、ディスカッションへの参加状況、レポートなどから総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 生徒指導とは
- 第2回 生徒指導の体制と諸問題
- 第3回 教育相談の意義と内容
- 第4回 キャリア教育の意義と内容
- 第5回 キャリア発達理論①個人－環境適合理論
- 第6回 キャリア発達理論②自己理論
- 第7回 キャリア発達理論③社会的認知理論
- 第8回 キャリア発達の促進要因
- 第9回 キャリア意識をめぐる諸問題
- 第10回 キャリア意識と自己概念の発達
- 第11回 キャリア意識とジェンダーの問題
- 第12回 キャリア教育の具体的な展開①小学校低学年のキャリア教育
- 第13回 キャリア教育の具体的な展開②小学校高学年のキャリア教育
- 第14回 キャリア教育実践の検討
- 第15回 まとめ

科目コード	270072		
科目名	臨床心理学特論 I		
担当者	伊藤 一美		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	『テキスト臨床心理学1「理論と方法」』デビソンG.C.ほか、誠信書房、2007 『テキスト臨床心理学2「研究と倫理」』デビソンG.C.ほか、誠信書房、2007		

1. 科目の研究目標

本科目では、前期の「臨床心理学特論 I」を踏まえて、臨床心理学的な人間理解について、パラダイムという観点からとらえ直し、心理学や対人援助における心理臨床の位置づけについて学ぶことを目的とする。それに加えて、臨床心理学的な研究方法と倫理についても学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) こころの問題における“異常”とは何かについて理解と想像力を習得する。
- (2) 臨床心理学的なアセスメントについて、さまざまな立場や視点を学ぶ。
- (3) 臨床心理学的介入について、数多い心理療法の技法を「パラダイム」という観点からまとめ直し、その共通点や相違点を理解する。
- (4) 臨床心理学的な研究方法とそれに伴う倫理的問題について学ぶ。
- (5) 自身の臨床心理に関する実習体験と本科目で学んだ理論や知見との関連を実感をもって学ぶ。

3. 教育・研究の方法

上記参考文献や授業中に指定するテキストを用いての講義と、受講生が分担しての発表によって構成する。

講義・発表いずれにおいても、できるだけ討論を重視する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

期末レポート、発表や討論を含む授業参加度から総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 異常とはなにか
- 第3回 臨床心理学的アセスメントの考え方
- 第4回 臨床心理学的介入（1）人間学・実存主義パラダイム
- 第5回 臨床心理学的介入（2）精神分析的パラダイム
- 第6回 臨床心理学的介入（3）学習理論パラダイム
- 第7回 臨床心理学的介入（4）認知理論パラダイム
- 第8回 臨床心理学的介入（5）生物学パラダイム
- 第9回 臨床心理学的介入（6）集団への介入（グループ・夫婦・家族）
- 第10回 臨床心理学的介入（7）コミュニティ心理学
- 第11回 臨床心理学的介入（8）統合的アプローチ
- 第12回 臨床心理学における研究方法
- 第13回 臨床心理学研究における倫理の問題
- 第14回 各自の心理臨床実践から考える
- 第15回 まとめ

科目コード	270073		
科目名	心理療法特論 統合的アプローチを学ぶ		
担当者	杉原 保史		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
テキスト	『技法としてのカウンセリング入門』杉原保史, 創元社, 2012, 4422115464		
参考文献	『心理療法の統合を求めて』ワクテルP, 金剛出版, 2002, 477240726X 『心理療法家の言葉の技術』ワクテルP, 金剛出版, 2004, 4772408290 『説得と治療』フランクとフランク, 金剛出版, 2007, 4772409912 『統合的アプローチによる心理援助』杉原保史, 金剛出版, 2009, 4772410694		

1. 科目の研究目標

心理療法の入門書は、主要な学派の概要のバラバラで並列的な記述であるか、いずれか1つの学派についての体系的な記述であるか、そのいずれかであることが多い。そこでは入門者はいずれか1つの学派を選択し、もっぱら排他的にその学派を学んでいくことが暗黙の前提となっている。この講義は、この前提に挑戦するものである。受講学生が、異なる様々の学派間の隠れた共通性や両立可能性についての認識を深めること、ならびに、実践の中で複数の学派の知恵を調和的に活用できるための準備性を整えること、を目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

心理療法が多くの学派によって成り立っていることを理解し考察する／学派というものが持つ機能や性質について検討する／学派についての自らの姿勢を振り返る／学派を超えて共通する治療要因について学ぶ／統合的なアプローチについて理論的に学ぶ／統合的なアプローチによる実践の報告に触れる／ロールプレイなどの実習を行い体験的に学ぶ

3. 教育・研究の方法

講義、論文やテキストの講読、質疑、討議、実習。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、質疑や討議や実習への参加の様子を50%、レポートを50%として行う。

5. 授業予定

- 第1回 統合的アプローチとは
- 第2回 学派とは何か／学派との関わり方の検討／学派を超えて共通する治療要因
- 第3回 ロールプレイ／デモンストレーション
- 第4回 ロールプレイ／体験学習と振り返り

- 第5回 あらゆる学派に共通の基礎：傾聴スキル1
開かれた質問・承認
- 第6回 あらゆる学派に共通の基礎：傾聴スキル2
反射・要約
- 第7回 傾聴のエクササイズ1 セラピストの態度
- 第8回 傾聴のエクササイズ2 声への注目
- 第9回 循環的心理力動アプローチ
- 第10回 DVDを見て討議
- 第11回 2人カウンセラーによるカウンセリング実習1
- 第12回 2人カウンセラーによるカウンセリング実習2
- 第13回 カウンセラーの言葉の技術1 受容的で無罪
証明的なコメントづくり
- 第14回 カウンセラーの言葉の技術2 防衛の一時的
支持
- 第15回 カウンセラーの言葉の技術3 帰属的コメント

科目コード	270074		
科目名	臨床心理面接特論 I		
担当者	三好 智子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	授業中に指示する。		

1. 科目の研究目標

心理臨床実践は理論のみでは成り立たず、対人援助における実際的な関わりの姿勢や技術を身につけてゆくことが求められる。そして、これらを身につけてゆく過程では、自分自身のものとのとらえ方、感じ方、反応の仕方等をできるだけ知ること、そして、それぞれの特性を備えた個々が、自らの実感をさぐり、それと照らし合わせながら、「いまここ」における関わりのあり方を模索してゆくことが大切である。

「臨床心理面接特論 I」では、まず、文献の講読やディスカッションを通して、臨床心理面接における基本姿勢や枠の意味などについて理解してゆく。その上で、ロールプレイとその振り返りを通して、対人援助における関わりの姿勢と技術の基礎を身につけることを目的とする。この他、電話受付やインテーク陪席などの心理臨床センター心理相談室の業務に関する模擬練習を行うとともに、こうした業務に携わるうえで不可欠な倫理的配慮についても取り上げていく。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 事例論文や面接技法について述べた文献を講読し、それについてディスカッションを行うことを通して、臨床心理面接における基本姿勢や枠の意味などについて学ぶ。
- (2) 心理臨床センター心理相談室におけるインテーク陪席・電話受付に際しての留意点について学び、これらの実習に備える。
- (3) ロールプレイとその振り返りを行い、(1) について理解を深めるとともに、個々の特性にふさわしい関わりのあり方を模索する。
- (4) 臨床心理面接に携わるうえで不可欠である、基本的な倫理的感覚を養う。

3. 教育・研究の方法

- (1) 事例論文・文献の購読については、各自指定の文献を事前に熟読の上、ディスカッションを行う。
- (2) 心理臨床センター心理相談室におけるインテーク陪席・電話受付に関して、概要と留意点について説明した後、模擬実習にて練習を行う。
- (3) ロールプレイについては、受講者同士でセラピストとクライアント役を交代で担当し、その後、振り返り

を行う。実習後は、逐語録を作成し内容について改めて検討する（セラピスト）、役作りの過程も含めた体験内容を振り返り文章にまとめる（クライアント役）、ロールプレイに臨席して感じたこと・考えたことを文章にまとめる（見守り手）等、それぞれの課題によってレポートを作成する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

課題への取り組み（30%）、ロールプレイ・模擬実習・ディスカッションへの参加態度（40%）、レポートの内容（30%）から、総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 文献の購読①/電話受付について①
- 第3回 電話受付について②
- 第4回 文献の購読②/インテーク面接への陪席について①
- 第5回 インテーク面接への陪席について②
- 第6回 インテーク報告書の作成について
- 第7回 文献の購読③
- 第8回 ロールプレイと振り返り①
- 第9回 文献の購読④
- 第10回 ロールプレイと振り返り②
- 第11回 文献の購読⑤
- 第12回 ロールプレイと振り返り③
- 第13回 文献の購読⑥
- 第14回 ロールプレイと振り返り④
- 第15回 心理臨床における倫理的配慮について

6. 留意事項

- ・主に実習形式で行うため、出席が重視される。
- ・受講者同士のロールプレイや模擬実習には、他の受講生や自らの体験を丁寧に扱う心構えで臨んでいただきたい。

科目コード	270075		
科目名	臨床心理面接特論Ⅱ		
担当者	空間 美智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

心理臨床実践は理論のみでは成り立たず、体験を通して実際的な関わりの姿勢を身につけることが求められる。これらを身につける過程では、自分自身のものとのとらえ方、感じ方、反応の仕方等について理解すること、そして、それぞれに異なる特性を備えた個々が、自らの実感やさぐり、それと慎重に照らし合わせながら、自らに適した「いまここ」における関わりのあり方を模索することが大切である。

「臨床心理面接特論Ⅱ」では、「臨床心理面接特論Ⅰ」に引き続き、文献の講読やディスカッションを通して、臨床心理面接における基本姿勢について理解する。クライアントと治療者の関係性構築のあり方について、実習を通して体験的理解を深める。また、臨床心理面接で用いられる具体的な技法について、体験的に学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 事例論文や面接技法について述べた文献を講読し、それに関するディスカッションを通して、臨床心理面接における基本姿勢について理解する。
- (2) 傾聴や共感的理解といった臨床心理面接における基本姿勢や、クライアントと治療者の関係性構築のあり方について、体験的理解を深める。
- (3) 臨床心理面接で用いられる具体的な技法について、体験的に学ぶ。

3. 教育・研究の方法

- (1) 事例論文や文献の講読については、各自指定の文献を事前に熟読の上、ディスカッションを行う（使用する文献については、授業時間中に指示する）。
- (2) 体験実習では、体験の後にディスカッションを行い、各自振り返りのレポートを作成する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

体験実習や発表、ディスカッションにおける準備や取り組みの姿勢（70%）、レポートの内容（30%）から、総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 面接に関わる文献講読（1）
- 第3回 ロールプレイと振り返り（1）
- 第4回 面接に関わる文献講読（2）
- 第5回 ロールプレイと振り返り（2）
- 第6回 面接に関わる文献講読（3）
- 第7回 ロールプレイと振り返り（3）
- 第8回 面接に関わる文献講読（4）
- 第9回 ロールプレイと振り返り（4）
- 第10回 技法の実習（動機づけ面接）
- 第11回 技法の実習（セルフモニタリング）
- 第12回 技法の実習（リラクゼーションとイメージ技法）
- 第13回 技法の実習（アサーション）
- 第14回 技法の実習（社会的スキル訓練）
- 第15回 まとめ

科目コード	270101		
科目名	心身医学特論 心と身体の対話		
担当者	神原 憲治		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
テキスト	『バイオフィードバックとリラクゼーション法』竹林直紀、神原憲治、志田有子、金芳堂、2011		
参考文献	『心身医学標準テキスト 第3版』久保千春、医学書院、2009		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

心身医学は「心身相関」を基本概念とした医学であり、臨床に適用したものが心療内科、心身相関の病態を持つ疾患が心身症である。

病院各科はもちろんのこと、心理臨床の現場においても心身症や機能性身体症状に関連した事例は増加しており、心身医学の基本的な知識は必須のものとなっている。社会的にも心身症関連の疾患は増加の傾向にあり、今後重要性を増していくと思われる。

本科目では、心身医学に関する基本概念、主に心理臨床、病院臨床の現場において必要な基礎及び臨床的内容について理解し、論じることを目標とする。また、臨床応用としての心療内科について理解し、どのような疾患に対してどのようなアプローチがなされており、それが、心理療法とどのように関連・連携しているのかについて概説する。また、精神生理学（バイオフィードバック）、行動科学の実習を通して、心身相関、ストレスと身体の関係、心身の気づきについての実践的な理解を深めることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

- ・心身医学の背景について理解する
- ・心身医学の基礎となる生理、情動理論などについて学習する
- ・心身症の定義、代表的な心身症を把握する
- ・心身症の病態、及び心身相関について理解し、概説できるようになる
- ・心身症の治療的アプローチを理解する
- ・ストレスと疾患の関係について、実習を通して理解を深める
- ・応用精神生理学、バイオフィードバックとストレスアセスメントについて体験的に理解する
- ・心療内科臨床の実際について理解する
- ・心身医学と心理療法の関係を理解し、応用できるようになる

3. 教育・研究の方法

講義はプリントとスライドを用いて行う。実習はバイオフィードバックシステムを用いて行う。講義、実習では、適宜グループディスカッションも取り入れる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度（30%）、小レポート（30%）、期末レポート（40%）に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 心身医学序論：心身医学、心身症、心療内科とは
- 第2回 心身医学の基礎：心身相関の生理と脳科学
- 第3回 病態論：アレキシサイミア（失感情症）、情動とストレス
- 第4回 実習（1）：心身医学とストレスプロフィール
- 第5回 心身症各論（1）：代表的な心身症（1）消化器心身症
- 第6回 心身症各論（2）：代表的な心身症（2）機能性身体疾患
- 第7回 応用精神生理学と心身医学
- 第8回 実習（2）：心身症とバイオフィードバック
- 第9回 心身医学と心身相関の研究
- 第10回 ストレス学と心身医学：ストレスと疾患
- 第11回 心療内科学：病院・医院における心療内科の実際
- 第12回 心療内科学：心身医学的治療と症例
- 第13回 身体論：心身への気づきと心身医学
- 第14回 実習（3）：ソマグラム、心と身体の対話
- 第15回 総括：心身医学と心療内科のまとめ

科目コード	270102		
科目名	大脳生理学特論		
担当者	佐々木 博		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	『脳とニューロンの科学』新井康充著，掌華房		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

大脳の機能局在は、近年の脳科学の発展に伴い、急速に明らかになってきた。本講座では主として光トポグラフィやfunctional MRIをはじめとする最新の機能的画像診断法から得られた知見を論じ、“こころ”の座の最新の研究を紹介する。また、シナプス形成のメカニズムと認知発達の関係や脳の性差、再生医療と中枢神経系との関わりなどについても論じる。

なおこの科目は「DP科目」の「認知」の2-1～3-9をふくむ。

2. 教育・研究の個別課題

- ①脳科学における最新の画像診断法の理解
- ②自然科学的な観点から論文を評価、理解する
- ③脳機能研究分野における分子生物学的知識の獲得

3. 教育・研究の方法

主としてスライドを用いて授業を進める。プリント資料も配布するので、授業内容の確認に役立てる。参考書：“脳とニューロンの科学”新井康充著（掌華房）

4. 成績評価の基準及び評価方法

出席状況、提出課題（期末試験）で評価する。

5. 授業予定

- 第1回 心の座と脳機能研究の歴史
- 第2回 脳機能研究法の基礎知識：言語の発達と障害、知能の発達と障害などの研究法を解説する。
- 第3回 脳の発達と環境：乳幼児期の脳の発達、環境が学力の基礎の発達と学習障害へ及ぼす影響について解説する。
- 第4回 脳の発達と環境：環境が認知の基礎課程の発達と障害に及ぼす影響について
- 第5回 ニューロン、シナプス
- 第6回 脳の左右差
- 第7回 脳の性差
- 第8回 ホルモンと脳
- 第9回 情動と脳
- 第10回 ストレスと脳：ストレスが社会的認知の発達と障害に及ぼす影響
- 第11回 睡眠と概日リズム
- 第12回 記憶（1）：記憶形成のメカニズム
- 第13回 記憶（2）：記憶の保持、固定化に関する最新の知見
- 第14回 老化と脳：成人期・老年期における脳の老化のメカニズム
- 第15回 再生医療と中枢神経

科目コード	270103		
科目名	児童精神医学特論		
担当者	久保田 泰考		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

児童精神医学領域で扱われる精神疾患について学ぶ。発達も含めた多様な観点から精神障害を理解することを目標とし、思春期・成人の精神病理についても広く学習する。さらに中枢神経系の発達に関して神経科学の知識を深める。

2. 教育・研究の個別課題

古典的な精神病理学：神経症・精神病概念の整理

子どもの神経症・不安障害：精神分析理論と社会・情動発達モデルの関連

脳の発達と精神障害：OCD、AD/HD、トゥレット障害などの神経学的基盤

子どもの精神疾患：うつ病、統合失調症、双極性障害

自閉スペクトラム症：自閉症、アスペルガー症候群、特定不能型 子どもの精神療法：精神分析モデル、トラウマ論、無意識の概念化

3. 教育・研究の方法

講義形式中心で毎回資料を配布。特に予習は必要としないが、学生側からの復習に基づいたフィードバックや要望に応じて、講義内容を柔軟に調整・変更する。症例検討や映像資料の供覧も必要に応じて行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業への参加度（30%）、レポート（70%）に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション：児童精神医学とはどんな学問か
- 第2回 神経症1：古典的な神経症論、精神病圏との病態水準の違い、今日の診断基準について
- 第3回 神経症2：愛着理論から神経症概念を見直す、情動アセスメントの考え方と実際
- 第4回 精神病論：統合失調症の精神病理、自閉症との関係
- 第5回 症例検討1：面接法による思春期・青年期の危機のアセスメント
- 第6回 自閉スペクトラム症：自閉症の概念、自閉スペクトラム症（ASD）について
- 第7回 症例検討2：ASDの社会・情動発達、ケース報告とフィードバックのすすめ方
- 第8回 感情障害：うつ病、躁うつ病、児童における特性
- 第9回 PTSD：トラウマへの対応、社会・情動発達の観点からの具体的支援のすすめ方
- 第10回 強迫性障害：強迫性障害、トゥレット症候群、その他児童における関連障害について
- 第11回 境界型パーソナリティ障害：ボーダーラインの概念、治療について
- 第12回 臨床精神薬理：児童精神医学における薬物療法の理論・実際
- 第13回 臨床心理学（4）学校における児童生徒の問題
- 第14回 臨床心理学（5）心理臨床などの専門家と専門機関
- 第15回 症例検討3：関係の障害、情動の失調への介入の考え方、特に古典症例から学ぶ

科目コード	270106		
科目名	障害児心理学特論		
担当者	片岡 基明		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
参考文献	適宜指示する		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

発達の障害や適応上の問題がある子どもの心理を理解し、豊かな生活をすごしていくための子どもへの支援の方法を学ぶ。そのために、支援のための現場でのアセスメントの考え方・方法を学び、障害児と健常児の統合保育の現場や障害児療育の現場における保育者への支援や保護者への支援の内容と支援の具体的流れについて理解する。さらには子どもを支援する地域社会のネットワークの現状を知り、地域社会への働きかけのありかたを探る。

これらを通して、現場から見た発達をみなおす臨床的意味と現場の中での発達とその今日的問題を考える。

2. 教育・研究の個別課題

「障害」の理解－支援ニーズの把握に関する理論

ダウン症の理解と療育

自閉症の理解と療育

保護者理解

障害児保育－保育現場での支援の考え方

3. 教育・研究の方法

講義とディスカッション

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業での発言、取り組みとレポート

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション：障害とは何か－出生前診断をめぐって
- 第2回 ダウン症の理解（1）
- 第3回 ダウン症の理解（2）
- 第4回 ダウン症児の療育
- 第5回 「障害」とはなにか－現場での支援の考え方
- 第6回 自閉症スペクトラム障害の理解（1）
- 第7回 自閉症スペクトラム障害の理解（2）
- 第8回 自閉症スペクトラム障害児の療育（1）
- 第9回 自閉症スペクトラム障害児の療育（2）
- 第10回 障害幼児の療育システム－保育をめぐる問題と支援の事例、コンサルテーションを通して
- 第11回 障害幼児の保護者の理解
- 第12回 障害のアセスメント（1）WISC検査
- 第13回 障害のアセスメント（2）新版K式発達検査
- 第14回 障害児保育－保育現場での支援の実際
- 第15回 まとめ

科目コード	270108		
科目名	臨床心理学特論Ⅱ		
担当者	田中 誉樹		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		

1. 科目の研究目標

この講義は、臨床心理学の諸理論について、できるだけ幅広く、偏りなく概観することによって、基本的な知識を習得し、尚且つ、心理臨床家として他者を理解し、援助するための基本的な態度、方法、倫理などについても学ぶことを目的としている。

2. 教育・研究の個別課題

- ①心理療法を行うために必要とされる臨床心理学的な知識、態度を文献や議論を通して身につけていく。
- ②クライアントとセラピストの関係性（治療関係、転移、逆転移など）の問題について、文献や事例などを通して、様々な角度から検討、考察していく。
- ③リストカットやオーバードーズ、摂食障害、ボーダーラインなど、現代の青年に多く見られる心理的問題について、適宜、臨床心理学的観点から考察する。

3. 教育・研究の方法

学生による発表と討論、教員による解説を基本とする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

出席を含めた平常点30%、レポート70%

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション（臨床心理学とは、どういう学問か）
- 第2回 精神分析（フロイト）
- 第3回 分析心理学（ユング）
- 第4回 対象関係論
- 第5回 認知行動療法
- 第6回 家族療法（システム理論）
- 第7回 来談者中心療法（ロジャーズ）
- 第8回 ゲシュタルト療法（パールズ）
- 第9回 論理情動療法（エリス）
- 第10回 子どもの臨床1（児童分析 A・フロイト）
- 第11回 子どもの臨床2（遊戯療法 アクスライン）
- 第12回 臨床心理学と医療
- 第13回 臨床心理学と福祉
- 第14回 臨床心理学と教育
- 第15回 臨床心理学と倫理

6. 留意事項

学生には、積極的な授業参加（自発的な発言、文献資料への取り組み）が求められる。参考文献は授業中に適宜指示する。

科目コード	270109		
科目名	社会心理学特論 社会心理学の新たな動向を学ぶ		
担当者	石田 正浩		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

近年の社会心理学は、進化や文化といった要因の積極的な取り込みや社会生活のさまざまな場面への応用によって特徴づけられる。本授業の目的は社会心理学の基礎的知識の獲得と同時にこうした新たな動向を理解し、社会的な問題や身近な問題を現代的な社会心理学の視点で解釈でき、可能なら対処を考えられる力を獲得することにある。

2. 教育・研究の個別課題

- ・社会心理学の諸領域の基礎概念・理論を理解する。
- ・自己制御の理論的側面を理解し、その応用可能性について持論を形成する。
- ・文化心理学・進化心理学の考え方を学び、従来の社会心理学の理論にどのような発展が認められるのかを理解する。

3. 教育・研究の方法

社会心理学の新たな動向に関連するテキストや論文から教材を選び、まとめて報告し、そこに含まれる問題をディスカッションする形で授業を進める。必要に応じて、研究手法や分析手法について講義する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業時間中の発表と質疑への取り組み、レポートを基に総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 社会心理学の特徴と研究手法
- 第2回 社会的認知1 対人認知
- 第3回 社会的認知2 ヒューリスティクス
- 第4回 社会的認知3 認知的整合性
- 第5回 社会的認知4 態度
- 第6回 自己過程1 自己概念と自己評価
- 第7回 自己過程2 自己制御－行動的アプローチ
- 第8回 自己過程3 自己制御－認知的アプローチ
- 第9回 社会的影響過程1 社会的促進、規範の影響
- 第10回 社会的影響過程2 多数派と少数派
- 第11回 社会的影響過程3 社会的交換
- 第12回 社会的影響過程4 集団意思決定
- 第13回 文化心理学
- 第14回 進化心理学
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

受講生の人数、予備知識に応じて、授業内容、講義形式は柔軟に変更する。

科目コード	270110		
科目名	精神医学特論 事例の見たてと対応を学ぶ		
担当者	河瀬 雅紀		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
参考文献	『うつ病 知る・治す・防ぐ』福居顯二, 金芳堂 『DSM-V 精神疾患の診断・統計マニュアル』高橋三郎他 (訳), 医学書院 『医療心理学』忠井俊明, 星和書店 『僕のこころを病名で呼ばないで』青木省三, ちくま文庫 『若者の「うつ」』傳田健三, ちくまプリマー新書		

1. 科目の研究目標

心理臨床の現場では、クライアントや患者が示すさまざまな心と行動の問題に直面することになる。そこで本科目では、

- ①精神医学的な診断の枠組みを事例の見立てに応用することができる
- ②臨床心理学的問題を抱える事例を読み取り、精神医学的診断及び治療と関連づけて援助の具体的なプランを立てることができる
- ③種々の臨床心理学的介入法から事例に適したものを選択し、精神医学的診断及び治療と関連づけて具体的な援助プランを立てることができる
- ④他職種との連携、社会資源の活用のある方を説明することができる
- ⑤精神科薬物療法の基本的な事項について説明できることを目標とする。事例を見たと、具体的な支援へと結びつける力は、臨床心理の実習を進めていく上で必須の能力であり、本科目では、仮想事例を通してその実際に学び、臨床心理実践に欠くことの出来ない技能を身につける。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 抑うつ状態の主な病態を挙げ、それぞれの特徴を説明することができる
- (2) 抑うつ状態の主な病態について、各種心理療法を事例に適用する際の留意点を説明することができる
- (3) 抑うつ状態の主な病態について、事例に適した臨床心理学的介入法を選択し、精神医学的診断及び治療と関連づけて具体的な援助プランを立てることができる
- (4) 思春期・青年期の特徴的な事例について、各種心理療法を事例に適用する際の留意点を説明することができる
- (5) 思春期・青年期の特徴的な事例について、適した臨床心理学的介入法を選択し、精神医学的診断及び治療と関連づけて具体的な援助プランを立てることができる

3. 教育・研究の方法

参考図書、プリント資料、スライドなどを用いて、質疑・討論を行い、理解を深める。

毎回の講義後、配布資料および参考文献などにより復習をすること。

4. 成績評価の基準及び評価方法

質疑・討論の参加状況などを総合し評価を行う。

5. 授業予定

- 第1回 事例に対する臨床心理学的アセスメントの基本的事項について
- 第2回 臨床心理学的介入についての考え方
- 第3回 うつを理解する
- 第4回 事例①(うつ)の理解と発展学習
- 第5回 事例②(うつ)の理解と発展学習
- 第6回 事例③(うつ)の理解と発展学習
- 第7回 精神療法的アプローチの実際①
- 第8回 精神療法的アプローチの実際②
- 第9回 精神科薬物療法の理解①
- 第10回 精神科薬物療法の理解②
- 第11回 事例④(思春期青年期のケース-その1)について
- 第12回 事例④(思春期青年期のケース-その1)の解説と発展学習
- 第13回 事例⑤(思春期青年期のケース-その2)について
- 第14回 事例⑤(思春期青年期のケース-その2)の解説と発展学習
- 第15回 精神療法的アプローチの実際③

6. 留意事項

学部で学習した精神医学の基礎を身につけていることを前提に講義は進められる。そのため、受講にあたっては精神医学の基礎知識の再確認をしておくこと。

科目コード	270113		
科目名	臨床心理査定演習 I		
担当者	向山 泰代		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

本演習では、心理臨床の現場で活用されている代表的な心理検査について、アセスメント理論と技能を学ぶ。授業では個別式の知能検査等の実習を通じて、主として人の認知的側面のアセスメントについて学ぶが、その他の心理検査についても、実施例等を素材としてスコアリング実習等を行う。加えて、テスト・バッテリーの組み方、実施にあたっての倫理的配慮、結果の有効な活用に関する学習を通じて、心理アセスメントについての実践的な知識と技能の修得を目指す。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 心理アセスメントの理論と技法を実践的に学ぶ。
- (2) 各種の心理検査の有効性と限界について知る。
- (3) 検査者としての基本的態度と倫理を学ぶ。
- (4) 有用な記録の取り方や結果のまとめ方、所見の書き方について学ぶ。
- (5) 検査結果をいかに個人の統合的理解に結びつけてゆくかを考える。

3. 教育・研究の方法

受講生が互いに検査者と被検者となって心理検査を体験したり、心理検査の実施例のスコアリングや結果についての検討を行う。これら実習と並行して、受講生は各検査が開発された背景や依拠する理論や特徴についてまとめ、発表する。個々の心理検査についての理解を深めた後には、複数のテストによりバッテリーを組み、検査結果の所見を報告書の形でまとめる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

- (1) 各種の心理検査についてのまとめと発表。
 - (2) テスト・バッテリーを組み、所見を報告書としてまとめる期末レポート。
 - (3) 授業参加度、課題への取り組み等の学習態度。
- 以上の3点から総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 心理アセスメント概説
- 第2回 性格検査（質問紙法）（1）：特性論にもとづく検査
- 第3回 性格検査（質問紙法）（2）：連想にもとづく検査

- 第4回 知能検査（1）：WAISの解説と実習（検査1～2）
- 第5回 知能検査（2）：WAISの実習（検査3～7）
- 第6回 知能検査（3）：WAISの実習（検査8～13）
- 第7回 知能検査（4）：WAISのスコアリングと結果の解釈
- 第8回 知能検査（5）：WISCの実習
- 第9回 発達検査（1）：発達障害概説
- 第10回 発達検査（2）：発達検査の実習
- 第11回 神経心理学的検査（1）：高次脳機能障害概説
- 第12回 神経心理学的検査（2）：遂行機能のアセスメント
- 第13回 神経心理学的検査（3）：記憶のアセスメント
- 第14回 アセスメントにおける倫理
- 第15回 アセスメント結果の活用

6. 留意事項

受講生の知識や理解度に応じて、実習の順序を調整することがある。本演習で取り上げる心理検査以外にも、多くの検査が開発されている。様々な心理検査について、受講生による自主的な学習が期待される。

科目コード	270114		
科目名	心理関係法規特論		
担当者	藤川 洋子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		

1. 科目の研究目標

臨床心理士は、教育、医療、福祉、司法、産業などさまざまな領域や職場で働いている。所属する機関によって、臨床心理士の遵守すべき規範（ルール）は異なるが、すべてに通低する倫理次元の問題を深く理解するとともに、それぞれの職域がどのような法律に立脚しているかを理解する。また、心理支援の対象者には、精神障害者、発達障害者、知的障害者らが含まれるが、それぞれについて支援法などが制定されている。具体的な事例をもとに、法に基づく施策を知り、どのようなアドバイスや支援が可能かを学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) インフォームド・コンセントなど、倫理次元の問題の重要性について理解する。
- (2) 刑法、民法の基本性質を学び、各職域において、どのような法的問題が起こりうるかを知る。
- (3) 犯罪事例など具体例を通して、その法的な意味、心理学的な意味を考える。

3. 教育・研究の方法

基本的には発表とディスカッションの形式をとる。関係する法規の制定にいたる背景と理念を分担して要約、発表するなどして理解を深める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業への参加態度、出席、レポート

5. 授業予定

- 第1回 臨床心理士の職業倫理について理解する①
- 第2回 臨床心理士の職業倫理について理解する②
- 第3回 憲法、刑法、刑事訴訟法と心理職の関係について理解する
- 第4回 民法、民事訴訟法と心理職との関係について理解する
- 第5回 子どもの行為をめぐる法律、親の責任について理解する
- 第6回 家庭内の紛争や職業場面で必要な法律を理解する
- 第7回 責任能力をめぐる法律を理解する
- 第8回 社会福祉制度と関連する法律を理解する
- 第9回 古今東西の事例をめぐる社会背景と法、倫理のあり方を理解する①
- 第10回 古今東西の事例をめぐる社会背景と法、倫理のあり方を理解する②
- 第11回 古今東西の事例をめぐる社会背景と法、倫理のあり方を理解する③
- 第12回 教育領域の事例と関連法規（ケース・スタディ）
- 第13回 司法領域の事例と関連法規（ケース・スタディ）
- 第14回 臨床心理士と諸機関との連携のあり方（ディスカッション）
- 第15回 まとめ

科目コード	270115		
科目名	臨床発達心理学実習Ⅰ 乳幼児と親のための子育て支援教室「こがもクラブ」での実践		
担当者	高井 直美・薦田 未央		
単位数	4	期間	通年
配当学年	M1		
テキスト	用いない。		
参考文献	授業中に紹介する。		
備考	連続2コマ		

1. 科目の研究目標

子どもの精神発達の援助、および親への育児支援に関して、学内で実施する子育て支援プログラムの場で実習する。

なおこの科目の内容は、臨床発達心理士の受験資格条件となる「臨床実習」（合計200時間）の一部に充てられるものとして選定される予定である。

2. 教育・研究の個別課題

通年で、特定かつ複数の子どもと関わることを通して、乳幼児期の精神発達の過程を理解し、発達を支える方法や対人関係のありかたを探っていく。また教員の指導のもとで、子育て支援プログラムの立案や、親への援助活動も行っていく。

3. 教育・研究の方法

子育て支援プログラムでは、院生はスタッフの1人として、主に遊びを通して子どもと関わりながら、遊びのプログラムの立案にも関わる。そして、ケースカンファレンス（プログラム直後に行う報告会）やケース検討会（子育て支援プログラムが休みの日に行う）で、自分が関わっている個別事例や子ども同士の関わりについて経過報告を行いながら、自らの関わりを振り返り、よりよい支援のありかたを探っていく。

4. 成績評価の基準及び評価方法

子育て支援プログラムにおける諸活動（プログラムの進行への関与のあり方、担当の子どもとの関わり、個別事例の報告など）を評価する。遅刻・欠席については厳しく減点する。

5. 授業予定

- 第1回 臨床発達心理学の基礎
- 第2回 臨床発達心理士に必要な倫理
- 第3回 子育て支援プログラム「こがもクラブ」の準備
- 第4回 子育て支援プログラム（前期）の実施

- 第5回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第6回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第7回 ケース検討会；前期①（日程は変わることもある）
 第8回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第9回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第10回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第11回 ケース検討会；前期②（日程は変わることもある）
 第12回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第13回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第14回 子育て支援プログラム（前期）の実施
 第15回 前期の支援の振り返り
 第16回 後期の支援の計画
 第17回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第18回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第19回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第20回 ケース検討会；後期①（日程は変わることもある）
 第21回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第22回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第23回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第24回 ケース検討会；後期②（日程は変わることもある）
 第25回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第26回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第27回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第28回 ケース検討会；後期③（日程は変わることもある）
 第29回 子育て支援プログラム（後期）の実施
 第30回 1年間の支援のまとめ

6. 留意事項

ここで行う子育て支援プログラムは、学外から対象者が来訪する対外的なプログラムである。したがって、臨床発達の専門家を目指すものとしての自覚と責任感を持ち、倫理的配慮を行うことが必要とされる。

科目コード	270116		
科目名	臨床発達心理学実習Ⅱ 発達支援の専門家を目指す		
担当者	高井 直美・薦田 未央		
単位数	4	期間	通年集中
配当学年	M2		

1. 科目の研究目標

臨床発達心理学実習Ⅰで学んだ子どもの発達援助および親の育児支援に関して、さらに実践を積んで学ぶことを通して、臨床発達の専門性を身につけていくことを目指す。なおこの科目の内容は、臨床発達心理士の資格条件となる「臨床実習」（合計200時間）の一部に充てられるものとして選定される予定である。

2. 教育・研究の個別課題

受講生の目指す進路やその資質に応じて、①外部実習を行うか、②学内実習を行うか、そのどちらかに分けられる。

いずれにおいても、臨床発達の専門家としてふさわしい力量がつくように、複数のケースの観察による発達アセスメントおよび発達援助方法について、継続的に学んでいく。

3. 教育・研究の方法

①外部実習の場合；発達支援の専門機関に実習生として参加し、発達上の問題や障がいを持つ子どもとその親を支援する現場を体験する。スタッフの一人として子どもと関わること、およびケースカンファレンスでケースの報告を行うことを通して、発達の問題・障がいを理解し、必要な発達援助について、考えていく。

②内部実習の場合；1年次に引き続き、学内での子育て支援のプログラムのスタッフの一人として活動する。特定の担当ケースへの関わりだけでなく、集団全体の力学的変化にも着目し、支援プログラム全体の立案や構成についても、主体的に関わることが要求される。

4. 成績評価の基準及び評価方法

実習を通して、臨床発達心理士として必要な力量を獲得しているかが、評価のポイントになる。具体的には、対象児の観察によるアセスメントのしかた、対象児との関わり、ケース報告の文書、ケースカンファレンスでの発表などが総合的に評価される。

5. 授業予定

- 第1回 前期実習のガイダンス
 第2回 臨床発達に関する実習①
 第3回 臨床発達に関する実習②

- 第4回 臨床発達に関する実習③
- 第5回 ケースカンファレンス①
- 第6回 臨床発達に関する実習④
- 第7回 臨床発達に関する実習⑤
- 第8回 臨床発達に関する実習⑥
- 第9回 臨床発達に関する実習⑦
- 第10回 ケースカンファレンス②
- 第11回 臨床発達に関する実習⑧
- 第12回 臨床発達に関する実習⑨
- 第13回 臨床発達に関する実習⑩
- 第14回 ケースカンファレンス③
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回 後期実習のガイダンス
- 第17回 臨床発達に関する実習⑪
- 第18回 臨床発達に関する実習⑫
- 第19回 臨床発達に関する実習⑬
- 第20回 ケースカンファレンス④
- 第21回 臨床発達に関する実習⑭
- 第22回 臨床発達に関する実習⑮
- 第23回 臨床発達に関する実習⑯
- 第24回 臨床発達に関する実習⑰
- 第25回 ケースカンファレンス⑤
- 第26回 臨床発達に関する実習⑱
- 第27回 臨床発達に関する実習⑲
- 第28回 臨床発達に関する実習⑳
- 第29回 ケースカンファレンス⑥
- 第30回 1年のまとめ

6. 留意事項

外部での実習は、その機関の年間予定に合わせて行われるため、長期休暇中にも行われる。また外部実習先に応じて、実習に関する費用が徴収される。

30回の内容は、実習先によって変化する可能性がある。

科目コード	270120		
科目名	臨床心理査定演習Ⅱ		
担当者	佐藤 睦子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
備考	隔週2コマ連続		

1. 科目の研究目標

本演習では、主に臨床心理士の知識として求められる投影法について実践的に学んでいく。また、投影法検査を実際に施行し、その分析や解釈をおこなうことを通して、心理査定の実践的な適用法を身につける。精神医学的な鑑別診断等も含め、医療や教育をはじめ、さまざまな領域で活用しうる知識・技能の習得を目指す。

2. 教育・研究の個別課題

- 臨床心理査定演習Ⅰを受け、その発展的展開を目指す。
- ・投影法全般についてどのようなものを学ぶ
- ・投影法の実践を行なう
- ・実際の事例をもとに討論する
- ・臨床心理士としての所見の書き方について学ぶ
- ・現在、臨床現場で行われている査定について学ぶ

3. 教育・研究の方法

投影法には、実際の経験が欠かせないため、まず受講者間で施行する。その後、投影法全般について、ディスカッションなどを通じて理解を深める。事例提示を元に、解釈・所見をレポートにしてまとめる力を養う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

検査所見の内容を中心に評価を行なう。さらに、授業への出席、討論への参加態度も評価に加える。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 自分の投影法データを得る
- 第3回 自分以外の投影法データを取る
- 第4回 投影法全般について学ぶ
- 第5回 心理査定における所見作成方法について
- 第6回 臨床事例①の分析
- 第7回 臨床事例①の解釈
- 第8回 臨床事例①の所見作成
- 第9回 臨床事例②の分析
- 第10回 臨床事例②の解釈
- 第11回 臨床事例②の所見作成
- 第12回 臨床現場で行われている検査を学ぶ（神経心理学的査定）
- 第13回 臨床現場で行われている検査を学ぶ（発達心理学的査定）
- 第14回 臨床現場で行われている検査を学ぶ（その他の査定）
- 第15回 まとめ

科目コード	270122		
科目名	人間関係発達特論		
担当者	高井 直美		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

社会・情動発達の基本的理論、および昨今の重要な研究について理解する。さらに、社会・情動発達に問題が生じている子ども、障害を持っている子どもの発達について理解し、教育現場等でどのような支援を行うことができるか、さまざまな観点から考察する。

なおこの科目は、「DP科目」の「社会情動」の1-1から1-7を含む。

2. 教育・研究の個別課題

社会・情動発達の基本的理論、およびいくつかの重要な研究について、文献講読も行いながら、詳細に理解する。さらに、いじめや不登校など社会・情動発達に問題が生じている子ども、さらに自閉症やADHDなど障害を持っている子どもの発達について学び、問題や障害のアセスメントの方法について、実践的に学ぶ。さらには、臨床発達の現場、教育現場等で行われている支援の仕方について理解する。

3. 教育・研究の方法

講義、受講生による文献発表、発達検査の実習など、さまざまな方法を用いる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業中の文献発表、実習における取り組み方などを参考にし、レポートと合わせて総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 社会・情動発達の理論と臨床的意味
- 第2回 社会・情動発達の基本的理解
- 第3回 情動発達の個人差と文化差
- 第4回 胎児期から新生児期にみられる情動と関係の障害
- 第5回 乳幼児期にみられる情動と関係の障害
- 第6回 幼稚園や小学校の集団参入における自己と関係の障害
- 第7回 思春期・青年期の同一性の発達と関係の障害
- 第8回 発達検査の歴史
- 第9回 さまざまな検査の特徴
- 第10回 発達検査または知能検査を使った実習①
- 第11回 発達検査または知能検査を使った実習②
- 第12回 発達検査または知能検査を使った実習③
- 第13回 個別支援計画の立て方
- 第14回 臨床発達の現場での支援
- 第15回 まとめ

6. 留意事項

順番は変わることがある。

科目コード	270131		
科目名	学校カウンセリング特論 学校におけるカウンセリングが果たす意義の理解		
担当者	薦田 未央		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	『学校臨床のヒント』村山正治, 金剛出版, 2007 『スクールカウンセリング モデル100例』かしまえりこ・神田橋條治, 創元社, 2006 『カウンセリングとは何か』平木典子, 朝日選書, 1997		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

児童・生徒の成長の場である学校現場において、その成長・発達を支援する方法についての理解を深める。特に、幼児・児童・生徒の成長の場である学校ではそれぞれの発達課題に由来する困難が多く見られ、教師には対応が求められている。特に、いじめ、不登校、発達障害に起因する教育上の困難さについては具体的な対応が求められている。このような問題について学び、当事者である子ども自身や関係する教師、保護者の理解を深め、その援助についての専門性を探究する。また、援助を直接行う技量を持つ心理士及び教師の養成を行う。

2. 教育・研究の個別課題

1. 幼児・児童・生徒の抱える発達課題と困難性についての理解
2. 学校臨床に求められる知見と技術の理解
3. 学校現場で用いるカウンセリングの基礎についての理解
4. 教職員と学校臨床のコラボレーションのあり方について
5. 学校で生じる諸問題への検討力と対処力の養成

3. 教育・研究の方法

テキストや授業で配布する資料を中心に、学校教育に見られる問題を取りあげ整理する。それに基づき教育と臨床心理学的な視点がどのように補い合うのかを検討する。また、事例を通して個別の問題と共通の課題を理解し、アプローチの方法を検討、議論する。講義とディスカッションを中心に進める。

4. 成績評価の基準及び評価方法

ディスカッション等の授業参加度 (30%)、授業中に課する提出課題 (40%)、期末レポート (30%) の総合評価。

5. 授業予定

- 第1回 学校臨床とは
- 第2回 学校教育と心理臨床のコラボレーション
- 第3回 児童期・思春期の自我発達・発達課題
- 第4回 学校におけるカウンセリングの役割
- 第5回 カウンセリングの技法
- 第6回 アセスメントの技法と所見
- 第7回 相談の実際（事例に学ぶ）①不登校
- 第8回 相談の実際（事例に学ぶ）②いじめ
- 第9回 相談の実際（事例に学ぶ）③発達障害
- 第10回 学校組織における問題の見立て
- 第11回 学校現場でのコンサルテーション
- 第12回 保護者の心理
- 第13回 保護者へのコンサルテーション
- 第14回 スクールカウンセラーの役割
- 第15回 専門機関との連携、まとめ

6. 留意事項

授業予定は、順序が入れ替わることがある。この科目は学校心理士資格取得に関する6「学校カウンセリング・コンサルテーション」の科目に該当する。

科目コード	270132		
科目名	臨床心理地域援助特論		
担当者	佐藤 純・河瀬 雅紀		
単位数	2	期間	集中
配当学年	M12		
テキスト	特になし		
参考文献	『臨床心理地域援助研究セミナー』野島一彦編, 至文堂 『コミュニティ心理学』山本和郎, 東京大学出版会 『がん患者 グループ療法の実際』河瀬雅紀, 金芳堂		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

臨床心理地域援助特論では、個人を対象とした心理療法だけでなく、学校や職場、地域社会の人々に働きかけ適切な心理援助ができるように、予防、危機介入、ソーシャル・サポート、グループアプローチ、コンサルテーションなどの基礎概念とその方法論を学んでいく。そのため、保健・医療・福祉・教育現場と密接に関連づけながら援助の実際も学んでいく。この講義を通して、地域における臨床心理士の役割を理解し、さらに、他職種と連携する上での倫理的問題についても理解する。

2. 教育・研究の個別課題

- 【1】臨床心理地域援助の概念を理解する
- 【2】臨床心理地域援助の方法論を理解する
- 【3】臨床心理地域援助における倫理的問題を理解する
- 【4】保健・医療・福祉・教育領域で必要とされる技法を理解し、実践する力を身につける

3. 教育・研究の方法

講義及び演習

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度50点、レポート50点で評価する

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 集団精神療法の位置づけ
- 第3回 精神保健福祉領域におけるグループアプローチの実際
- 第4回 心理教育、問題解決技法によるミーティング、Social Skills Training
- 第5回 心理教育、問題解決技法によるミーティング、Social Skills Training
- 第6回 心理教育、問題解決技法によるミーティング、Social Skills Training

- 第7回 チームアプローチ、ネットワーキング、精神疾患の早期介入
- 第8回 チームアプローチ、ネットワーキング、精神疾患の早期介入
- 第9回 チームアプローチ、ネットワーキング、精神疾患の早期介入
- 第10回 臨床心理地域援助活動の実際（外来講師による特別講義も予定）
- 第11回 臨床心理地域援助活動の実際（外来講師による特別講義も予定）
- 第12回 臨床心理地域援助活動の実際（外来講師による特別講義も予定）
- 第13回 臨床心理地域援助活動の実際（外来講師による特別講義も予定）
- 第14回 臨床心理地域援助活動の実際（外来講師による特別講義も予定）
- 第15回 臨床心理地域援助活動の実際（外来講師による特別講義も予定）

科目コード	270133		
科目名	臨床心理基礎実習 I		
担当者	伊藤 一美・河瀬 雅紀・ 佐藤 睦子・田中 蒼樹・ 三好 智子・向山 泰代・ 空間 美智子		
単位数	1	期間	前期
配当学年	M1		
備考	(週4時間+外部実習)		

1. 科目の研究目標

心理臨床の場で来談者に接する際、状態像を把握してその病態水準を推測し、その上で予後を見通し、どのような援助が可能であるか検討することが必要である。受講生は、本学付設の心理臨床センター心理相談室において教員が行うインテーク面接に陪席して記録を担当し、初回面接のあり方について学ぶ。また、ケースカンファレンスに参加することによって、情報の検討方法や相談方針の確立など、事例を扱っていく上での基本的な事柄について学んでいく。これらの体験学習を積んだうえで、本学付設の心理臨床センター心理相談室において電話受付を行ったり、実際の事例を担当してゆくことになる。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) インテーク面接の陪席とその記録を担当することを通して、初回面接のあり方や見立て・面接方針の立て方について学ぶ。
- (2) ケース検討会と小グループでの討論、小レポート作成などの実習を通して、情報の検討や相談方針の確立、面接技法の理解など、事例を扱っていく上での基本的な事柄について学ぶ。
- (3) 本学付設の心理臨床センター心理相談室において、さまざまな臨床経験を積み、実践的な感覚を養う。
- (4) 期末におけるまとめの試験において、自分の学んだことをまとめる力を培う。

3. 教育・研究の方法

本学付設の心理臨床センター心理相談室において、インテーク面接の陪席とその記録を行ったり、実際の事例を担当してその経過をまとめ、ケースカンファレンスで発表する。また、電話受付などの相談室の周辺業務についても学ぶ。週4時間の授業時間には、これらインテークケース、継続ケースについてのカンファレンスを行い、内容について報告・検討を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

ケース検討会への出席・発表・討論・小レポート作成、期末に行われる記述式の試験およびインテーク陪席とその記録、電話受付における取り組みから、総合的に評価

する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（1）
- 第3回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（2）
- 第4回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（3）
- 第5回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（4）
- 第6回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（5）
- 第7回 事例研究論文の執筆オリエンテーション
- 第8回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（6）
- 第9回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（7）
- 第10回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（8）
- 第11回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（9）
- 第12回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（10）
- 第13回 学外実習 振り返りとオリエンテーション
- 第14回 インテークカンファレンスと担当者の決定。
担当事例のカンファレンス（11）
- 第15回 期末試験

6. 留意事項

本学付設の心理臨床センター心理相談室における実習とケースカンファレンスは授業期間に限らず、心理相談室の開室期間内であれば長期休暇中にも適宜行われる。受講者は各自、心理専門職を目指すものとしての自覚と責任をもって臨むこと。

科目コード	270134		
科目名	臨床心理基礎実習Ⅱ		
担当者	伊藤 一美・河瀬 雅紀・ 佐藤 睦子・田中 蒼樹・ 三好 智子・向山 泰代・ 空間 美智子		
単位数	1	期間	後期
配当学年	M1		
備考	(週4時間+外部実習)		

1. 科目の研究目標

心理臨床の場で来談者に接する際、状態像を把握してその病態水準を推測し、その上で予後を見通し、どのような援助が可能であるか検討することが必要である。受講生は、本学付設の心理臨床センター心理相談室において教員が行うインテーク面接に陪席して記録を担当し、初回面接のあり方について学ぶ。また、ケースカンファレンスに参加することによって、情報の検討方法や相談方針の確立など、事例を扱っていく上での基本的な事柄について学んでいく。これらの体験学習を積んだうえで、本学付設の心理臨床センター心理相談室において電話受付を行ったり、実際の事例を担当してゆくことになる。これら経験に加えて、本科目では、学外施設での実習を通じて実際の現場において実践的な心理臨床的関わりや援助について経験的に学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) インテーク面接の陪席とその記録を担当することを通して、初回面接のあり方や見立て・面接方針の立て方について学ぶ。
- (2) ケース検討会と小グループでの討論、小レポート作成などの実習を通して、情報の検討や相談方針の確立、面接技法の理解など、事例を扱っていく上での基本的な事柄について学ぶ。
- (3) 本学付設の心理臨床センター心理相談室、学外の実習先においてさまざまな臨床経験を積み、実践的な感覚を養う。
- (4) 期末におけるまとめの試験において、自分の学んだことをまとめる力を培う。

3. 教育・研究の方法

学内実習では、本学付設の心理臨床センター心理相談室において、インテーク面接の陪席とその記録を行ったり、実際の事例を担当してその経過をまとめ、ケースカンファレンスで発表する。電話受付などの相談室の周辺業務についても学ぶ。週4時間の授業時間には、これらインテークケース、継続ケースについてのカンファレンスを行い、内容について報告・検討を行う。学外での実習は、教育機関と医療機関で行われるが、それぞれの機関における対象者への関わりを通じて、心理臨床的援助の

意義や他業種との連携について学ぶ。また、毎回、実習記録を作成することによって実習内容の検討を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

学内実習については、ケース検討会への出席・発表・討論・小レポート作成・期末試験、およびインテーク陪席とその記録、電話受付の実習態度によって評価する。学外実習については、実習への参加状況と毎回の実習記録により評価する。これらの学内実習・学外実習における取り組みから、総合的に評価する。

5. 授業予定

- | | | |
|------|--------------|--------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション | ケース検討会への発表について |
| 第2回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(1) |
| 第3回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(2) |
| 第4回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(3) |
| 第5回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(4) |
| 第6回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(5) |
| 第7回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(6) |
| 第8回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(7) |
| 第9回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(8) |
| 第10回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(9) |
| 第11回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(10) |
| 第12回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(11) |
| 第13回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(12) |
| 第14回 | インテークカンファレンス | と担当者の決定。担当事例のカンファレンス(13) |
| 第15回 | 期末試験 | |

6. 留意事項

学内での実習とケースカンファレンスは授業期間に限らず、心理相談室の開室期間内であれば長期休暇中にも適宜行われる。学外での実習は、原則として週一日(終日)に実施されるが、実習先の状況に応じて長期休暇中にも実施されることがある。以上のように、実習は長期休暇中も継続して行なわれるため、受講者は各自、心理専門職を目指すものとしての自覚と責任をもって臨むこと。

科目コード	270135		
科目名	臨床心理実習 I		
担当者	空間 美智子・河瀬 雅紀・ 向山 泰代・田中 誉樹・ 伊藤 一美・佐藤 睦子・ 三好 智子		
単位数	1	期間	前期
配当学年	M2		
備考	(週4時間+外部実習) 「臨床心理基礎実習 I」を修得済みであること。		

1. 科目の研究目標

本科目は、「臨床心理基礎実習 I・II」(1年次配当)での体験学習の上に成り立っている。学内実習では、本学心理臨床センター心理相談室でケースを担当し、カウンセリング、心理療法、心理検査、心理臨床家としての基本的態度や倫理などについて体験的に学び、ケース検討会で指導を受ける。また本科目では、一年次後期に引き続き学外実習を実施する。学外実習では、心理臨床に関わるさまざまな専門機関で実習を行い、心理臨床家としての基本的な視点について、現場での体験を通して学ぶ。また、現場での自分自身の体験を記述し実習記録としてまとめ、その記録に基づいて実習担当者から個別に指導を受ける。さらに、各相談機関の運営、業務内容等についても、現場で体験を通して学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 学内実習においては、本学心理臨床センター心理相談室でケースを担当することによって、臨床家としての責任ある関わり方、態度、倫理について体験的に学ぶ。
- (2) センターにおいて、電話受付等、相談室の周辺業務についても学ぶ。
- (3) 学内実習では、心理療法の技法について学ぶ。
- (4) 学内実習では、心理検査の施行や解釈について体験的に学ぶ。
- (5) 事例検討会を通して、自分や他の実習者のケースの流れの見方、治療関係の見方などについて学ぶ。
- (6) 学外実習では、医療や教育の専門機関が持つ機能と、その中での臨床心理士の視点、役割等について学ぶ。
- (7) 学外実習では、各機関において、他の専門職との連携、協調、臨床心理士の専門性の特徴などについて考えていく。
- (8) 実習記録の書き方について学ぶ。
- (9) 実習で困ったこと、悩んだことなどについて個別に学内の担当教員とともに考える時間をもち、指導を受けることで実習での経験を意味のあるものにする。

3. 教育・研究の方法

学内実習では、本学付設の心理臨床センター心理相談室において、実際の事例を担当する。電話受付などの相談室の周辺業務についても学ぶ。週4時間の授業時間には、担当ケースについてのカンファレンスを行い、内容について報告・検討を行う。学外実習は、教育機関と医療機関で行われるが、それぞれの機関における対象者への関わりを通じて、心理臨床的援助の意義や他業種との連携について学ぶ。また、毎回、実習記録を作成することによって実習内容の検討を行うほか、各機関での実習内容について全体での報告会を行う。

4. 成績評価の基準及び評価方法

学内実習については、ケース検討会への発表、討論などへの参加、担当事例の報告、電話受付などによって評価される。学外実習については、実習への参加状況、参加態度、実習記録の内容などによって評価される。さらに学期末に試験を行い、それらをもって総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 学外実習 学内実習または事例検討会①
- 第3回 学外実習 学内実習または事例検討会②
- 第4回 学外実習 学内実習または事例検討会③
- 第5回 学外実習 学内実習または事例検討会④
- 第6回 学外実習 学内実習または事例検討会⑤
- 第7回 学外実習 学内実習または事例検討会⑥
- 第8回 学外実習 学内実習または事例検討会⑦
- 第9回 学外実習 学内実習または事例検討会⑧
- 第10回 学外実習 学内実習または事例検討会⑨
- 第11回 学外実習 学内実習または事例検討会⑩
- 第12回 学外実習 学内実習または事例検討会⑪
- 第13回 学外実習 学内実習または事例検討会⑫
- 第14回 学外実習報告会
- 第15回 期末試験

6. 留意事項

学内実習におけるケース担当（およびカンファレンス）は、基本的に長期休暇にかかわらず継続して行われる。ケースを担当するという点についての、臨床家として自覚が求められる。学外実習は、週1日実施されるが、実習先の状況に応じて長期休暇中も行われることがある。そのため実習生は、外部機関に身を置いて勉強していることを自覚して、社会人として、また実習生として責任ある行動をとることが求められる。

科目コード	270136		
科目名	臨床心理実習Ⅱ		
担当者	空間 美智子・河瀬 雅紀・ 向山 泰代・田中 誉樹・ 伊藤 一美・佐藤 睦子・ 三好 智子		
単位数	1	期間	後期
配当学年	M2		
備考	(週4時間+外部実習) 「臨床心理基礎実習Ⅱ」を修得済みであること。		

1. 科目の研究目標

本科目は、「臨床心理実習Ⅰ」ならびに「臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱ」での体験学習の上に成り立っており、大学院での専門的学習のまとめの意味も持つ。

「臨床心理実習Ⅰ」に続いて行われる学内実習では、担当する事例について責任をもってその運営に当たりながら、カンファレンスを通じて、さまざまな事例についての対応や、相談機関の運営について学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 事例の見立てとそれに基づく面接計画を考え、クライアントにとって最も良い心理療法的アプローチを探る。
- (2) 心理面接における技法を習得しつつ、個々の担当事例に関するケース検討会と小グループでの討論などの実習を通じて、問題点を振り返りながら今後の見通しを立てていけるような臨床的視点を養う。
- (3) 担当事例はもちろん、他の受講生の事例報告も含め、さまざまな事例を経験する中で、臨床実践のための理論と方法を学ぶ。

3. 教育・研究の方法

学内実習においては、本学心理臨床センター心理相談室における事例を担当し、ケース検討会においてその発表を行う。電話受付などの相談室の周辺業務についても学ぶ。

また、学内心理臨床センター心理相談室におけるインターケース、継続ケースについてのカンファレンスを行い、内容について報告・検討する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

学内実習については、カンファレンスでの発表・討論などを含む参加態度、担当事例の実施状況の報告内容、電話受付態度などによって評価される。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 学内実習または事例検討会①
- 第3回 学内実習または事例検討会②
- 第4回 学内実習または事例検討会③
- 第5回 学内実習または事例検討会④
- 第6回 学内実習または事例検討会⑤
- 第7回 学内実習または事例検討会⑥
- 第8回 学内実習または事例検討会⑦
- 第9回 学内実習または事例検討会⑧
- 第10回 学内実習または事例検討会⑨
- 第11回 学内実習または事例検討会⑩
- 第12回 学内実習または事例検討会⑪
- 第13回 学内実習または事例検討会⑫
- 第14回 学内実習または事例検討会⑬
- 第15回 期末試験

6. 留意事項

実習ではあっても、心理臨床家としての自覚を持ち、責任を持って取り組むこと。

科目コード	270140		
科目名	理科教育特論		
担当者	小川 博士		
単位数	2	期間	前期集中
配当学年	M12		
テキスト	特になし 授業のための書籍や資料は、適宜提示する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

理科教育学の主要なトピックをレビューし、今後の理科教育に関わる研究と実践の方向性を探る。

2. 教育・研究の個別課題

- ・先行研究を検討し、理科教育学の主要なトピックについて理解すること
- ・理論と実践の往還について考え、理科授業の改善について考察すること

3. 教育・研究の方法

関連文献の購読とディスカッションを主とする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

レポート80%、授業参加度20% により総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 国内外の調査結果に見る日本の理科教育の問題点
- 第3回 素朴概念とその性質
- 第4回 理科教授学習論①（問題解決学習論）
- 第5回 理科教授学習論②（構成主義学習論）
- 第6回 理科教授学習論③（状況論）
- 第7回 概念変容に関わる先行研究
- 第8回 理科学習評価論①（オーセンティック・アセスメント）
- 第9回 理科学習評価論②（ポートフォリオ評価）
- 第10回 理科学習評価論③（パフォーマンス評価）
- 第11回 様々な評価手法（概念地図法、関連図法等）
- 第12回 小学校理科を対象とした指導法に関わる学術論文の講読
- 第13回 小学校理科を対象とした評価法に関わる学術論文の講読
- 第14回 諸外国の理科教育の動向
- 第15回 総括

科目コード	270141		
科目名	音楽教育特論		
担当者	古庵 晶子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	適宜、指示する		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

我が国及び諸外国の音楽教育の歴史・目的（内容を含む）について比較・考察し、音楽教育のあり方について研究し、音楽教育の今日的課題を明確にし、その解決に向けて望ましい教育方法を考案する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・我が国及び諸外国の音楽教育の歴史・目的について理解する。
- ・今日的課題を明らかにし、その解決方法を編み出す。

3. 教育・研究の方法

文献講読

先行研究をもとに、望ましい音楽教育の在り方を研究する

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究に対する積極的な姿勢、レポートや文献講読によるディスカッションをもとに総合的に判断して評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 音楽教育の理念と目的
- 第3回 我が国及び諸外国の音楽教育の歴史
- 第4回 教授・学習過程の検証① 学習内容
- 第5回 教授・学習過程の検証② 指導方法
- 第6回 5領域における音楽
- 第7回 幼小連携と小中連携について
- 第8回 サウンドエデュケーションと創造的音楽学習
- 第9回 他教科との連携
- 第10回 多様な音楽文化とニューカマーの問題
- 第11回 インクルーシブ教育における音楽
- 第12回 音楽教育の在り方① 教育内容
- 第13回 音楽教育の在り方② 教育方法
- 第14回 音楽教育の必要性和教師に求められる実践力
- 第15回 まとめ

科目コード	270144		
科目名	教育実践特別演習 専修免許教員としての実力をつけよう		
担当者	神月 紀輔		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
参考文献	参考文献はその都度提示する。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

専修免許を取得するものとして修了後、実践的課題に即時対応できるようにするため、現場実習などのインターンシップを含めた、実践による教員としての演習を行う。

教育現場で起こりうる課題を解決するための方法や手段を学ぶ。

2. 教育・研究の個別課題

基本的な授業の方法や、心理学的な学習理論を応用した学習デザインを立案し、実践現場にて実習を行う。

実践研究から学習者間のディスカッションを行い、授業や課外活動における教育実践の方法を習得する。

実践的課題から演習のトピックは変更されることがある。

3. 教育・研究の方法

教育効果や評価は、単に直観的なものではなく、データをとり、そのデータと向き合い、客観的に見ることができるようになる。

そのため、心理統計は多く用いることになる。

また、テキスト分析や質的なデータの分析法としてのグラウンディッドセオリー・アプローチなどを用いる場合もある。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業に対する取り組み (40%)

課題レポート (40%)

授業に対する相互評価、自己評価 (20%)

5. 授業予定

第1回 イントロダクション

第2回 実践演習Ⅰ (黒板、教材教具を用いた授業計画)

第3回 実践演習Ⅰ (模擬授業または協力校における授業実践演習)

第4回 実践演習Ⅰ (相互評価、指導助言を受ける)

第5回 実践演習Ⅱ (道徳教育についての授業計画)

第6回 実践演習Ⅱ (模擬授業または協力校における授業実践演習)

第7回 実践演習Ⅱ (相互評価、指導助言を受ける)

第8回 観察実習Ⅰ① (協力校において半日の観察実習)

第9回 観察実習Ⅰ② (協力校において半日の観察実習)

第10回 実践演習Ⅲ (特別活動・外国語活動についての授業計画)

第11回 実践演習Ⅲ (模擬授業または協力校における授業実践演習)

第12回 実践演習Ⅲ (相互評価、指導助言を受ける)

第13回 観察実習Ⅱ① (協力校において半日の観察実習)

第14回 観察実習Ⅱ② (協力校において半日の観察実習)

第15回 自己評価、相互評価、まとめ

6. 留意事項

演習であるので、主体的に学ぶ姿勢が必要である。

実習・演習後は、レポートの提出を毎回求める。

実践演習を学会等の参加に置き換えることもある。

科目コード	270147		
科目名	教科教育演習（理科）		
担当者	小川 博士		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『小学校学習指導要領 解説理科編』文部科学省，大日本図書，2008，978-4477019499		
参考文献	『なぜ、理科を教えるのかー理科教育がわかる教科書』角屋重樹，文溪堂，2013 『今こそ理科の学力を問う』日本理科教育学会，東洋館出版，2012		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

理科授業実践の高度化を目指し、教材研究、指導案作成、模擬授業、振り返りという授業研究のプロセスを通して、実践的に学習する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・小学校における理科の目標及び内容を理解し、教材研究をすることができる。
- ・理科の教授・学習論や評価論を学習指導に適用することができる。

3. 教育・研究の方法

演習（教材開発、指導案作成、模擬授業）を主とする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

学習指導案80%，授業参加度20% で評価する。

5. 授業予定

- 第1回 優れた理科授業の分析（DVDの視聴とディスカッション）
- 第2回 教材開発①（生命）
- 第3回 指導案作成①（生命）
- 第4回 模擬授業①（生命）
- 第5回 教材開発②（地球）
- 第6回 指導案作成②（地球）
- 第7回 模擬授業②（地球）
- 第8回 B区分（生命・地球）の模擬授業の振り返りとディスカッション
- 第9回 教材開発③（物質）
- 第10回 指導案作成③（物質）
- 第11回 模擬授業③（物質）
- 第12回 教材開発④（エネルギー）
- 第13回 指導案作成④（エネルギー）
- 第14回 模擬授業④（エネルギー）
- 第15回 A区分（物質・エネルギー）の模擬授業の振り返りとディスカッション

6. 留意事項

学習指導要領や小学校理科の教科書を熟読すること

科目コード	270148		
科目名	教科教育演習（音楽）		
担当者	古庵 晶子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	適宜、指示する。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

音楽の学習指導についての教材の位置づけ及び取り扱いの問題点などを通して、音楽教材の吟味と楽曲分析を行い、学習指導に適切な教材の教材集を作る。

2. 教育・研究の個別課題

- ・音楽の教科書に示されている教材を分析する。
- ・教材の実践的活用の方法を探る。
- ・音楽科教育における理想的な音楽教材を具体化する。
- ・楽譜作成ソフト「Finale」を扱えるようになる。

3. 教育・研究の方法

教科書に掲載されている教材の楽曲分析をする。
望ましい教材や指導法を考える。
教材を作成する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

研究に対する積極的姿勢と教材開発への創造性やオリジナリティ、及び音楽科教育に対する視野の拡大と研究の深化を総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション 我が国の音楽教育の現状
- 第2回 学習指導要領と教科書との関係及び教材開発の視点
- 第3回 現行教科書の分析① 歌唱領域を中心として
- 第4回 現行教科書の分析② 器楽領域を中心として
- 第5回 現行教科書の分析③ 鑑賞領域を中心として
- 第6回 楽譜作成ソフトの演習 一段譜の作成
- 第7回 楽譜作成ソフトの演習 器楽楽譜の作成
- 第8回 楽譜作成ソフトの演習 合唱楽譜の作成
- 第9回 歌唱および鑑賞活動教材の開発
- 第10回 器楽および鑑賞活動教材の開発
- 第11回 創作活動教材の開発
- 第12回 学習プログラム作成 表現領域を中心として
- 第13回 学習プログラム作成 鑑賞領域を中心として
- 第14回 教授・学習過程の検証と考察① 楽曲分析と活用方法
- 第15回 教授・学習過程の検証と考察② 教材選択と設定

科目コード	270150		
科目名	社会科教育特論		
担当者	大西 慎也		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M12		
テキスト	『小学校学習指導要領解説社会編』文部科学省，東洋館出版，2008，978-4-491-02372-4		
参考文献	『社会科固有の授業理論30の提言』岩田一彦，明治図書，2001，978-4-18-454313-8 『「習得・活用・探究」の社会科授業＆評価問題プラン 小学校編』米田豊，明治図書，2011，978-4-18-022228-5 授業にて紹介する。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

社会科教育の授業構成理論、目標論、評価論、内容論、カリキュラム論を理解し、先人による実践を分析、検討することをとおして、社会科授業を批判的に検討する力を身に付けることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 社会科教育の授業構成理論、目標論、評価論、内容論、カリキュラム論を理解する。
2. 学会誌等の論文を精読し、レポートし、議論する。
3. 先人の実践を分析、検討する。

3. 教育・研究の方法

講義形式で行う。しかし、論文精読や授業分析を行う際は、演習も交えながら進める。講義時間外の自主学習（論文精読やレポート作成など）を要する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業での討議（50%）、レポート（50%）に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 社会科の成立と歩み
- 第2回 学習指導要領の変遷とその背景
- 第3回 「わかる子ども」を育てる授業構成理論
- 第4回 「考える子ども」を育てる授業構成理論
- 第5回 社会科教育における目標論
- 第6回 社会科教育における評価論
- 第7回 社会科教育における内容論
- 第8回 社会科教育におけるカリキュラム論
- 第9回 個人研究と討議①（授業構成理論に関する内容）
- 第10回 個人研究と討議②（目標論、評価論に関する内容）
- 第11回 個人研究と討議③（内容論、カリキュラム論に関する内容）
- 第12回 社会科授業の分析、検討①（地理的分野の内容）
- 第13回 社会科授業の分析、検討②（歴史的分野内容）
- 第14回 社会科授業の分析、検討③（公民的分野の内容）
- 第15回 社会科教育の課題と解決のための方略

科目コード	270151		
科目名	教科教育演習（社会）		
担当者	大西 慎也		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M12		
テキスト	『小学校学習指導要領解説社会編』文部科学省，東洋館出版，2008，978-4-491-02372-4		
参考文献	『社会科固有の授業理論30の提言』岩田一彦，明治図書，2001，978-4-18-454313-8 『「習得・活用・探究」の社会科授業＆評価問題プラン 小学校編』米田豊，明治図書，2011，978-4-18-022228-5 授業にて紹介する		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

先人が行ってきた授業事例に学びながら、授業構成理論、目標論、評価論、内容論、カリキュラム論に基づいた、社会科の授業開発を行う。開発した授業の模擬授業を実践し、授業内容と共に発問、板書についても理解する。

2. 教育・研究の個別課題

1. 社会科の授業開発ができる。
2. 学習指導案の作成方法を理解する。
3. 授業の展開方法や発問、板書の方法を理解する。

3. 教育・研究の方法

模擬授業などの演習中心。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、授業参加度（30%）、開発した社会科授業（50%）、模擬授業（20%）に基づいて総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 模擬授業の在り方と意義
- 第2回 学習指導案の作成方法
- 第3回 授業開発①（教材研究と単元構成について）
- 第4回 授業開発①（目標と評価について）
- 第5回 授業開発①（学習指導案の作成）
- 第6回 授業開発①（模擬授業の実施と事後検討会）
- 第7回 授業開発②（教材研究と単元構成について）
- 第8回 授業開発②（目標と評価について）
- 第9回 授業開発②（学習指導案の作成）
- 第10回 授業開発②（模擬授業の実施と事後検討会）
- 第11回 授業開発③（教材研究と単元構成について）
- 第12回 授業開発③（目標と評価について）
- 第13回 授業開発③（学習指導案の作成）
- 第14回 授業開発③（模擬授業の実施と事後検討会）
- 第15回 まとめ（社会科授業開発について）

科目コード	270153		
科目名	特別研究		
担当者	専任教員		
単位数	4	期間	通年
配当学年	M2		
備考	必修		

1. 科目の研究目標

修士論文作成のための指導科目である。「専門演習」との対応を図りつつ、指導教員の個別指導を中心とする。指導担当者は、院生の研究テーマに応じて定められる。

2. 教育・研究の個別課題

修士論文は以下の観点を中心とした指導を行っていく。

- ①研究の枠組みの妥当性：目的と方法の対応、仮説の適否
- ②文献収集の実績：新しい文献や最新の議論を把握していること
- ③データ処理の適否
- ④解釈と構成：データの意味の解釈の適否、表現の適否
- ⑤独創性：独創的なアイデアや指摘が含まれていること

3. 教育・研究の方法

院生の研究テーマに基づき、主指導教員1名と副指導教員2名による個別指導を行う。また、指導の過程で討議された内容は、「専門演習」において発表され、それはさらに個別指導に生かされることになる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

修士論文への取り組み方、修士論文発表会でのフロアー評価、および完成された修士論文をもとに、総合的に評価する。

5. 留意事項

具体的な内容と進行および指導方法については、指導教員によって示される。

科目コード	270200		
科目名	臨床心理事例研究法演習Ⅰ		
担当者	三好 智子・佐藤 睦子・ 空間 美智子・伊藤 一美・ 田中 誉樹・向山 泰代		
単位数	2	期間	前期集中
配当学年	M2		

1. 科目の研究目標

受講者は、学内実習施設である心理臨床センター心理相談室での事例担当と並行して、スーパービジョンを受ける。事例担当者は心理相談や心理検査等を実習するにあたって、来談者の抱える問題を把握することをはじめ、来談者と担当者との間に信頼関係ができていないか、どのように面接を展開するとよいか等を心理相談の経過に沿って全体的に捉える必要がある。毎回の面接についてまとめたり、振り返ったりする作業を通じて治療過程についての理解とこれを表現する力を養う。さらにスーパービジョンを受けることにより、事例についての一層の理解と面接や検査等に関する知識や技能を高める。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 実習事例を丁寧にまとめ、スーパービジョンを担当する教員に詳しく報告する。
- (2) 教員への報告を通じて自分自身の面接を冷静に振り返る。
- (3) 個別スーパービジョンあるいは少人数での集団スーパービジョンを経験し、事例の理解と面接技能を高め、実践力を養う。
- (4) スーパービジョンでの経験をケース検討会での発表、事例研究論文執筆に活かし、来談者への心理臨床実践に還元する。

3. 教育・研究の方法

本科目では、定期的に事例の経過をスーパービジョン担当教員に報告し、事例の理解や心理相談の進め方などに関して指導を受ける。また、前期終了時に、それまでに区切りのついている事例については、ブリーフレポートにまとめておく。Ⅱ（後期）では、心理相談に関する先行文献も参照しながら、自身の実践についての研究論文執筆に取り組む。

4. 成績評価の基準及び評価方法

臨床心理事例研究法Ⅰ（前期）では、スーパービジョンでの報告内容や事例運営における意欲が評価の対象となる。臨床心理事例研究法Ⅱ（後期）では、スーパービジョンでの報告内容と事例運営の意欲に加え、全担当事例についてのブリーフレポートと学内実習施設での担当事例

に関する事例研究論文等が評価の対象となる。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 担当事例のスーパービジョン (1)
- 第3回 担当事例のスーパービジョン (2)
- 第4回 担当事例のスーパービジョン (3)
- 第5回 担当事例のスーパービジョン (4)
- 第6回 担当事例のスーパービジョン (5)
- 第7回 担当事例のスーパービジョン (6)
- 第8回 担当事例のスーパービジョン (7)
- 第9回 担当事例のスーパービジョン (8)
- 第10回 担当事例のスーパービジョン (9)
- 第11回 担当事例のスーパービジョン (10)
- 第12回 担当事例のスーパービジョン (11)
- 第13回 担当事例のスーパービジョン (12)
- 第14回 担当事例のスーパービジョン (13)
- 第15回 担当事例のスーパービジョン (14)

6. 留意事項

- * 定期的かつ事例の実情に応じて、随時、事例運営についてのスーパービジョンを受ける。学内心理臨床センター心理相談室での実習は長期休暇中にも行われるため、それに従ってスーパービジョンも適宜行われる。
- * 担当事例についてのブリーフレポートは継続、終結、中断等の全ての担当事例について提出を求める。事例研究論文はスーパービジョン担当教員の指導のもとで作成し、臨床心理学専攻専任教員による倫理面でのチェックを受けたのち、提出する。

科目コード	270231		
科目名	発達・学校心理学専門演習 I		
担当者	廣瀬直哉・上田 恵津子・ 尾崎仁美・工藤 哲夫・ 神月紀輔・古賀 一男・ 薦田未央・高井 直美・ 松島るみ		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M1		
備考	発達・学校心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

博士前期課程の間に、発達・学校心理学に関する様々な重要テーマを扱った研究を院生が自分で精力的に行っていくことができるように指導する。

そのために、専攻に属する教員全員で、すべての院生の発表をしっかりと見守りながら、教員各自の専門性を生かして総合的に指導していく。

2. 教育・研究の個別課題

1. 自分の研究テーマを見つけるため、内外の多くの文献を精読する。
2. 文献を整理しながら、オリジナリティのある研究テーマを考えて研究計画を組み立てていく。
3. 他者の研究計画および研究経過発表を聞いて学習したことを、自身の研究計画立案に役立てる。

3. 教育・研究の方法

専攻に属する院生と教員の全員が参加し、研究会方式で進める。院生は各自の研究テーマや研究計画、データ処理、結果と考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問や情報を提供する。報告担当の院生は、事前に口頭発表とそのための資料プリントの用意をする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

出席状況、発表のしかた、資料の作り方、質疑応答（他者が発表している時の質問等も含む）、レポート課題（夏季休暇などに課せられるもの）などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 研究計画および研究経過発表
- 第4回 研究計画および研究経過発表
- 第5回 合同演習 (M2 修士論文中間発表会)
- 第6回 合同演習 (M2 修士論文中間発表会)
- 第7回 合同演習 (M2 修士論文中間発表会)
- 第8回 合同演習 (M2 修士論文中間発表会)
- 第9回 英文雑誌論文講読発表
- 第10回 英文雑誌論文講読発表
- 第11回 英文雑誌論文講読発表
- 第12回 英文雑誌論文講読発表
- 第13回 研究計画および研究経過発表
- 第14回 研究計画および研究経過発表
- 第15回 研究計画および研究経過発表

6. 留意事項

授業の順番は入れ替わることがある。

科目コード	270232		
科目名	発達・学校心理学専門演習Ⅱ		
担当者	廣瀬 尾崎 神月 薦田 松島	直哉・上田 仁美・工藤 紀輔・古賀 未央・高井 るみ	恵津子・ 哲夫・ 一男・ 直美・
単位数	2	期間	後期
配当学年	M1		
備考	発達・学校心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

博士前期課程の間に、発達・学校心理学に関する様々な重要テーマを扱った研究を院生が自分で精力的に行っていくことができるように指導する。

そのために、専攻に属する教員全員で、すべての院生の発表をしっかりと見守りながら、教員各自の専門性を生かして総合的に指導していく。

2. 教育・研究の個別課題

1. 自分の研究テーマを見つけるため、内外の多くの文献を精読する。
2. 文献を整理しながら、オリジナリティのある研究テーマを考えて研究計画を組み立てていく。
3. 他者の研究計画および研究経過発表を聞いて学習したことを、自身の研究計画立案に役立てる。

3. 教育・研究の方法

専攻に属する院生と教員の全員が参加し、研究会方式で進める。院生は各自の研究テーマや研究計画、データ処理、結果と考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問や情報を提供する。報告担当の院生は、事前に口頭発表とそのための資料プリントの用意をする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

出席状況、発表のしかた、資料の作り方、質疑応答（他者が発表している時の質問等も含む）、レポート課題（夏季休暇などに課せられるもの）などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 研究計画および研究経過発表
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 研究計画および研究経過発表
- 第4回 研究計画および研究経過発表
- 第5回 研究計画および研究経過発表
- 第6回 研究計画および研究経過発表
- 第7回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第8回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第9回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第10回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第11回 研究計画および研究経過発表
- 第12回 研究計画および研究経過発表
- 第13回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第14回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第15回 合同演習（M2 修士論文発表会）

科目コード	270233		
科目名	発達・学校心理学専門演習Ⅲ		
担当者	廣瀬 尾崎 神月 薦田 松島	直哉・上田 仁美・工藤 紀輔・古賀 未央・高井 るみ	恵津子・ 哲夫・ 一男・ 直美・
単位数	2	期間	前期
配当学年	M2		
備考	発達・学校心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

院生が自らの研究内容と経過を発表することを通して、研究の問題点を明らかにし、より良い研究論文を作成できるように指導する。

そのために、専攻に属する教員全員で、すべての院生の発表をしっかりと見守りながら、教員各自の専門性を生かして総合的に指導していく。

2. 教育・研究の個別課題

1. 実験・観察・調査を具体的に進めていく中で、生じてくる問題点を整理し、意味のある研究論文に仕上げていく過程を発表する。
2. 他者の研究計画および研究経過発表を聞いて学習したことを、自身の研究論文作成に役立てる。

3. 教育・研究の方法

専攻に属する院生と教員の全員が参加し、研究会方式で進める。院生は各自の研究テーマや研究計画、データ処理、結果と考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問や情報を提供する。報告担当の院生は、事前に口頭発表とそのための資料プリントの用意をする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

出席状況、発表のしかた、資料の作り方、質疑応答（他者が発表している時の質問等も含む）、レポート課題などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 研究計画および研究経過発表
- 第4回 研究計画および研究経過発表
- 第5回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第6回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第7回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第8回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第9回 英文雑誌論文講読発表
- 第10回 英文雑誌論文講読発表
- 第11回 英文雑誌論文講読発表
- 第12回 英文雑誌論文講読発表
- 第13回 研究計画および研究経過発表
- 第14回 研究計画および研究経過発表
- 第15回 研究計画および研究経過発表

6. 留意事項

授業の順番は入れ替わることがある。

科目コード	270234		
科目名	発達・学校心理学専門演習Ⅳ		
担当者	廣瀬直哉・上田 恵津子・ 尾崎仁美・工藤 哲夫・ 神月紀輔・古賀 一男・ 薦田未央・高井 直美・ 松島るみ		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M2		
備考	発達・学校心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

院生が自らの研究内容と経過を発表することを通して、研究の問題点を明らかにし、より良い研究論文を作成できるように指導する。

そのために、専攻に属する教員全員で、すべての院生の発表をしっかりと見守りながら、教員各自の専門性を生かして総合的に指導していく。

2. 教育・研究の個別課題

1. 実験・観察・調査を具体的に進めていく中で、生じてくる問題点を整理し、意味のある研究論文に仕上げていく過程を発表する。
2. 他者の研究計画および研究経過発表を聞いて学習したことを、自身の研究論文作成に役立てる。

3. 教育・研究の方法

専攻に属する院生と教員の全員が参加し、研究会方式で進める。院生は各自の研究テーマや研究計画、データ処理、結果と考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問や情報を提供する。報告担当の院生は、事前に口頭発表とそのための資料プリントの用意をする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

出席状況、発表のしかた、資料の作り方、質疑応答（他者が発表している時の質問等も含む）、レポート課題などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 研究計画および研究経過発表
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 研究計画および研究経過発表
- 第4回 研究計画および研究経過発表
- 第5回 研究計画および研究経過発表
- 第6回 研究計画および研究経過発表
- 第7回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第8回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第9回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第10回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第11回 修士論文経過発表
- 第12回 修士論文経過発表
- 第13回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第14回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第15回 合同演習（M2 修士論文発表会）

科目コード	270235		
科目名	臨床心理学専門演習Ⅰ		
担当者	佐藤睦子・伊藤 一美・ 河瀬雅紀・田中 誉樹・ 三好智子・向山 泰代・ 空間美智子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M1		
備考	臨床心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

この授業は、学生が研究計画や研究経過を発表・報告し、教員や他の学生と討議することを通して研究内容やプレゼンテーションの方法等についての学びを深め、自らの研究の意義や課題を明確にし、独創性・有用性のある研究論文を作成する力を身につけることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 各自の問題意識に沿って先行研究を探索・精読し、臨床心理学的な視点と方法に基づいた研究論文の作成過程や方法、結果の表現法などを学ぶ。
2. 各自の研究の目的・方法・仮説・データ処理の過程・研究成果などについて論理的にまとめ、分かりやすく表現する。
3. 発表や討議から学んだことを、研究計画の策定に活かす。

3. 教育・研究の方法

専攻に所属する学生と教員が全員参加し、研究会方式で進める。学生は各自の研究について、テーマや研究計画、データ処理法、結果、考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問をしたり、情報を提供したりする。発表や質疑応答、討議を通じて、互いの研究への理解を深め、課題や問題意識等を明確にしてゆく。報告担当の学生は、口頭発表と発表に関する資料プリントを事前に準備する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度、発表の内容、事前資料の作り方、発表（プレゼンテーション）の仕方、発表時の質疑応答、授業態度などによって総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 修士論文経過発表
- 第4回 修士論文経過発表
- 第5回 修士論文経過発表
- 第6回 研究計画発表
- 第7回 研究計画発表
- 第8回 研究計画発表
- 第9回 研究計画発表
- 第10回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第11回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第12回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第13回 修士論文経過発表
- 第14回 修士論文経過発表
- 第15回 修士論文経過発表

科目コード	270236		
科目名	臨床心理学専門演習Ⅱ		
担当者	佐藤 睦子・伊藤 一美・ 河瀬 雅紀・田中 誉樹・ 三好 智子・向山 泰代・ 空間 美智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M1		
備考	臨床心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

この授業は、学生が研究計画や研究経過を発表・報告し、教員や他の学生と討議することを通して研究内容やプレゼンテーションの方法等についての学びを深め、自らの研究の意義や課題を明確にし、独創性・有用性のある研究論文を作成する力を身につけることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 各自の問題意識に沿って先行研究を探索・精読し、臨床心理学的な視点と方法に基づいた研究論文の作成過程や方法、結果の表現法などを学ぶ。
2. 各自の研究の目的・方法・仮説・データ処理の過程・研究成果などについて論理的にまとめ、分かりやすく表現する。
3. 発表や討議から学んだことを、研究計画の策定に活かす。

3. 教育・研究の方法

専攻に所属する学生と教員が全員参加し、研究会方式で進める。学生は各自の研究について、テーマや研究計画、データ処理法、結果、考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問をしたり、情報を提供したりする。発表や質疑応答、討議を通じて、互いの研究への理解を深め、課題や問題意識等を明確にしてゆく。報告担当の学生は、口頭発表と発表に関する資料プリントを事前に準備する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度、発表の内容、事前資料の作り方、発表（プレゼンテーション）の仕方、発表時の質疑応答、授業態度などによって総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 研究計画および研究経過発表
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 研究計画および研究経過発表
- 第4回 研究経過発表
- 第5回 研究経過発表
- 第6回 研究経過発表
- 第7回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第8回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第9回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第10回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第11回 修士論文経過発表
- 第12回 修士論文経過発表
- 第13回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第14回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第15回 合同演習（M2 修士論文発表会）

科目コード	270201		
科目名	臨床心理事例研究法演習Ⅱ		
担当者	三好 智子・佐藤 睦子・ 空間 美智子・伊藤 一美・ 田中 誉樹・向山 泰代		
単位数	2	期間	後期集中
配当学年	M2		

1. 科目の研究目標

受講者は、学内実習施設である心理臨床センター心理相談室での事例担当と並行して、スーパービジョンを受ける。事例担当者は心理相談や心理検査等を実習するにあたって、来談者の抱える問題を把握することをはじめ、来談者と担当者との間に信頼関係ができてきているか、どのように面接を展開するとよいか等を心理相談の経過に沿って全体的に捉える必要がある。毎回の面接についてまとめたり、振り返ったりする作業を通じて治療過程についての理解とこれを表現する力を養う。さらにスーパービジョンを受けることにより、事例についての一層の理解と面接や検査等に関する知識や技能を高める。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 実習事例を丁寧にまとめ、スーパービジョンを担当する教員に詳しく報告する。
- (2) 教員への報告を通じて自分自身の面接を冷静に振り返る。
- (3) 個別スーパービジョンあるいは少人数での集団スーパービジョンを経験し、事例の理解と面接技能を高め、実践力を養う。
- (4) スーパービジョンでの経験をケース検討会での発表、事例研究論文執筆に活かし、来談者への心理臨床実践に還元する。

3. 教育・研究の方法

本科目では、定期的に事例の経過をスーパービジョン担当教員に報告し、事例の理解や心理相談の進め方などに関して指導を受ける。また、前期終了時に、それまでに区切りのついている事例については、ブリーフレポートにまとめておく。Ⅱ（後期）では、心理相談に関する先行文献も参照しながら、自身の実践についての研究論文執筆に取り組む。

4. 成績評価の基準及び評価方法

臨床心理事例研究法Ⅰ（前期）では、スーパービジョンでの報告内容や事例運営における意欲が評価の対象となる。臨床心理事例研究法Ⅱ（後期）では、スーパービジョンでの報告内容と事例運営の意欲に加え、全担当事例についてのブリーフレポートと学内実習施設での担当事例

に関する事例研究論文等が評価の対象となる。

5. 授業予定

- 第1回 担当事例のスーパービジョン (1)
- 第2回 担当事例のスーパービジョン (2)
- 第3回 担当事例のスーパービジョン (3)
- 第4回 担当事例のスーパービジョン (4)
- 第5回 担当事例のスーパービジョン (5)
- 第6回 担当事例のスーパービジョン (6)
- 第7回 担当事例のスーパービジョン (7)
- 第8回 担当事例のスーパービジョン (8)
- 第9回 担当事例のスーパービジョン (9)
- 第10回 担当事例のスーパービジョン (10)
- 第11回 担当事例のスーパービジョン (11)
- 第12回 担当事例のスーパービジョン (12)
- 第13回 担当事例のスーパービジョン (13)
- 第14回 担当事例のスーパービジョン (14)
- 第15回 担当事例の振り返り

6. 留意事項

- * 定期的かつ事例の実情に応じて、随時、事例運営についてのスーパービジョンを受ける。学内心理臨床センター心理相談室での実習は長期休暇中にも行われるため、それに従ってスーパービジョンも適宜行われる。
- * 担当事例についてのブリーフレポートは継続、終結、中断等の全ての担当事例について提出を求める。事例研究論文はスーパービジョン担当教員の指導のもとで作成し、臨床心理学専攻専任教員による倫理面でのチェックを受けたのち、提出する。

科目コード	270237		
科目名	臨床心理学専門演習Ⅲ		
担当者	佐藤 睦子・伊藤 一美・ 河瀬 雅紀・田中 誉樹・ 三好 智子・向山 泰代・ 空間 美智子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	M2		
備考	臨床心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

この授業は、学生が研究計画や研究経過を発表・報告し、教員や他の学生と討議することを通して研究内容やプレゼンテーションの方法等についての学びを深め、自らの研究の意義や課題を明確にし、独創性・有用性のある研究論文を作成する力を身につけることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 各自の研究の目的・方法・仮説・データ処理の過程・研究成果などについて論理的にまとめ、分かりやすく表現する。
2. 自分の研究上の課題や問題点を明確にする。
3. 発表や討議から学んだことを、研究論文作成に活かす。

3. 教育・研究の方法

専攻に所属する学生と教員が全員参加し、研究会方式で進める。学生は各自の研究について、テーマや研究計画、データ処理法、結果、考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問をしたり、情報を提供したりする。発表や質疑応答、討議を通じて、互いの研究への理解を深め、課題や問題意識等を明確にしてゆく。報告担当の学生は、口頭発表と発表に関する資料プリントを事前に準備する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度、発表の内容、事前資料の作り方、発表（プレゼンテーション）の仕方、発表時の質疑応答、授業態度などによって総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 修士論文経過発表
- 第4回 修士論文経過発表
- 第5回 修士論文経過発表
- 第6回 研究計画発表
- 第7回 研究計画発表
- 第8回 研究計画発表
- 第9回 研究計画発表
- 第10回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第11回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第12回 合同演習（M2 修士論文中間発表会）
- 第13回 修士論文経過発表
- 第14回 修士論文経過発表
- 第15回 修士論文経過発表

科目コード	270238		
科目名	臨床心理学専門演習Ⅳ		
担当者	佐藤 睦子・伊藤 一美・ 河瀬 雅紀・田中 誉樹・ 三好 智子・向山 泰代・ 空間 美智子		
単位数	2	期間	後期
配当学年	M2		
備考	臨床心理学専攻必修		

1. 科目の研究目標

この授業は、学生が研究計画や研究経過を発表・報告し、教員や他の学生と討議することを通して研究内容やプレゼンテーションの方法等についての学びを深め、自らの研究の意義や課題を明確にし、独創性・有用性のある研究論文を作成する力を身につけることを目標とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 各自の研究の目的・方法・仮説・データ処理の過程・研究成果などについて論理的にまとめ、分かりやすく表現する。
2. 自分の研究上の課題や問題点を明確にする。
3. 発表や討議から学んだことを、研究論文作成に生かす。

3. 教育・研究の方法

専攻に所属する学生と教員が全員参加し、研究会方式で進める。学生は各自の研究について、テーマや研究計画、データ処理法、結果、考察などを段階ごとに報告し、出席者はそれに関して意見や質問をしたり、情報を提供したりする。発表や質疑応答、討議を通じて、互いの研究への理解を深め、課題や問題意識等を明確にしてゆく。報告担当の学生は、口頭発表と発表に関する資料プリントを事前に準備する。

4. 成績評価の基準及び評価方法

授業参加度、発表の内容、事前資料の作り方、発表（プレゼンテーション）の仕方、発表時の質疑応答、授業態度などによって総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 研究計画および研究経過発表
- 第2回 研究計画および研究経過発表
- 第3回 研究計画および研究経過発表
- 第4回 研究経過発表
- 第5回 研究経過発表
- 第6回 研究経過発表
- 第7回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第8回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第9回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第10回 合同演習（M1 修士論文計画発表会）
- 第11回 修士論文経過発表
- 第12回 修士論文経過発表
- 第13回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第14回 合同演習（M2 修士論文発表会）
- 第15回 合同演習（M2 修士論文発表会）

科目コード	270802		
科目名	心理学特殊研究 B (発達心理学)		
担当者	山形 恭子		
単位数	2	期間	前期
配当学年	D12		
テキスト	発達心理学関連の欧米ならびに日本の論文・著書を受講生の研究テーマを考慮して選定し、配布します。		
参考文献	受講生の研究テーマに関連する文献を適宜授業中に紹介します。		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

発達心理学研究の最近の動向を受講生の研究テーマを考慮して、欧米ならびに日本の論文・著書から選定して読解し、研究総覧をおこなうとともに今後の研究の方向性を吟味・検討します。また、受講生の研究テーマを発展させた実証研究を準備し計画するとともに実際にデータ収集して論文作成を目指します。

2. 教育・研究の個別課題

1. 発達心理学研究の最近の動向を学びます。
2. 発達心理学研究の今後の方向性を検討します。
3. 実証研究に関する研究計画を立案して受講生の研究を進展させます。
4. 研究計画を具体的に実施し、結果を分析・検討します。
5. 実証研究の結果を論文にまとめます。

3. 教育・研究の方法

受講生の研究テーマに関連した内外の論文・著書を読解し、これらの文献に関して議論し考察をおこないます。また、実証研究の研究計画を立案して実施し、結果の分析をおこなうとともに論文作成に努めます。

4. 成績評価の基準及び評価方法

論文読解と論文に関する議論への参加を含む授業態度(50%)、論文の要約提出ならびに実証研究の立案(50%)に基づいて総合的に評価します。

5. 授業予定

- 第1回 発達心理学研究の動向と今後の授業計画について紹介する。
- 第2回 発達心理学文献の購読と議論 (1)
- 第3回 発達心理学文献の購読と議論 (2)
- 第4回 発達心理学文献の購読と議論 (3)
- 第5回 発達心理学文献の購読と議論 (4)
- 第6回 発達心理学文献の購読と議論 (5)
- 第7回 発達心理学文献の購読と議論 (6)
- 第8回 受講生の研究テーマに関する研究計画の検討 (1)
- 第9回 受講生の研究テーマに関する研究計画の検討 (2)
- 第10回 受講生の研究テーマに関する研究計画の検討 (3)
- 第11回 実証研究の実施
- 第12回 実証研究の実施
- 第13回 実証研究の結果の分析 (1)
- 第14回 実証研究の結果の分析 (2)
- 第15回 実証研究のまとめ

6. 留意事項

受講生の研究テーマが発展するように研究テーマに関連する諸論文を丁寧に読解し、その問題点を熟考するとともに、今後の研究の方向性を積極的に考え、熱意をもって授業に参加して下さい。

科目コード	270804		
科目名	心理学特殊研究 D (教育評価)		
担当者	松島 るみ・尾崎 仁美		
単位数	2	期間	前期
配当学年	D12		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

教育評価に関する基本概念や歴史的展開、教育評価をめぐる現代的課題について理解を深めるとともに、教育的決定のための評価資料の収集方法や整理および解釈の仕方について理解することを目的とする。

2. 教育・研究の個別課題

1. 教育評価の意義と目的、歴史的展開について理解する。
2. さまざまな評価方法の長所と短所を理解する。
3. 評価資料の収集方法や解釈の方法を学ぶ。
4. 教育評価をめぐる現代的課題について理解を深める。

3. 教育・研究の方法

受講生による発表とディスカッションを中心に進める。参考資料は、授業中に適宜指示をする。

4. 成績評価の基準及び評価方法

評価は、発表・ディスカッションへの参加状況(70%)、レポート(30%)により総合的に行う。

5. 授業予定

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 教育評価の基本的概念
- 第3回 教育評価の意義・目的
- 第4回 教育評価の歴史的展開
- 第5回 教育目標と教育評価の関係
- 第6回 指導に活かす評価のあり方と評価に影響を与える要因
- 第7回 教育評価と心理的影響
- 第8回 教育評価の方法
- 第9回 評価資料の収集法
- 第10回 評価資料の解釈と利用
- 第11回 学校における評価の実際
- 第12回 授業・教師・学校の評価
- 第13回 教育評価の現代的課題
- 第14回 諸外国における教育評価
- 第15回 まとめ

科目コード	270806		
科目名	心理学特殊研究F (心理アセスメント)		
担当者	河瀬 雅紀・向山 泰代		
単位数	2	期間	後期
配当学年	D12		
備考	隔年開講2		

1. 科目の研究目標

本科目では、学部・博士前期課程を通して身につけてきたアセスメント理論と、さまざまな臨床実践での経験を基に、心理臨床に有用なアセスメント・見立ての研究をおこなっていく。

2. 教育・研究の個別課題

- (1) 各派心理療法理論からアセスメントが導き出されるプロセスについて研究する
- (2) 各派心理療法理論におけるアセスメントの異同について研究する
- (3) 臨床実践にとってアセスメントをどのように生かしていくかを研究する

3. 教育・研究の方法

事例、文献等を用いての討議

4. 成績評価の基準及び評価方法

討議内容、レポートなどを総合し評価を行う。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 博士後期課程での研究テーマに関連するアセスメント理論について (1)
- 第3回 博士後期課程での研究テーマに関連するアセスメント理論について (2)
- 第4回 博士後期課程での研究テーマに関連するアセスメント理論について (3)
- 第5回 博士後期課程での研究テーマに関連するアセスメント理論について (4)
- 第6回 博士後期課程での研究テーマに関連するアセスメント理論について (5)
- 第7回 博士後期課程での研究テーマに関連するアセスメント理論について (6)
- 第8回 立脚するアセスメント理論とその他の理論との比較 (1)
- 第9回 立脚するアセスメント理論とその他の理論との比較 (2)
- 第10回 立脚するアセスメント理論とその他の理論との比較 (3)
- 第11回 立脚するアセスメント理論とその他の理論との比較 (4)
- 第12回 立脚するアセスメント理論とその他の理論との比較 (5)
- 第13回 アセスメントの有効性について (1)
- 第14回 アセスメントの有効性について (2)
- 第15回 アセスメントの有効性について (3)

科目コード	270831		
科目名	心理学特殊演習 I		
担当者	河瀬 雅紀・伊藤 一美・ 上田 恵津子・尾崎 仁美・ 古賀 一男・高井 直美・ 田中 誉樹・廣瀬 直哉・ 松島 るみ・向山 泰代		
単位数	1	期間	前期
配当学年	D1		

1. 科目の研究目標

心理学特殊演習 I は、教育・研究テーマが共通あるいは近い関係にある複数の院生と教員によって行われる研究会方式の演習である。

院生が、自らの研究の途中経過や研究成果を演習で発表し、さらには他の院生の発表に対して客観的な見方で意見を述べるなどを通して、自立した研究者になるにふさわしい研究能力や発表のしかたを身につけていくことを目標にする。

2. 教育・研究の個別課題

演習では、科学的心理学の基盤に立つ議論を行うよう努め、研究の信頼性・妥当性の吟味も十分行っていく。そして院生が自らの研究テーマを追求し、具体的な研究の形にしていくように、複数の教員で指導する。

院生は自身の研究テーマを追求するため、内外の研究論文を熟読して発表し、複数の教員・院生と共に、綿密な議論を行うことを通して、自らの研究を展開していく。そして、博士論文作成の準備を行っていく。

3. 教育・研究の方法

各自の研究テーマに沿った発表を行っていく。

通常は、専門に近い院生・教員によって演習を行うが、年に数度、心理学研究科3専攻による合同専門演習で、幅広い専門性を有する教員や院生と共に発表や議論を行っていく。

4. 成績評価の基準及び評価方法

演習での発表および発表資料の作り方、演習での議論への参加などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 演習 (課題の設定) (1)
- 第3回 演習 (課題の設定) (2)
- 第4回 演習 (課題の設定) (3)
- 第5回 演習 (課題の設定) (4)
- 第6回 演習 (課題の設定) (5)
- 第7回 演習 (課題の設定) (6)
- 第8回 3専攻による合同演習 (1)
- 第9回 3専攻による合同演習 (2)
- 第10回 3専攻による合同演習 (3)
- 第11回 3専攻による合同演習 (4)
- 第12回 3専攻による合同演習 (5)
- 第13回 経過発表 (1)
- 第14回 経過発表 (2)
- 第15回 経過発表 (3)

科目コード	270832		
科目名	心理学特殊演習Ⅱ		
担当者	河瀬 雅紀・伊藤 一美・ 上田 恵津子・尾崎 仁美・ 古賀 一男・高井 直美・ 田中 誉樹・廣瀬 直哉・ 松島 るみ・向山 泰代		
単位数	1	期間	後期
配当学年	D1		

1. 科目の研究目標

心理学特殊演習Ⅱは、教育・研究テーマが共通あるいは近い関係にある複数の院生と教員によって行われる研究会方式の演習である。

院生が、自らの研究の途中経過や研究成果を演習で発表し、さらには他の院生の発表に対して客観的な見方で意見を述べるなどを通して、自立した研究者になるにふさわしい研究能力や発表のしかたを身につけていくことを目標にする。

2. 教育・研究の個別課題

演習では、科学的心理学の基盤に立つ議論を行うよう努め、研究の信頼性・妥当性の吟味も十分行っていく。そして院生が自らの研究テーマを追求し、具体的な研究の形にしていくように、複数の教員で指導する。

院生は自身の研究テーマを追求するため、内外の研究論文を熟読して発表し、複数の教員・院生と共に、綿密な討論を行うことを通して、自らの研究を展開していく。そして、博士論文作成の準備を行っていく。

3. 教育・研究の方法

各自の研究テーマに沿った発表を行っていく。

通常は、専門の近い院生・教員によって演習を行うが、年に数度、心理学研究科3専攻による合同専門演習で、幅広い専門性を有する教員や院生と共に発表や討論を行っていく。

4. 成績評価の基準及び評価方法

演習での発表および発表資料の作り方、演習での議論への参加などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 経過発表(1)
- 第2回 経過発表(2)
- 第3回 経過発表(3)
- 第4回 経過発表(4)
- 第5回 経過発表(5)
- 第6回 経過発表(6)
- 第7回 3専攻による合同演習(1)
- 第8回 3専攻による合同演習(2)
- 第9回 3専攻による合同演習(3)
- 第10回 3専攻による合同演習(4)
- 第11回 経過発表(7)
- 第12回 経過発表(8)
- 第13回 3専攻による合同演習(5)
- 第14回 3専攻による合同演習(6)
- 第15回 3専攻による合同演習(7)

科目コード	270833		
科目名	心理学特殊演習Ⅲ		
担当者	河瀬 雅紀・伊藤 一美・ 上田 恵津子・尾崎 仁美・ 古賀 一男・高井 直美・ 田中 誉樹・廣瀬 直哉・ 松島 るみ・向山 泰代		
単位数	1	期間	前期
配当学年	D2		

1. 科目の研究目標

心理学特殊演習Ⅲは、教育・研究テーマが共通あるいは近い関係にある複数の院生と教員によって行われる研究会方式の演習である。

院生が、自らの研究の途中経過や研究成果を演習で発表し、さらには他の院生の発表に対して客観的な見方で意見を述べるなどを通して、自立した研究者になるにふさわしい研究能力や発表のしかたを身につけていくことを目標にする。

2. 教育・研究の個別課題

演習では、科学的心理学の基盤に立つ議論を行うよう努め、研究の信頼性・妥当性の吟味も十分行っていく。そして院生が自らの研究テーマを追求し、具体的な研究の形にしていくように、複数の教員で指導する。

院生は自身の研究テーマを追求するため、内外の研究論文を熟読して発表し、複数の教員・院生と共に、綿密な討論を行うことを通して、自らの研究を展開していく。そして、博士論文作成の準備を行っていく。すなわち、査読つき論文2編以上の投稿を目指す。また、国内外において学術的な交流が可能になるよう、十分な英語能力の習得を目指す。

3. 教育・研究の方法

各自の研究テーマに沿った発表を行っていく。

通常は、専門の近い院生・教員によって演習を行うが、年に数度、心理学研究科3専攻による合同専門演習で、幅広い専門性を有する教員や院生と共に発表や討論を行っていく。

4. 成績評価の基準及び評価方法

演習での発表および発表資料の作り方、演習での議論への参加などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 演習(課題の設定)(1)
- 第3回 演習(課題の設定)(2)
- 第4回 演習(課題の設定)(3)
- 第5回 演習(課題の設定)(4)
- 第6回 演習(課題の設定)(5)
- 第7回 演習(課題の設定)(6)
- 第8回 3専攻による合同演習(1)
- 第9回 3専攻による合同演習(2)
- 第10回 3専攻による合同演習(3)
- 第11回 3専攻による合同演習(4)
- 第12回 3専攻による合同演習(5)
- 第13回 経過発表(1)
- 第14回 経過発表(2)
- 第15回 経過発表(3)

科目コード	270834		
科目名	心理学特殊演習Ⅳ		
担当者	河瀬 雅紀・伊藤 一美・ 上田 恵津子・尾崎 仁美・ 古賀 一男・高井 直美・ 田中 誉樹・廣瀬 直哉・ 松島 るみ・向山 泰代		
単位数	1	期間	後期
配当学年	D2		

1. 科目の研究目標

心理学特殊演習Ⅳは、教育・研究テーマが共通あるいは近い関係にある複数の院生と教員によって行われる研究会方式の演習である。

院生が、自らの研究の途中経過や研究成果を演習で発表し、さらには他の院生の発表に対して客観的な見方で意見を述べるなどを通して、自立した研究者になるにふさわしい研究能力や発表のしかたを身につけていくことを目標にする。

2. 教育・研究の個別課題

演習では、科学的心理学の基盤に立つ議論を行うよう努め、研究の信頼性・妥当性の吟味も十分行っていく。そして院生が自らの研究テーマを追求し、具体的な研究の形にしていくように、複数の教員で指導する。

院生は自身の研究テーマを追求するため、内外の研究論文を熟読して発表し、複数の教員・院生と共に、綿密な討論を行うことを通して、自らの研究を展開していく。そして、博士論文作成の準備を行っていく。すなわち、査読つき論文2編以上の投稿を目指す。また、国内外において学術的な交流が可能になるよう、十分な英語能力の習得を目指す。

3. 教育・研究の方法

各自の研究テーマに沿った発表を行っていく。

通常は、専門に近い院生・教員によって演習を行うが、年に数度、心理学研究科3専攻による合同専門演習で、幅広い専門性を有する教員や院生と共に発表や討論を行っていく。

4. 成績評価の基準及び評価方法

演習での発表および発表資料の作り方、演習での議論への参加などを総合的に評価する。

5. 授業予定

- 第1回 経過発表（1）
- 第2回 経過発表（2）
- 第3回 経過発表（3）
- 第4回 経過発表（4）
- 第5回 経過発表（5）
- 第6回 経過発表（6）
- 第7回 3専攻による合同演習（1）
- 第8回 3専攻による合同演習（2）
- 第9回 3専攻による合同演習（3）
- 第10回 3専攻による合同演習（4）
- 第11回 経過発表（7）
- 第12回 経過発表（8）
- 第13回 3専攻による合同演習（5）
- 第14回 3専攻による合同演習（6）
- 第15回 3専攻による合同演習（7）

科目コード	270835		
科目名	後期特別研究Ⅰ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	通年
配当学年	D1		

1. 科目の研究目標

博士論文作成にかかわる研究指導を行う。さまざまな専門分野で研究している教員から指導を受けられる機会を提供し、博士論文作成に必要な幅広い知識と柔軟な思考、そして独創性を育成する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・研究テーマと研究計画の立案
- ・文献による先行研究の検討
- ・方法論の確立
- ・データの分析
- ・論文の執筆

3. 教育・研究の方法

院生の研究テーマに基づいて、主指導教員1名と副指導教員2名以上を決めて、個別指導を行う。また、指導の過程で討議された内容は、心理学特殊演習において発表され、それはさらに個別指導に生かされることになる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

質疑・討議の参加状況、研究内容から総合的に評価する。

5. 留意事項

後期特別研究Ⅰでは、主論文（博士論文）についての研究テーマと研究計画の立案を目指し、院生には数多くの文献にあたらせて、客観的な理解を促す。すなわち、心理学研究としてどのような意義をもつ研究であるかについて、深く省察するように指導する。加えて、副論文および参考論文の作成指導も行う。授業の進行は、個々の研究内容にしたがって計画される。

科目コード	270836		
科目名	後期特別研究Ⅱ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	通年
配当学年	D2		

1. 科目の研究目標

博士論文作成にかかわる研究指導を行う。さまざまな専門分野で研究している教員から指導を受けられる機会を提供し、博士論文作成に必要な幅広い知識と柔軟な思考、そして独創性を育成する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・研究テーマと研究計画の立案
- ・文献による先行研究の検討
- ・方法論の確立
- ・データの分析
- ・論文の執筆

3. 教育・研究の方法

院生の研究テーマに基づいて、主指導教員1名と副指導教員2名以上を決めて、個別指導を行う。また、指導の過程で討議された内容は、心理学特殊演習において発表され、それはさらに個別指導に生かされることになる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

質疑・討議の参加状況、研究内容から総合的に評価する。

5. 留意事項

後期特別研究Ⅱでは、主論文（博士論文）についての研究テーマと研究計画の立案そして方法論の確立を目指し、院生には数多くの文献にあたらせて、客観的な理解を促す。すなわち、心理学研究としてどのような意義をもつ研究であるかについて、深く省察するように指導する。加えて、副論文および参考論文の作成指導も行う。授業の進行は、個々の研究内容にしたがって計画される。

科目コード	270837		
科目名	後期特別研究Ⅲ		
担当者	専任教員		
単位数	2	期間	通年
配当学年	D3		

1. 科目の研究目標

博士論文作成にかかわる研究指導を行う。さまざまな専門分野で研究している教員から指導を受けられる機会を提供し、博士論文作成に必要な幅広い知識と柔軟な思考、そして独創性を育成する。

2. 教育・研究の個別課題

- ・研究テーマと研究計画の立案
- ・文献による先行研究の検討
- ・方法論の確立
- ・データの分析
- ・論文の執筆

3. 教育・研究の方法

院生の研究テーマに基づいて、主指導教員1名と副指導教員2名以上を決めて、個別指導を行う。また、指導の過程で討議された内容は、心理学特殊演習において発表され、それはさらに個別指導に生かされることになる。

4. 成績評価の基準及び評価方法

質疑・討議の参加状況、研究内容から総合的に評価する。

5. 留意事項

後期特別研究Ⅲでは、主論文（博士論文）についてのデータの分析と論文の執筆を目指し、院生には数多くの文献にあたらせて、客観的な理解を促す。すなわち、心理学研究としてどのような意義をもつ研究であるかを理解し、研究目的に沿ってデータの分析を進め、論文執筆を指導する。加えて、副論文および参考論文の作成指導も行う。授業の進行は、個々の研究内容にしたがって計画される。